3
成田良悟
Narita Ryohgo
イラスト／森井しづき
原作／TYPE-MOON
Illustration:Morii Siduki
Original Planning:TYPE-MOON
Fate strange Fake
フェイト／ストレンジ フェイク
電撃文庫

CONTENTS

青年の心に、懐なつかしさすら感じさせる言葉が思い出される。
──「君よ、君よ。よくお聞きなさい、同胞の子よ」
──「君達が討うち滅ほろぼすべきものは、我々から何かを奪おうとする者達です」
──「君の両親も、外から来た人間によって奪われました」
──「君の父親『達』は外の穢けがれに満ちた侵略者達に殺されました」
──「君の母親も外から来た恐ろしき悪あく魔まに拐かどわかされました」
──「君よ、だから討ち滅ぼしなさい。我々から奪おうとする者を」
──「君よ、だから戦いなさい。いつか君の母親を我々の手に取り戻せるように」

次いで、懐かしくもないが、もう聞けないであろう声が響ひびき渡わたる。
──「へえ。ボクのこれを見ても動じないなんて、肝が据ってるんだねぇ！」
──「いや、違うか……フウン、君って随分と中身が希き薄はくなんだなあ」
──「そんな君に、いい事を教えてあげるよ」
──「君達の事を『君、君』って五月蠅うるさく言ってた魔ま術じゅつ使つかい達、みんな死んじゃったよ？」

二種類の『声』を思い出した青年は、それぞれの時に抱いた感情について思い返す。

怒りも悲しみもなく、『そうなんだ』としか思えないまま、ただ言葉だけを受け入れていた。

それが自然だと思っていたが、最後の言葉を聞き、当時まだ少年だった彼は気付く。

──「ああ、あと、君のお母かあさん……日に本ほんっていう国で、もうとっくに死んでるよっ……と」

嘲あざけるように言われたその言葉を聞いても、何も感じなかった自分は──
同じような事を言われて叫さけび喚わめく周囲の同胞達と比べて、ほんの少しだけ、何かがズレているのではないかと。

──なんで、こんな事を思い出したんだろう。

青年が一人ひとり、夜の沼地を歩む。
双そう眸ぼうを軍用ゴーグルで覆おおい隠かくし、身体からだにいくつかの武器と魔術礼装を装着しているが、軍人とも魔ま術じゆつ師しとも些いささか雰囲気の異なる青年だ。

──ああ、そうか。

供も連れず、敵もおらず、独りきりの行軍を続けながら青年は左手の手袋を外す。
手の甲に妖あやしく浮かぶのは、強い魔力が渦巻くタトゥーのよう

な紋様。
　聖せい杯はい戦せん争そうのマスターの証あかしである令れい呪じゅを見ながら、青年はどこか煩わずらわしそうに眼めを細めた。

　━━俺おれを生んだという人が死んだのも、『聖杯戦争』という話だからか……。

　本来の聖杯戦争において、令呪を持つべき魔術師は聖杯が選ぶという。
　アインツベルン、マキリ、遠とお坂さかの御ご三さん家けには優ゆう先せん的てきに宿る仕組みになっていると言われているが、スノーフィールドの聖せい杯はいにも、そうした贔ひい屓きめいたシステムが組み込まれていた。
　呼び水とする生いけ贄にえの英えい霊れい達を喚よぶ為ための令れい呪じゅの内二つは警けい察さつ署しよ長ちようと繰くる丘おか家けの魔ま術じゆつ師しに宿る予定であり、真なる英霊達を喚ぶ為の七つの令呪は、一つ残さずこの聖せい杯はい戦せん争そうの『黒幕』側の人間に宿る形となっていたのである。
「……」
　無言のまま、青年はその令呪を睨ねめ付つけた。
　その眼まな差ざしには困惑も怒りも愉悦もなく、感情と呼べるものが揺らいだ様よう子すは欠片かけらもない。
　青年は手袋を嵌はめると、孤独な道のりを再び無言のまま歩み続けた。

　彼はシグマ。
　それは名ではなく、ただの記号。
　籠こめられた願ねがいなどなく、二十四人の『類似個体』を識しき別べつする為に割り当てられたギリシア文字の一つに過ぎない。
　その『類似個体』も大半が失われ、今ではそうした識別の意味すら

消失しているのだが。

　シグマは自分の現在の職しよく業ぎようを、軽い魔術が使える傭よう兵へいだと認識していた。
　自分を『こちら側』に引き込んだ雇い主の許もとで、淡々と仕事をこなす日々を送っている。
　今回与えられた任務は、これまでのものと些いささか趣おもむきが異なるものだった。
　通常の戦争という形とは遠くかけ離はなれた戦争──『聖杯戦争』に参加する事。
　ただ、それだけだった。
　英霊と呼ばれるものを召喚し、戦いに参加しさえすれば良い。
　他者のサポートをする必要も、敵対者を積せつ極きよく的てきに殺す必要もない。
　──『英霊を喚び出したら、後は好きにすればいいよ。適当に逃げ回ってもいいし、なんなら私を殺しに来てもそれはそれで面おも白しろいかも！　革命って奴やつだね！　君の国で起きた事と一いつ緒しよだよ！』
　巫山戯ふざけた調ちよう子しで語られた雇い主の言葉を思い出し、青年は考える。
　──本当に一緒なのだろうか？
　──あの国の崩ほう壊かいと、俺おれが彼女に逆らう事は同一視されるものなのか？
　雇い主の軽口を真剣に捉とらえ、行軍を続けながら一ひと頻しきり考えるが、結局答えを出す事はできなかった。
　──聖杯。
　──その妙なものに聞けば、教えてくれるんだろうか。

　魔術師達とも、通常の人間ともどこかズレた事を考えた所で、青年は目的地に辿たどり着つく。

一見すると廃はい屋おくのようにも見える、沼地の中に立つ小さな屋や敷しきだ。

—―『儀ぎ式しきの道具とかも揃そろってるから、君はただ喚よぶだけで大丈夫だよ！　余計な触媒はもうこっちで全部処理したしね！　あ、何が来たかは私にも報告しなくていいよ。こういうのは後から知る方が面おも白しろいから！』

雇い主はそんな事を言っていたが、ファルデウスからは『召喚した英えい霊れいが何かは、私には個別に報告するように』と釘くぎを刺されている。ファルデウスは直接の雇い主ではないが、雇い主であるフランチェスカから口止めされていないという事は、話しても問題ないという事だろう。

仮かり初そめの英霊を喚び出した魔ま術じゅつ師しの所有物との事だが、その元の所有者がどうなったのか、喚び出された英霊がなんだったのかについてシグマは別段興きよう味みを持つ事はなかった。

シグマは知らない。

この屋敷の地下で喚び出された英霊が、神仏の類たぐいを一切信仰せぬ自分とは、まるで逆の存在だったという事を。

そして、これから自分が喚び出すモノが、英雄とも神魔の類とも表しがたい—―

—―際異常な『現象』であるという事も。

開戦の日の夜明け。

スノーフィールドという歪いびつな戦場に、全すべてのピースが揃そろおうとしていた。

最後に組み上げられる絵の完成図すら、誰だれ一人ひとり想像できぬままに。

これは、ある逃亡者の物語。

己おのれの罪から目を逸そらし、迫り来る『罰』に背を向けた一人ひとりの女。

希望もなく、行く当てもなく、一歩先の道すら見えぬまま、それでも止まる事すらできずに彼女はただ、逃げ続けた。

末路には破滅しか無いのだと知りながら、逃亡者の女はそれでも何かに縋すがり続つづける。

冬ふゆ木きという街の一画に存在する、『蝉せみ菜なマンション』と呼ばれる集合住宅。

そこが全すべての起点であり、『彼女』にとって世界の果てでもある場所だ。

今の『彼女』にとって、あのマンション以前の思い出など意味がない。

逃とう避ひを重ねるうちに、余分な過去は全て剝はがれ落おち、意味のない存在へと堕おちていく。

今の『彼女』に残っているものは、罪の意い識しきと罰への恐怖。そして──そんな彼女を見つめ続ける、赤い頭ず巾きんを被かぶった少女らしき【何か】の姿だけだった。

それが本当に存在している何かなのか、あるいは自分の罪の意い識しきが見せる幻覚なのか、それは彼女にも解わからないし、結局見えてしまう以上は、どちらだろうと差異はない。少なくとも彼女はそう考えていた。

救いを求め、冬ふゆ木きの丘の上にある教会へと足を運んだ事もある。
もはやおぼろげな記き憶おくだが──そこで出会った神父に、何かを言われた気がした。
気がした、というのは、その前後の記憶が曖あい昧まいだからだ。

『──、■■が■■■■■■の──』
『まさか────始末──』

奇妙な事だというのは解っているのだが、深く思い出そうとすると頭が痛む。

『結局の所、■■は───』

思い出せないというのに不ふ思し議ぎな話なのだが、『あの教会には二度と近づいてはならない』と、火に怯おびえる獣けもののような忌き避ひ感かんだけが、逃亡者の本能に深く刻み込まれていた。

そして、彼女は冬木の街からも逃げ出し、何カ月も何年も当てもなく彷徨さまよい続つづける。
背後の闇やみの中に、夜の暗がりの奥に、街の光が生み出す影かげの裏側に、常に『赤あか頭ず巾きん』の気配けはいを感じながら。
──私は、どうすればいいんだ。
懊おう悩のうに堪たえ忍しのぶ事もできず、生きる屍しかばねのように各地を彷徨い続けた彼女は、やがて、何かに引き寄せられるかのように冬木の街へと舞まい戻もどった。
神父が替わったという噂うわさを街で聞いたが、やはり『教会』に

足を運ぶ気にはなれず、さりとて自宅だった筈はずの蝉せみ菜なマンションにも戻るわけにはいかず、彼女はただ、街の中に己おのれという屍を歩ませ続ける。

　そして──行き場を探し続けた彼女は、『森の中に洋よう館かんがある』という噂を聞いた。
　幽ゆう霊れいが出るなどという噂もあるその洋館の話を聞き、彼女は自然とそこに向かう。
　本当にそんな噂があるのなら、もしも本当に幽霊が出るのならば、この目で見なければならないと。
　自分の周囲の闇に潜ひそむ『赤頭巾』が『それら』と同等の物なのか確たしかめたい。
　そんな理由をこじつけた彼女は、あるいは、死に場所を探していたのかもしれなかった。
　もっとも、同じような噂うわさがあった山の上の寺に足を運んだ際、池で珍しい魚が暴あばれているのを見る事しかできなかったので、噂話に大した期待はしていなかったのだが。
　それでも森に足を運んだのは、街の中にいるよりはマシだと考えたからだ。
　少なくとも、森の中ならば『赤あか頭ず巾きん』は出てこない。
　彼女が逃とう避ひ行こうの中で見つけた法則を守りながら、御お伽とぎ噺ばなしの魔ま女じよの森めいた木々の合間を歩み続けていると──この地域の雰囲気にそぐわぬ巨大な洋よう館かんが、彼女の前にその姿を現した。
　こんな巨大な洋館が人知れず建っている事の不気味さを覚える前に、もはや城と呼んで差し支えない荘そう厳ごんな佇たたずまいに圧倒される。
　城を遠巻きに眺めるだけで、逃亡者である女は、決してその中に入ろうとしなかった。
　彼女は怖れていたからだ。あの巨大な屋や敷しきの中には、簡かん

易いエレベーターのようなものが設置されているのではないかと。
『赤頭巾は、エレベーターの中に現れる』。
　それも法則の一つだが、理由は考えるまでもなかった。
　警けい戒かいを抱きながら城の周りを散策する彼女だが、その内に、自分の心に変化が起きているのを感じ取る。
　──なんだろう。
　──不ふ思し議ぎと、なんていうか……ええと……。
　──うん……落ち着く。
　理由は解わからないが、ここ数年味わう事の無かった安あん堵どを胸に抱いた彼女は、その後も何度か森の城を訪れるようになった。
　城に足を踏み入れる事はなく、本当に、ただそこに在り続ける景色けしきに身を委ゆだねるように。

　そして、数カ月後──
　いつもと同じように城を訪れた彼女の耳に、何か言い争いをするような女性同士の声が聞こえてくる。
　初めて感じた人の気配けはいに驚おどろきはしたが、特段不思議な事だとは考えなかった。
　庭園に咲き誇る花を見れば、少なくとも誰だれかがそこを管理しているのは明らかなのだから。
　彼女はこの城の関係者がどのような人物なのかが気になり、木陰に隠れながら声のする方にそっと近寄っていった。
　すると、彼女の視界に、二人ふたりの女性の姿が映る。
　ひと目見るなり、その二人は双子か姉妹だろうと考えた。
　純白と見み紛まがう程に透き通った美しい銀髪と、雪原を思わせるような白い肌。
　遠目にも解る赤い瞳ひとみも併あわせて、あまりにも特徴が良く似ていたからだ。
　そんな二人ふたりが何やら口こう論ろんをしているかのようだったが、片方は相手を諭さとすような調ちよう子しであり、片方はただ怒

りに身を任せているような雰囲気に思える。
「そんな事に意味など欠片かけらも無い筈はずです。フィリア、一体貴女あなたは何を……」
「もういい！　貴女達には頼まない……私一人ひとりでやり遂げる！」
　あの二人は、一体何者なのだろう。
　やはりこの城は海外の富豪か何かの別荘で、そこから来た関係者なのだろうか。
　そんな事を考えながら、逃亡者は二人の『白い女』を観かん察さつし続つづける。
　しかし、彼女達は外国人というよりも、もっと異質な雰囲気を漂わせていると彼女は思った。
　まるで、御お伽とぎ噺ばなしの中から抜け出してきたかのような──
　妄想めいた推測に耽ふける逃亡者の女は、自分の気配けはいが隠しきれていない事には欠片も気付いていなかった。
「たとえアインツベルンの名を捨ててでも、私は──」
　激げつ昂こうしていた方の女が、そこでピタリと動きを止める。
「……誰だれ？」
　表情を完全に消し去りながら振り返った女の顔が、非常に美しかった事は覚えている。
　だが、そこまでだ。
　白い女と目を合わせてから先の記き憶おくは、教会を訪れた時と同じく、非常に曖あい昧まいなものとなっている。
　恐らくは。魔ま術じゆつによる暗示か何かをかけられたのだろう。
『そういうもの』があるという事は、後からその『白い女』によって頭に叩たたき込こまれた。

『貴女は■■？　それとも■■■■■■■』

教会と違い、城や白い女そのものに忌き避ひ感かんは無い。

『一体どんな偶然？　まさか■■■──』
『まさかこれほどの……いえ、どうでもいいわ』

だが、その時の事を詳しく思い出そうとすると、頭の奥が軋きしむのは同じだった。
やはり暗示か何かを受けたのだろうと彼女は思う。
あるいは、教会でもあの神父と■■に同じ事をされたのかもしれない。

■■。

神父と一いつ緒しよに居た『何か』。
その存在を思い出そうとすると、やはり脳のう髄ずいが軋きしみ、記き憶おくがぼやける。
城にいた女と神父。
逃亡者に過ぎなかった自分を現在の状況に導みちびいたのがその二人ふたりだというのは良く解わかっているのだが、どうしても彼らと出会った時にかけられた言葉を思い出す事ができなかった。
白と黒の曖あい昧まいな記憶が、彼女の頭の中で勾まが玉たま紋もんのように渦巻き続ける。
ただ、神父が横にいた『何か』に対して告げた言葉は、一つだけ覚えていた。

──『コレの末路に興きよう味みが湧わいた。お前がかつて私にやった事だろう？』

そして、城において、白い女に言われた事も一つだけよく覚えている。

　──『お前には、己おのれの末路を選ぶ権利はない。私が生きる意味を与えてやろう』

　神父と白い女、双方の言葉に刻まれた『末路』という単語は呪じゅ詛そとなり、やがて逃亡者は白い女の言う通り、周囲に流されるまま日に本ほんを後にする事となった。
　逃亡者の女──アヤカ・サジョウは、アメリカで『魔ま術じゅつ的てきな戦争』に巻き込まれた今日きょうも、答えを探して彷徨さまよい続つづける。

　──どうすれば、私の罪は許される？

　──私は一体……この街で何をすればいいんだ。

×　　　　　　　　　　×

米べい国こく　スノーフィールド　ライブハウス内

　街の中心部にある、とある古びたビルの地下。
　決して広いとは言えぬ空間に作られた生演奏の為ための ステージ上に、牧歌的なメロディが鳴なり響ひびく。エレキギターのアンプから鳴り響くその楽曲は、最初は音質とメロディが合わないのではと思わせたが、徐々に速度を上げ、独特な調ちよう子しを加え、いかにもエレキギターとライブハウスの空気に合わせた音楽へと変化する。
　まるで、ギターを弾ひきながらその音質に合わせたメロディに造り変えているかのようだ。

そして、曲を最後まで弾ひき終おえた後、奏者である男が声を上げた。
「っと……こんな感じでいいのか？」
　エレキギターを手にしていたのは、最初に奏かなでられた牧歌的な音楽すら似合わぬ男。
　豪ごう奢しやな鎧よろいを身に纏まとい、赤毛混じりの金髪を空くう調ちようの風に揺らめかせる英えい霊れい──セイバーの言葉に、周囲にいた数名の男女が目を丸くしながらはしゃぎ始める。
「おぉ……アンタ凄すげえな！　マジで初心者かよ⁉」
「すごいね……イカすじゃん。アタシ、売り出し中のコメディアンか何かだと思ってたよ」
　騒さわぎたてる男女は、皆モヒカン刈りや多色染めといった派は手でな髪型をしており、浮うき世よ離ばなれしたデザインの服やピアス、あるいはタトゥーなどで全身を固めていた。
『刺とげ々とげしい』という単語をそのまま擬ぎ人じん化かしたような者達だが、その顔にフレンドリーな笑顔えがおを浮かべて、ある意味最も浮世離れした格好の男を賞しよう賛さんする。
「初めてギター弾いたとか信じられるか！　……って言いたいけどよ、不ふ思し議ぎとあんたが嘘うそついてるような感じがしねえんだよな……」
「あんま俗っぽいこたぁ言いたくねえが、そのまま金取れる演奏だぞ今の」
　するとセイバーは、嬉うれしそうに照れながらも首を振る。
「なに、君達本ほん職しよくには遠く及ばないさ。この『エレキギター』に触るのは初めてだが、昔、似たような弦楽器を習った事があるだけだ」
「いや！　充分すげえって！　つーか、なんだ今の曲？　初めて聴きいたな」
　モヒカン刈りの男の言葉に、セイバーは過去を懐なつかしむように笑いながら答えた。

「ああ、昔、ヘマをやらかして捕まった事があってな、その間に気まぐれで作った曲のリズムを少し速くしてみたんだ」
「作曲までできるのかよ！　つーか、アンタ、刑務所ムショ帰がえりか？」
「君ってアレでしょ？　さっき逮捕されてテレビで演説してた人でしょ？」
　パンクファッションの女性の言葉に、セイバーは少し照れながら頷うなずく。
「見られていたのか。まあ、演説と呼ぶには言葉足らずだったが……」
「なに、もしかして脱獄してきたの？　クールじゃん」
「警けい察さつ署しよがあんな事になったから、どさくさに紛れて避ひ難なんしてきただけだ。脱獄と取るかどうかは、俺おれが判断する事じゃないからな」
　肩を竦すくめながら愛想良く答えるセイバーに、周囲の若者達は更に賑にぎわい続つづけた。
「おお、凄すごかったよな！　なんだったんだ？　あの爆ばく発はつ……」
「ホテルの方もなんか大変だったみたいだよ？」
「そういや、カジノでさっき、信じられないぐらい大勝ちした奴やつがいるって――」

「……」
　ステージの隅に背をもたれ、そんな若者達の会話を無言で聞く影かげが一つ。
　孤独な『逃亡者』だった筈はずの女―アヤカ・サジョウは大きく頭を振って、心中で呻うめいた。
　―これが、私の末路だとでもいうのか？
　逃とう避ひの果てに辿たどり着ついたライブハウス。
　周りにいるのは、冬ふゆ木きの街では決して知り合う事のなかった

ような、パンクファッションの若者達と──こちらの領域にずけずけと踏み込んでくる、お節せつ介かいな英えい霊れいだった。
「なあ、本ほん職しよくの君達の前で恥ずかしいんだが、新しい曲を思いついたんで弾ひいてみていいか？」
「おう、弾け弾け。こっちもどんな音が飛び出てくるのか楽しみだ」
「ありがとう！　アヤカもちゃんと聴きいてくれよ？　後で感想が聞きたいんだ」
　そんな事を言いながら再びエレキギターを奏かなで始はじめたセイバーを睨にらみ付つけながらも、彼女はやがて、自分を責めるように溜ため息いきを吐き出した。
　セイバーが奏でる旋律に、僅わずかなりとも感動してしまっている己おのれを否定するかのように。

　──私は一体、何をしているんだ？

開戦前夜　スノーフィールド某所

　スノーフィールドの街の外れには、さして広くはないが工場の建ち並ぶ区画が存在する。
　その区画の奥まった場所で、周囲の巨大な工場を壁かべとするかのように、ひっそりと佇たたずむ食肉加工場が存在した。
　近きん隣りんの畜産業が盛んではないせいか、時期によっては稼か働どうすらしておらず、街の住民からすれば存在を知る者すら多くないような工場である。
　しかしながら、その工場の地下には、事じ業ぎよう登とう録ろくに申しん請せいされていない裏の顔があった。
　敷しき地ち面めん積せきよりも広大な地下空間の中に作られた、幾重もの結界の奥にある魔ま術じゆつ工こう房ぼうである。
　一見するとまったく関係の無い周辺の工場も、事業主などを辿たどれば、最終的に一つの組そ織しきに繋つながっていた。
『スクラディオ・ファミリー』。
　老ろう獪かいな手腕で裏社会に名を馳はせた、ガルヴァロッソ・スクラディオを当主とするマフィアである。マフィアと呼ばれているが、厳げん密みつには本来のシチリア起源のマフィア組そ織しきとは形が異なる。ガルヴァロッソ・スクラディオは確たしかにシチリア・マフィアに遠く連なる血筋を持つのだが、彼は形態の異なる数多あまたの組織と手を結び、あるいは吸収し、国境も血筋も思想も関係無く『無貌の暴徒フエイスレス・モブ』として組織を巨大化させてきた。
　ガルヴァロッソという奇妙な名前は偽名であり、一説には神しん聖せいローマ皇こう帝ていフリードリヒI世の渾名あだな『バルバロッ

サ』と自分の本名を掛け合わせたものではないかと言われている。
　そして、彼はアメリカという国家の裏社会に、広く深く根を伸ばした。
　神しん聖せいローマ帝てい国こくをアメリカに再現するなどという事を嘯うそぶいていた男が、実際に皇帝と呼ばれかねない程の権力と財力を手にした事については、犯罪史の研究家やＦＢＩ、あるいはテレビのコメンテーターが様々な理由付けを行うのだが──真の理由を知る者はそう多くはいない。
　彼は、国内外の広い地域において、多くの『魔ま術じゅつ師し』達を庇ひ護ごしたのだ。
　他家との縄なわ張ばり争あらそいに敗れた者。
　魔術の高みを目指すも財が追いつかず破産した者。
　異端として元の地を追われた者。
　犯罪者として表の社会から派は手でに追いやられ、魔術世界からも煙たがられた者。
　あるいは、自おのずから門もん戸こを叩たたいた者──。
　様々な事情を抱える魔術師達のパトロンとなり、その活動を支援してきた。
　直接的な金銭のみならず、あるいは土地を提供し、元居た魔術師達を『表の力』で排除するという事も行っている。
　力ある魔術師ならば多少の権力や暴ぼう力りょくなどものともしないが、暗示や魅み了りょうについて知ち識しきのある暴漢達の襲しゅう撃げき、更には狙そ撃げきや裁判所からの召集などを完全に防げる者となると、自然とその数は限られていた。
　仮に時計とけい塔とうの名めい物ぶつ講こう師しや一分野で名の知れた魔術師であろうと、魔術刻印の力だけで事態を打開できる一流能力者でもない限り、不意の銃弾などを防ぐには専用の護ご身しん礼れい装そうを纏まとう必要がある。
　それがなければ、魔術師とてフーリガンの暴動や通り魔に出くわしただけで呆あっ気け無なく死んでしまう可能性があるのだ。

本来ならば時計塔や教会などから問題視され、真っ先に潰つぶされるような事例だが──スクラディオ・ファミリーの事が議ぎ題だいに上がった時には、既に彼らはある程度の『魔術世界での力』を手にしてしまっていたのである。

有う象ぞう無む象ぞうの魔術師達が、果たして団結して一つの犯罪組織を守る事などあるのだろうか？

そう疑問を持つ者は多かったが、実際に、スクラディオ家に保護された魔術師達は、パトロンを守る為ためにその力を惜しみなく使った。

最大の理由として──ガルヴァロッソは、魔ま術じゆつ師し達が魔術師として生み出す『成果』に、まるで興きよう味みが無かったという事があげられる。

魔術師達の成果を掠かすめ取とらないのはもちろんの事、魔術師達が望まぬならば、その内容すら無理に聞き出そうとはしなかった。

ただ、魔術師達が必要な物を伝え、スクラディオ家はそれを惜しみなく提供する。

そんな一方的な関係に慣なれてしまった魔術師達の多くは、この環かん境きようを失ってしまえば、自分が目指す『根源』への道が閉ざされると感じた。

スクラディオ家に対する恩義を重んじる魔術師は僅わずか数名しかおらず、寧むしろ魔術師としての合理的な思考から、多くの者達が進んでスクラディオ家に肩入れしたのである。

結果として、スクラディオ家は裏社会の中で比類無き躍やく進しんを見せた。

他ほかにも『魔術師』の存在を知り、その方面に手を出す組そ織しきはいくつかあったのだが、多くの者達は魔術師を無む理り矢や理り支配しようとした為ため、初歩的な暗示などによって逆に利用され、あるいは破滅させられていく。

最終的にスクラディオ・ファミリーは政府の一部とも癒ゆ着ちやくし、スノーフィールドの『計画』にも一枚噛かめる程の力を得た。

偽りの『聖せい杯はい戦せん争そう』に、マスター候補の魔術師を一人ひとり送り込めるほどの力を。

そして今宵こよい──食肉工場の扉が開き、数人の男達が冷気に満ちたその場に足を踏み入れた。
すると、中に居た同じような格好の強面こわもて達が、外から来た面々に頭を下げた。
「お疲れ様です」
「……コーデリオンさんはどうした？」
「既に矯きよう正せいセンターは出ているとの事ですが、まだこちらには……」
下したっ端ぱと思おぼしき男が冷や汗を滲にじませながら答え、後から来た者達が眉まゆを顰ひそめる。
「迎えをやらなかったのか？」
「ファルデウスが、矯正センターにスクラディィオ家の人間が来るのはまずいと……出所した事すら事後報告でして……」
「ちッ……政府の犬コロ風ふ情ぜいが……」
「すいません、今、若い連中がコーデリオンさんを捜して──」
言いかけた所で、鋭するどい破砕音がその言葉の続きを遮さえぎった。
「!?」
男達が音のした方向──工場の天窓へと一斉に目を向ける。
そこでは破砕した窓まど硝子ガラスがキラキラと輝かがやきながら宙を舞っており、その輝きを身に纏まとうかのように──一人の男が、二つの塊を両手に摑つかんで落下してくるではないか。
「なッ……」
落下する男が摑つかんでいたのは、二人ふたりの人間の顔面だ。
生首を持っていたわけではなく、頭部には身体からだが繫つながったままだ。男に引き落とされる形で二つの人体が窓から落ち、数秒と待たずにコンクリートの床へと叩たたき付つけられる。

「――ッ」
　まだ息があったらしき二人の口から血が吐き出された。
　そんな返り血が数滴顔に飛び散ったのも気にせず、二人の人間を窓から引きずり下ろした男がゆっくりと立ち上がる。
　自らも天窓から落ちたというのに、男は何事も無かったかのような無表情を顔面に貼はり付つけていた。
　割れた窓から差し込む月明かりに照らされた男の顔を見て、工場内の強面こわもて達がゾクリと背を震ふるわせる。
　工場の暗がりの中で、一際昏くらく輝かがやく男の眼めに気け圧おされたからだ。
　両手に黒い手袋をした、厳いかめしい空気を纏まとう一人ひとりの男。
　だが、彼の双そう眸ぼうからはおよそ『人間らしさ』というものが欠落していた。
　猛もう禽きん類るいや肉にく食しよく獣じゆうに近しい眼光ではあるが、獲え物ものを狙ねらうというよりは、睨にらむだけで心しん臓ぞうを凍いてつかせるといった雰囲気の目をしている。
『殺し屋にたまにいる、感情の無い冷れい徹てつな殺人マシーンの目なんてもんじゃない。その機き械かいに唯一宿った感情が【殺意】だったとしたらあんな目になるだろう』──スクラディオ・ファミリーのボスであるガルヴァロッソがそう表現する程の鋭するどい眼光が特徴的な男だった。
　外見年ねん齢れいは30代から40代といった所であり、顔立ちそのものは整ととのっている部類なのかもしれないが、その怪物めいた眼光の鋭さが、前に立つ者の魂を鷲わし摑づかみにする。
　しかし、強面達は彼のそんな眼光に怯おびえたわけではない。
　彼らは知っていたからだ。
　その男の内面が、目つきの鋭さなどよりも遙はるかに恐ろしいものであるという事を。
「こッ……コーデリオンさん！」

「……」
　名前を呼ばれた男は、周囲の眼に視し線せんを返す事なく、そのまま懐ふところに手を伸ばす。
　そこから取り出されたものを見て、床に倒れていた者達が眼を見開いた。
「まッ……」
　何かを言いかけたが、それ以上言葉が放たれる事はない。
　ボシュリ、ボシュリとくぐもった音と共に、滅音器サプレッサー付きの拳けん銃じゆうから何発もの弾丸が発射され、床に倒れた者達の肉体を破は壊かいしていく。
　二つの肉塊が完全に動かなくなった事を確かく認にんしても、男は尚なおも警けい戒かいを解かず、拳銃を握にぎり締しめたまま床を見下ろし続けた。
「あ、あの……コーデリオンさん？　そいつらは？」
　全身に冷や汗を滲にじませながら、最初から工場内にいた男達の一人ひとりが問い掛ける。
　すると、コーデリオンと呼ばれた男は、視し線せんを動かさぬまま、地獄の底から響ひびくような低い声を吐き出した。
「……蠅はえだ」
「蠅？」
「誰だれかが肉の匂においを漏らしたか、それなりに嗅きゆう覚かくが鋭するどい蠅だったんだろう」
　男の物言いに、工場内の男達がハッと顔を見合わせる。
「まさか、他ほかの魔ま術じゆつ師しのスパイ？　コーデリオンさんの令れい呪じゆを狙ねらって？」
「……片付けろ」
「は、はい！」
　彼の部下らしき強面こわもて達が、慌てて床の死体と血ち溜だまりを片付けようと動き始めた。
　そんな彼らに、男は淡々とした調ちよう子しで付け加える。

「外にもある。視し線せん避よけの結界は張っておいた」
「えッ!?　そんなに居たんですか!?」
　自分達が敵対魔術師に囲まれていた事と、それにまったく気付いていないという失態を犯した事に恐怖を覚えた強面達に、男は低い声で告げた。
「三十六人だ」
「さッ……」
　絶句する部下に、男は続けた。
「ここに六つ、表に三十だ。処理を急げ」
「はい！　……へ？」
　この場には二つしか死体は存在していない。
「もしかして、上ですか？」
　屋根の上にまだ四人分の死体があるという事だろうか？
　配下の強面達はそう考え、どうやって引き下ろすか考えていると──
　再び、ボシュリ、ボシュリとくぐもった音が響き渡った。
　皆が上に視線を向けた瞬しゅん間かん、再び男の拳けん銃じゅうが火を噴ふき、彼の直前に工場内に入ってきた四人の男達の脳天に風穴を開ける。
「なッ……!?」
　最初から工場にいた強面達は、何事か解わからずに身を強こわばらせた。
「こ、コーデリオンさん、何を？」
「俺おれを舐なめるのは構わん」
「は？」
「だが、この工場はスクラディオ・ファミリーの所有物だ。その神聖な場所にこの程度の偽装で入れるなどと考えたのなら、ＭＲ．スクラディオへの重大な侮辱だ。捕らえる価値もない」
　次の瞬しゅん間かん、新しん鮮せんな死体となった男達の顔が歪ゆがみ始はじめ、まったく別の顔が現れる。
「!?」

恐らくは、仲間に化けていた敵対魔ま術じゆつ師し達なのだろう。
本物の仲間達は今もまだ生きているのか、あるいはとっくに始末されているのだろうか。そんな事を考える暇すら与えぬとでも言うかのように、この短い時間で三十人を超える魔術師を虐ぎやく殺さつした男は、顔色一つ変えぬまま強面こわもての手下達に告げる。
「……『肉』を処理したら、地下に来い」

「触媒は受け取った。……サーヴァントを召喚する」

×　×

スノーフィールド　薄うす暗ぐらい何処どこか

「バズディロット・コーデリオン。表向きは産業廃棄物処理会社の社長。裏の顔はスクラディオ・ファミリーの幹部……」
眼めを細めて紡がれたファルデウス・ディオランドの言葉に、横にいた少女──フランチェスカが口を挟む。
「更に裏の顔が、『スクラディオの毒どく鮫ざめ』こと殺さつ戮りく魔術師バズディロット……ってわけだね！　裏の裏が表じゃなくてまったく違う顔になるなんて、これだから世の中って面おも白しろいよね！」
「面めん倒どうなだけですよ。それに、なんですかその二つ名。毒鮫とやらも殺戮魔術師とやらも資料にはありませんが」
「そりゃそうだよ？　私が今つけたんだもん」
「そうですか、良かったですね」
ソファの上で足をパタパタさせながら楽しげに言うフランチェスカを横目に、ファルデウスは手元の資料を見ながら言葉の続きを口にした。
「これまでに関与が疑われている殺人は百二十五件以上。しかし何いずれも証拠不十分。微罪を積つみ重かさねてなんとか刑務所に叩たた

き込こんだそうですが、最初に入った刑務所で、半年の間に看守三名と受刑者二十六名が『失しつ踪そう』。刑務所の中をスクラディオ・ファミリーの派は閥ばつに染め上げる……よく揉もみ消けせましたねコレ」
「揉み消せるような人を選んで消してたんじゃないかなあ？　一応、スクラディオくんの為ために魔術の秘ひ匿とくには気を遣つかってるみたいだし。寧むしろ、ギャングとしての悪評を利用して、魔術師の顔を覆おおい隠かくしてるのかもね」
「魔ま術じゆつ側の経歴も酷ひどいと言えば酷いですけれどね……。かなり拗ねじくれた『支配』系統に特化した家系のようで。他者ではなく、己おのれ自身の『支配』を主眼とした魔術……身体強化とも違うようですが詳細は不明。時計とけい塔とうでは軽視されている東とう洋ようの呪じゆ術じゆつ系統にも精通しているとか」
　ファルデウスはそれに続く資料を読みながら、疲れたように眼めを細めていく。
「複数の魔ま術じゆつ師しの殺害に関与したと疑われ、時計塔の法ほう政せい科かに睨にらまれていたようですが……。ある事件をきっかけにシュポンハイム修しゆう道どう院いんと対立……その最中にスクラディオ家に庇ひ護ごされた、と」
「ああ、シュポンハイムねー。なんか丁ちよう度どその頃ころ、次期院長が行方ゆくえ不ふ明めいになったとかで、てんやわんやだったらしいよ？　でないと、流石さすがにスクラディオでも庇かばうのは無理だよ」
　ケラケラと笑いながら語るフランチェスカに対し、ファルデウスが愚ぐ痴ちを零こぼす。
「私は今でも反対ですよ、フランチェスカさん。このような敵の多い男を出所させてまで今回の聖せい杯はい戦せん争そうに組み込むのは。下手へたをすれば時計塔の派は閥ばつの溝が埋まり、一枚岩となって我々を潰つぶしにきます。それはまだ想定内としても、見当もつかない方向から矢が飛んでくるかもしれません」

「そんな事言うけど、他ほかも似たようなもんだよ？　不法入国中のシグマ君に、強化魔術の極北、ルセンドラ家末娘のドリスちゃん。正統派の支配魔術と投とう影えい魔ま術じゅつを使ってウォール街がいで色々やらかしたカーシュラ君に、黒魔術ウイッチクラフトの異端児ハルリちゃん。で、時計塔を裏切ったファルデウス君！　うん、割と問題児しかいないよね？」
「その面メン子ツなら、私自身を含めてまだコントロールできる自信があります。ですが、貴女あなたとバズディロット・コーデリオンだけは話が別です」
　そこでファルデウスは眼を細め、フランチェスカに向かって遠回しに抗こう議ぎするような言葉を吐き出した。
「いいんですか？　あの男にあんなものを渡してしまって」
　ファルデウスの言葉に対し、ゴスロリ衣装を纏まとった少女が口元を歪ゆがめる。
「いいのいいの。もしかしたら私の手にも負えなくなって、一寸先が闇やみになる。だからいいんじゃない」
「我々は貴女の享楽主義に付き合う気はありません。いざとなれば、貴女もバズディロットも舞ぶ台たいから強制的に降りて頂く可能性もあります」
「わあ怖い。狙そ撃げきでもされちゃう？　いや、確かく実じつに始末するなら爆ばく撃げきかな？」
　冗じよう談だんを交えぬ冷たい声を放ったファルデウスに対し、フランチェスカは冗談を聞いた子供のようにカラコロと笑った。
　それが単なる脅しなどではないと理解した上で、彼女はやや興こう奮ふんしたように頬ほおを染める。
「でも、それもいいかもね。君達相手に遊ぶっていうのも、私にとっては選択肢の一つなんだよ？　愛国心なんて私には無いし、そもそも私、アメリカ育ちでもなんでもないしねー」
「……」
　相手の言葉が冗じよう談だんに聞こえず、ファルデウスは全身に魔

ま力りよくを巡らせながら様よう子すを窺うかがった。
　そんな彼の警けい戒かいを見抜きながら、フランチェスカは敢あえて無防備にソファーの上でゴロゴロと転がり続ける。
「神代連盟エルダータイトルが最後の金きん狼ろうと潰つぶし合あった時は国が一つ滅ぶかどうかの瀬戸際だったっていうし、やっぱり遊ぶ時は今回の聖せい杯はい戦せん争そうみたいに派は手でじゃないと！　あぁ、想像したら興こう奮ふんしてきちゃった！　アメリカ合がつ衆しゆう国こくと美少女魔ま術じゆつ師しの対決！　いいよね！」
「何も良くありませんよ。それに、個人が我が国に勝てるなどと烏お滸こがましい考えはおこさない事です。実際貴女あなたは、過去に二回ほど機き関かんに『消された』と聞いていますが？」
「ああ、うん！　消された消された！　結構痛かったよ？　やっぱり物量って怖いよねー」
　自分自身が国から始末されたという事を、フランチェスカはあっけらかんと口にした。
「……私には理解できません。数十年経ったとは言え、再び貴女と手を組んだ政府の考えも、自分の存在を消そうとした政府と手を組む貴女の神経も」
「それだけ君の上司は私の力を認めてたって事だし、私は細かい事は気にしない。それだけの話だよ？　そもそも、肉体を殺されるのなんて、私には慣なれっこだし」
「貴女の在り方は知っているつもりですが、それでも信じられない発言です」
「身体からだを殺される事は、私にとっては絶望でもなんでもないし。そもそも、私を本当の意味で殺したのは一人ひとりだけだしね。ま、私の身体を殺した人は何人もいるけど、私にギャフンって言わせた人は数える程しかいないかな」
　彼女は過去を懐なつかしむように虚こ空くうを見上げ、笑いながらギチギチと歯を擦こすり鳴ならす。

「えぇと、まずはキシュアの御老体でしょ？　享楽主義者のサンジェルマン、悠久を生きる御お伽とぎの魔女……あ、今はもう悠久を『生きた』かな？　あとは、あのモナコの金持ち吸血種とか……どこかの学校にいたすっごく古い方言ゴドーワードを使う先生とか……先生といえば、あとは私の魔術のお師匠様達とか……」
　魔術の世界の裏の裏にまで精通したファルデウスからすれば『なんの冗談だ？』と思う名前や単語の羅ら列れつ。しかしながら、最後にフランチェスカの口から飛び出した二つ名は、ファルデウスにとって特に強く聞き覚えのある代しろ物ものだった。
「ああ！　あと、あの子！　傷んだ赤色スカー・レツド！」
「……本人の前で言ったら殺されますよ」
　ファルデウスやランガルの遙はるか高みに位置する天才人形師にして、時計とけい塔とう最高の魔術師の一人が抱く、侮ぶ蔑べつと畏い敬けいが籠こめられた特殊な二つ名。その二つ名は、時計塔に所属する魔術師の間ではある程度有名なものであり、同時に絶対の禁きん忌きとされる言葉だった。
　最終的に王冠の位──『冠位グランド』に到達したその女魔術師は、時計塔から称号とでも言うべき『色』を与えられている。しかしながら、自らが望んだ『青』の称号は得られず、更には三原色の『赤』そのものにも届かず、それに近い色合いの称号を得る事となったのだが──
　それを皮肉られて付けられた件くだんの渾名あだなを異常に嫌っており、眼前で彼女の事をそう呼んだ者は、例外なく殺されているという噂うわさがある。
　ファルデウスは知っていた。
　それが、単なる噂などではない、紛れもない真実だという事を。
　──いや、だが……フランチェスカさんなら、本人の前でも言うな……。
　ファルデウスの思考を推測したのか、フランチェスカはケラケラと笑いながら言った。

「うん、私も例外じゃなかったよ？　本人の前で言ったから何度も殺されちゃった！」
　ケラケラと笑った後、フランチェスカはプウ、と頰ほおを膨ふくらませて少し不ふ機き嫌げんな顔をする。
「いや、本当に大変だったんだよ？　あいつさ、本当にしつこいし陰険だし、人の工房ぶち壊こわして自分の気に入った魔ま術じゆつ用よう具ぐとかかっぱらっていくし、しかも逆にこっちが殺したら身体からだの中に仕込んだ■■■■■■■を起動させるし、それでいて本人は何食わぬ顔で復活するしねー。三十回ぐらい殺された所で、あの女の家族に頼み込んで間に入って貰もらったんだけどね……」
　その『家族』とも何かあったのか、フランチェスカは溜ため息いきを吐ついて首を左右に振った。
「結局、最後にもう一回殺されて、その時に『二度と私の目の前にその歪ゆがみきった魔術回路を見せるな』って脅かされちゃった！　それで、今のこの身体になったってわけ」
　そこで笑顔えがおを取り戻し、『どう？』と蠱こ惑わく的てきな笑えみを浮かべて身体をしならせるフランチェスカだったが、ファルデウスは眉まゆ一つ動かさずに己おのれの疑問を投げ掛ける。
「その身体になったのは３年程前でしたね。当時上層部が『彼女』を雇うと提案した時、強硬に反対したのはそれが原因ですか」
「まあ、それもあるけど……。どの道あの子は断ってたんじゃないかなあ？　自分の趣しゆ味みに合う事以外はやらないし。お金よりも興きようが乗るかどうかを大事にする家系っぽいしね。ああ、『英えい霊れいを受肉させる人形を作ってみない？』って依頼なら協力してくれたかもね」
　現時点でこの聖せい杯はい戦せん争そうに直接絡んでいない魔ま術じゆつ師し達の事を語った後、フランチェスカはふと顔から笑みを消して言った。
「私が言うのもなんだけど、あの傷きず赤あかちゃんの人形同士の記き憶おくのコピーは完かん璧ぺきだよ。それこそ魂すらコピーしてる

んじゃないかって疑うぐらいにね」
「それは……」
　少女の言葉を聞いてファルデウスが何か言い掛けるが、眉まゆを顰ひそめて口を閉じる。
　そして、彼が言いい淀よどんだ事をフランチェスカはあっさりと口にした。
「あの子、もしかして第だい三さん魔ま法ほうに到達したりしてないよね？　まあそれはそれで私達のやってる事が全部茶番になるから凄すごく楽しいんだけどね！　アハッ！」
　再び嗤わらい出だした少女を前に、ファルデウスは更に眉み間けんの皺しわを深くして溜息を吐く。
「何も楽しくありませんよ。国家どころか魔ま術じゆつ世せ界かいの損失です」
「大丈夫だよ。きっと第だい三さん魔ま法ほうは、そのうち魔法じゃなくなる。っていうかさ、『第三魔法を魔術の段階まで引きずり下ろす』……それが君達の最終目的だって忘れたの？」
「……私達の？　貴女あなたの、ではないのですか？」
「目標ではあるけど、ただの通過点だよ。あともう何段階か星の開拓が進めば再現できると思うんだよね。この聖せい杯はい戦せん争そうそのものも。だから、できるだけ多く聖杯戦争を起こしてあげるから、君達には張り切ってそのパターンを解析して欲しいね」
　何かを慈いつくしむような優やさしい口く調ちようになったフランチェスカに、ファルデウスは眼めを丸くして口を開いた。
「てっきり、貴女が第三魔法の使い手になる事が目的かとばかり」
　するとフランチェスカは、『心外だねー』と笑い、ソファーの上で足を伸ばして勢い良く起き上がる。
「よいしょっと……。まあ、傷きず赤あかちゃんならともかく、私の資質じゃそもそも無理っていうのは置いといて……。今さら魔ま術じゆつ師しの私が魔ま法ほう使つかいになっても、面おも白しろくないでしょ？」

「……さっき、他ほかの方々の事を『享楽主義者』だの『興きようが乗らないと動かない家系』だのと言っていた人の言葉とは思えませんね」
「私がそうじゃないとは言ってないよ？　いや、私はその二人ふたりに比べたら可愛かわいい方だけどね」
「……」
　呆あきれ果はてて言葉もないといった顔のファルデウスに、彼女はそれまでの無邪気さを湛たたえたものとは違う、どこか老成した妖よう艶えんな笑えみを浮かべながら口を開いた。
「人に再現できる魔術はいいの。だけど、人の限界を定義した魔法なんてものは無い方がいい。私はそう信じてるし、その壁かべに立ち向かう愚かさこそが人間の本質だって信じてるの」
　そして、彼女はそっと眼を閉じる。
　これから始まる『祝祭』の行く末に想おもいを馳はせるかのように。

「たとえその根っこが底なしの善意だろうと……天てん井じよう知しらずの悪意だろうとね」

×　　　　　　　　　　×

食肉工場　地下

「我が問いに答えて頂きたい、魔術師よ」

『偉大なる英雄』。
　あるいは、そんな言葉すら彼ひ岸がんへと置きさる『何か』。

「貴方あなたが、我が主マスターとなりて試練を与えしものか」

そう表現する事しかできぬ存在が、幾重にも結界が張られた食肉工場の地下に顕けん現げんしていた。

喚よび出だした男、バズディロット・コーデリオンは、それに対して淡々と答える。

「それを決めるのは、俺おれではなくお前だろう」

一方、バズディロットの手下であるスーツ姿の魔ま術じゆつ師し達は、全身に冷や汗を滲にじませながら己おのれの魔術回路を震ふるわせていた。

その場に顕現した存在が、自分達と別の位相に立つべき『何か』であるという事を、ひと目見ただけで理解してしまったからだ。

まず、その体たい軀くからして人の枠を超えており、神が彫り上げた彫像とでもいうべき外がい観かんだ。

身みの丈たけは２メートル半ばを超しており、天てん井じように頭髪の先を擦こすりかけている。

筋骨隆々とした偉い丈じよう夫ふであるが、その筋きん肉にく繊せん維いの一つ一つ、血管を巡る血の一滴一滴に神気とでも言うべき純粋な体内魔力オドが満ちあふれており、その肉体だけで生なま半なかな魔術は疎おろか、数人がかりの大がかりな魔術でさえ軽く消失させてしまうだろうと魔術師達に思わせた。

滲み出る雰囲気だけで場の空気を支配し、僅わずか数秒の立たち振ふる舞まいだけで、見る者に神こう々ごうしさすら感じさせる程の存在である。

仮にこの英えい霊れいが暴あばれた所で、自分達には何一つできないし、この英霊が何をしようと、その行いはきっと正しい事なので受け入れるしかない。

バズディロットの配下達は、眼前に現れた完かん璧ぺきな御み姿すがたを前にそんな妄想にすら囚とらわれ始はじめた。

実際に、ほんの数秒もあれば、徒と手しゆ空くう拳けんでこの部へ屋やにいる全すべての人間を虐ぎやく殺さつする事が可能であろう英

霊だったが、その肉体と魔力の圧力とは対照的に、紳士然とした穏おだやかな態度で工房の中央に立っている。
　それが逆にこの英霊の存在が規格外であると感じさせ、バズディロット以外の魔術師達は、この場から逃げ出したい衝しよう動どうに脳のう髄ずいを揺さぶられ続けていた。
　ここは自分のような木こっ端ぱ魔術師が居て良い場所ではない。
　自分は今、眼めにしてはならない存在を眼にしている、と。
　しかし、誰だれもその場から動かない。
　恐怖による衝動を抑え込んだのは、それ以上の恐怖。
　バズディロットがその場にいるのに、先に逃げ出すわけにはいかない。
　ただ、それだけの理由だった。

「□□□□□□□□□□」
「□□□□□□□□□□」

　バズディロットが英えい霊れいと何か会話を交わしているが、男達の耳には入ってこない。
　人間を遙はるかに超えた存在と、自分達の支配者である男の会話。
　かろうじて聞き取れるようになった時には、英霊がその顔を曇くもらせていた。
　明めい確かくに不ふ機き嫌げんになった英霊を前にして、彼らの上司たるバズディロットは無表情のまま問いかける。
「どうした？　質問に答えろ」
「……」
「俺おれは、【闘とう争そうに勝つ為ためなら、幼子をその手にかけられるか？】と聞いたぞ」
「できるわけがない。それを命じる者がいたとするならば、その者が私の敵だ」
　表情を消した英雄の口から、重々しい声が響ひびき渉わたった。

「私を……試しているのか？」
　言葉と共に、眼めに見えぬ圧力が風となって地下工房を駆け抜ける。
　魔ま力りよくとも違う純粋な威圧、並の人間ならそれをまともに浴びるだけで命を落としても仕方がない程の重々しい気配けはいが魔ま術じゆつ師し達の四肢から自由を奪った。
「我が出自を知った上での物言いだとするならば……命を賭かけた上での言葉と判断しようぞ」
　そのような圧力と同時に放たれた言葉は、その場に居合わせただけの魔術師からすれば死刑宣告にも等しく聞こえ、自分達はバズディロットの巻き添えで殺されるのだと覚悟する。
　それでも、心の中に浮かぶのは上司への憎しみではなく、諦てい念ねんの入り交じった畏おそれなのだが。
　すると、その上司は、部へ屋やごと打うち壊こわさんとする圧力を前に、眉まゆ一ひとつ動かさず、人にん間げん離ばなれした眼光で相手を睨にらみ返かえしながら答えた。
「当然だ。俺の命はとうの昔に捨てている」
　そして、左手を翳かざしながらその甲の紋様を輝かがやかせる。

「令れい呪じゆをもって命じる──」

「……浅はかな」
　英霊は、相手が令呪による服従を自分に課かすつもりだと判断し、首を振る。
　令呪による束そく縛ばくなど一時的なものに過ぎない。己おのれの魔力があれば、それを振りきる事など造作もないという事も理解している。たとえ三画全すべてを使われて自害を命じられたとしても、自分には三回程度の自害など問題にはならないと判断する。
　だが、それで相手が令呪による束縛の無意味さを悟り立場を弁わきまえるのならと、敢あえてその行動を邪じや魔ませず一画を消費させ

る事にした。
　喚よび出だされたその英えい霊れいは、あまりにも高こう潔けつ過ぎたのである。
　もしも危険を前に手段を問わぬ英霊だったならば、相手が令れい呪じゅの発動を終える前にその首をへし折るか撥はね飛とばしていた事だろう。あるいは、その英霊がライダーやアサシンとして召喚されていたならば、迷わずそうしていたかもしれなかった。
　しかし、今回のように三騎士の一つとして召喚される場合、その英霊の『非の打ち所なき大英雄』として語り継がれた叙事詩的側面が強く出る為ために、ある種の騎き士し道どうにも似た品格を身に宿してしまう。
　それが、その人知を超えし大英雄に致命的な隙すきを生んだ。
　令呪を用いて吐き出された命令は、服従を誓わせる言葉などでは無かったのだから。

「──『取とり繕つくろうな』」

「むッ……」
　英雄が声を上げると同時にバズディロットの令呪の一画が輝かがやき──その濃のう密みつな魔力が、英雄の脳のう髄ずいへと浸しん蝕しょくしてくる。

　──馬ば鹿かな。
　英雄の魔力は、過去の聖せい杯はい戦せん争そうを含めてもトップクラスの値であり、神かみ代よの魔女達ならともかく、現代の魔術師からの精神干渉など受ける筈はずがなかった。
　だが、令呪を通しているとはいえ、眼前の魔術師の『何か』が激はげしく脳髄を揺さぶり始める。
　嘗かつて、英雄はそれと似た蝕むしばみを経けい験けんした事を思い出した。

自分より更に上位の存在から穿うがたれた、深淵なる呪い。
それと同質な何かが、目の前の男から自分へと放たれている。
「貴様……なにを……」

「罪も悔かい恨こんも隠す必要はない。お前の奥底にある腑はらわたを曝さらけ出だせ。俺おれはその全すべてを見据えよう」
無表情のまま、地じ獄ごくの底から響ひびくような声で英雄に『誘惑』の言葉を投げかけるバズディロット。
「俺に必要なのは英雄としてのお前の力ではない。目的の為にあらゆる手段に手を染めるその貪どん欲よくさだ。たとえ辿たどり着つく先が高潔な道であろうと、悪あく辣らつなる手段を躊躇ためらわず選ぶ、一人ひとりの人間としての妄執よ」
動きを止めた英霊にそう囁ささやきながら、バズディロットは再度左手を掲げる。

「重ねて令れい呪じゆをもって命じる――『お前が見て来た【人間達】を思い出せ』」

その言葉になにか特別な意味があるのか。
あるいは呪じゆ詛そ的てきな意図が籠こめられているのだろうか。
英雄の耳朶じだを震ふるわせたその命令は、やはり魔ま力りよくの塊と化した令呪を脳のう髄ずいの奥深くに染み込ませた。
視界が明滅し、その合間に、英雄が生前出会った様々な人間達の顔が浮かぶ。
中には遠く神の血を引く者なども居たが、彼の前では等しく【ただの人間】に過ぎなかった。

臆おく病びようを絵に描かいたような暴ぼう君くんが、腰を抜かしながら泣きわめいた。

――【解わかった！　讃たたえよう！　王の名をもって貴様を讃える！】

――【だ、だから、それ以上私に近寄るな、化け物め！】

　高慢な態度が特徴的な、金髪の男が言った。

――【なるほど、君が『　　　　　　』か】

――【素す晴ばらしい、羨うらやましい！　確たしかに噂うわさ通どおりの化け物だ！】

――【安心してほしい。私は君を優ゆう遇ぐうし、使ってみせる】

――【私……オレと共にいる間だけ、君は化け物じゃあなくなるよ】

――――【未来の王を護まもりし、大英雄だ】

　愛した女が、自ら死を選ぶ間際に言った。

――【貴方あなたは、何も悪くない】

――【だから、どうか世界を恨うらまないで】

――【自分の血を憎まないで】

――【貴方は強いから、きっとできるわ】

──【私には、できなかった】

首を捻ねじ折おって炎へと投げ込む直前、敵兵の男であった筈はずのソレは言った。

―【おとうさ……】

出会った順などは関係なく、幾重にも、幾重にも、人の姿が折り重なり消えて行く。

それに呼応するかのように、令れい呪じゆを通して尋常ならざる量の魔ま力りよくが注ぎ込まれてきた。

━━馬ば鹿か、な。

━━この時代の人間が持つ魔力の量ではない！

━━それこそ、我々の時代の……魔ま女じよの如ごとき……。

稀き代だいの大英雄が、静かにその場に膝ひざを落とす。

その信じられない光景を前に、バズディロット配下の魔ま術じゆつ師し達は困惑した。

正まさしく次元の違う存在が、自分達の上司である魔術師を前に苦しんでいる。

マスターとサーヴァントの関係。

そんな単純な言葉では説明が付けられない事は、その光景を見ている誰だれもが理解していた。

しかし、明めい確かくな代だい償しようがあった事もハッキリと解わかる。

聖せい杯はい戦せん争そうにおいて、それぞれのマスターの生せい命めい線せんとも言える令呪。サーヴァントの制御や命令の強制、瞬しゆん間かん的てきな転移や緊きん急きゆう避ひ難なんなど、サーヴァントに限り、魔法にも近い所業を行う事のできる切り札を、三画中二画まで消費したのだから。

残り一つの令呪は、サーヴァントの叛はん意いに備えて必ず残しておかねばならない事を考えると、もうこの聖せい杯はい戦せん争そうでバズディロットが使える令れい呪じゆは無くなってしまったも同然である。

決定的なハンデを抱えてしまった事に不安を覚えるが、それでも、バズディロットならばなんとかするに違いないという、恐怖と同時に抱えるある種の信頼感が魔ま術じゆつ師し達の精神を安定させてい

た。
　だが、その安定も僅わずか数秒で崩れ去る。

「重ねて令呪をもって命じる──」

　その言葉に、今度こそ地下工房の魔術師達が凍り付いた。
　令呪を、召喚と同時に三画全すべて消費する。
　聖杯戦争を知っているならば、子供でもやらぬような愚行に手を染めようとしている上司を前に、魔術師達は今度こそ自分の死を覚悟した。

　一方で、喚よび出だされた英えい霊れいも、自らに浸しん蝕しよくしてくる魔力を抑えながら覚悟を決める。
　──この魔術師は、危険だ。
　彼は、バズディロットが最後の令呪を消費する事を愚行とは捉とらえなかった。
　表情には出さないが、この魔術師は、命を懸かけていると──存在全てを天てん秤びんに載せ、英霊である自分を別の何かに変質させようとしているのだと気付いたからだ。
　──最後の令呪で命じるのがなんであろうと、この男だけは排除しなければならない。
　英霊も、己おのれを浸蝕する力の正体については摑つかみかねていた。
　だが、下手へたをすれば、聖杯戦争に喚ばれた他ほかの英霊達にまでこの浸蝕が波及するだろう。
　自らの内側から湧わき上あがる『生前からの呪のろい』を必死に制御しつつも、大英雄はなおも高こう潔けつであった。
　──私が止めねばならない。
　──この時代に跋ばつ扈こする、邪悪なる暴ぼう君くんを。
　通常のサーヴァントならばとっくに発狂していてもおかしく無い程

の精神汚染が進む中、それでもこの大英雄は、自らの保身ではなく、まだ会った事すらない他の英霊や、この時代に住まう者達の為ために手を伸ばす。
　悪あく辣らつと言われようと構わない。マスターを手にかけた狂霊と呼ばれても構わない。
　英雄の中の英雄と呼ばれる男が、己の名誉すらかなぐり捨て、まだ見ぬ誰だれかの為に、眼前の魔術師を斃たおさねばと決意した。
　そして、全ての精神汚染を振り切り、魔術師の首へと手が届こうかというその瞬しゅん間かん──
　英雄の高潔さを嘲あざ笑わらうかのように、バズディロットの最後の令呪が消費される。

「──『地上の衣人の本質を……受け入れろ』」

　バズディロット本人を除く、工房内にいた者達の全すべてが『ソレ』を見た。
　令れい呪じゅが全て消失したバズディロットの左手首。
　その袖そで口ぐちから、令呪とは異なる赤黒いタトゥーが覗のぞき──
　不気味な生き物のように蠢うごめき始はじめた瞬しゅん間かんを。

×　　　　　　　　　　×

薄うす暗くらがりの中

「それでは、私はこれで失礼しますよ。召喚の準備に取り掛からないといけませんので」
「うん、いいよー。私も一人ひとりでじっくりとアルトちゃんが召喚されるのを見たいからねー」
　ソファからベッドに身を移し、足をパタつかせながら言うフラン

チェスカ。
　そんな彼女を見て、最後にもう一度だけファルデウスが忠告した。
「フランチェスカさん、貴女あなたがどれほどの修しゅ羅ら場ばを潜くぐってきたのかは良く解わかりました。ですが、私のような素人しろうと魔ま術じゅつ師しとしては、やはり懸け念ねんを抱かざるを得ません」
　ファルデウスはそこで一度眼めを細め、バズディロットという男に対する敵てき愾がい心しんを隠しもせずに言葉を続ける。
「本当に……あの男に『あれ』を渡してしまって大丈夫だったのですか？」
「そんなに不満？　でも、あの触媒で喚よべる英えい霊れいをフルスペックで扱う魔力は、私でも捻ねん出しゅつするの無理だよ？　それこそバズ君とスクラディオ家のコンビじゃなきゃ」
「触媒の話ではありません。貴女が冬ふゆ木きから持ち込んだ『副産物』の事ですよ」
　すると、フランチェスカは「ああ」、と頷うなずき、底意地の悪い笑えみを浮かべながら言った。
「しょうがないじゃん、『あれ』を扱えるっていうか、きちんと自我を保ったまま増やせるのは、それこそ私かバズ君ぐらいしかいないし……」

「私は、あんな可愛かわいくない『泥』、ずっと触ってるの嫌いやだからね！　アハハっ！」

×　　　　　　×

食肉工場

　それは、異様な光景だった。
　令れい呪じゅの魔ま力りよくと同時に流れ込んだ赤黒い何かが、英

えい霊れいの身体からだを蝕むしばんでいく。
　対抗するかのように英霊が魔力を放出し、工房に張られていた結界の半分以上が吹き飛んだ。
　処理仕切れぬ魔力に当てられ、魔ま術じゆつ師し達の数名が痙けい攣れんを起こしながら倒れていく。
　バズディロットはその魔力の奔ほん流りゆうに身を晒さらされながらも、鋭するどい眼光で英霊を睨にらみ続つづけた。
「奴らが否定したものを、言こと祝ほぎ、賞しよう賛さんし、愛するがいい。……存分にな」
　英霊に向けられた左手からは、令呪の力のみならず、己おのれ自身に蓄ちく積せきされた魔力も放出される。
　時計とけい塔とうでは異端とされる東とう洋ようの呪じゆ術じゆつまで利用し、己の腕から伸びる赤黒い『何か』を英霊の身体にねじ込み続けた。
　対魔力の壁かべに呪術で切り込み、そこから影かげのように蠢うごめく赤黒い『何か』を直接浸しん蝕しよくさせていく。それを差し引いてもバズディロットの身体から放出され続ける魔力の総量は通常では考えられない値となっており、英霊は何かトリックがあると考えたが、それを暴あばく余裕は無い。
　全身を掻かきむしるように己の身体を抱え込み、英霊は自分の死の原因となった毒の苦しみを思い出す。それとは別種の苦しみの筈はずなのだが、彼の本能がその毒の苦しみを記き憶おくの中から引ひき摺ずり出だした。本能が叫んでいるのだ。流れ込んでくる力が、同じぐらい危険なものであると。
　筆舌に尽くしがたき苦しみに耐えつつも、英霊は内外から自分を突き動かす『衝しよう動どう』を必死に抑え込もうとしていたのだが──
　次の瞬しゆん間かん、バズディロットが送り込んだ『泥』と、自らを構成する業ごうの一つとして内包していた『呪のろい』が絡まり合い、膝ひざをついた英霊が空間そのものを震ふるわせる絶叫を響ひびかせた。

「「「「　□□□

□□□□

――――――――――ッ!!　」」」」

　その咆ほう吼こうに呼応する形で、彼の身体に劇げき的てきな変化が起こる。
　英霊の全身を赤黒い泥が包み込んだかと思うと、その太く逞たくましかった四肢から筋肉がこそげ落ち、骨格そのものが萎い縮しゅくしたかのように、身長そのものも50センチほど縮ちぢんでいった。
　身体を覆おおっていた『泥』のような何かはそのまま染料と化し、英雄の肌を赤黒く染めあげる。
　そして、心しん臓ぞうの辺りで『泥』と絡み合っていた別種の力が白い染料と化し、まるで心臓を抉えぐった傷跡であるかのように放射状の紋様を刻み込んだ。
　同時に英雄の絶叫がピタリと止まり、スウ、と、何事も無かったかのように立ち上がる。
　そんな英霊に対し、バズディロットは左手を掲げたまま問い掛けた。
「余計なものを排除した気分はどうだ？　これからは、その泥が代わりの力となるだろう」
「……」
　無言でこちらに眼めを向ける英霊に対し、バズディロットが淡々と問いかけた。
「もうパスは繫つながっているが……こちらから聞くとしよう」
　身が縮ちぢんだとはいえ、それでもなお自分より頭一つ高い英えい霊れいを睨ねめ付つけながら。
「問おう、貴様が俺おれのサーヴァントか」
　暫しばしの沈ちん黙もくを経て、英霊が答えを返した。

「……いい、だろう」
　彼は肩から羽は織おっていた布を広げると、頭からそれをかぶって自らの顔を覆おおい隠かくす。
「我が復ふく讐しゆうを成す為ために……私は貴様を利用する。その価値が無くなれば、貴様の素そっ首くび……この手でねじ切ってくれよう」
　奇妙な出いで立たちになったかと思うと、英霊は発狂しかけていたとは思えぬ理知的な言葉で、物ぶつ騒そうな言葉を口にする。
　そんな彼に、バズディロットはやはり無表情のまま問い掛けた。
「何故なぜ顔を隠す？」
「……戒いましめだ。もう二度と、『人の業わざ』が眼まなこに入らぬようにな」
「……ああ、そうか、その布は『アレ』の皮か。それで自由に動けるのなら問題無い」
「そういう事だ。……どの道、この顔を世に晒さらすつもりはない。聖せい杯はいの力をもって、我が忌み名を駆逐するまではな」
　聖杯の力で『名』を消し去る。
　そんな奇妙な事を言う英えい霊れいに、バズディロットはフム、と顎あごに手をやりながら言った。
「ならば、お前の真しん名めいはなんと呼ぶべきかな。元の在り方とはあまりにも変質してしまったが……。オルタナティブ……『オルタ』とでも呼ぶか？」
　すると、英霊は小さく首を振り、自らの真名を口にした。
　召喚された時とはまったく変質し、それでいて、彼の原点である真名を。

「我が名は――――――――」

×　　　　　×

食肉工場での一件を皮切りとし、この夜、オペラハウスでのセイバー現げん界かいに前後する形で複数の英霊がスノーフィールドの街に降こう臨りんする事となった。

予定通りの英霊を喚よび出だした者、あり得ぬ英霊を喚び出した者、そして、己おのれの喚び出した英霊を見るまでもなくその命を落とした者。

マスター達と喚び出された英霊達が互いに運命を翻ほん弄ろうし合う中、全すべての英霊を喚び出した『偽いつわりの聖せい杯はい』は暫しばしの眠りに身を委ゆだねる。

その身を求める勝者に、己を褒ほう賞しようとして差し出す為に。

街の全てを巻き込む英霊達の宴うたげを、微睡まどろみの中に聞く子守歌の代わりとして。

──そろそろ、他ほかの魔ま術じゅつ師し達が英えい霊れいを喚よび出だし終えた頃ころだろうか。

東の空が明るくなり始めたのを見たシグマは、大きく息を吸い込んでから洋よう館かんの窓を閉じた。

そして、地下にある他人の工房へと足を踏み入れる。

結界などは既に排除されており、シグマの儀ぎ式しきを阻はばむ物は何もない。

地下に降りながら、シグマは考える。

──本当に、俺おれに喚び出せるものなのか？

──そもそも、英霊とはなんだ？　何をもって『座ざ』とやらに選ばれる？

自分は、ただ魔術が使えるだけの傭よう兵へいだ。

仕えていた政府が滅びた後、滅ぼした者達が自分を拾い上げた。それだけの関係である。

特別な力を持つわけでもない自分に、何故なぜ白羽の矢が立ったのだろう。

そんな事を考えつつ、彼は粛々と儀式の準備を進めていく。

彼は政府の仇あだ討うちなどは考えない。

幼い頃ころから、様々な魔ま術じゅつの手ほどきは受けてきた。

使つかい魔まを使し役えきする能力に長たけていると判断され、その方面の魔術の訓練や、武器の使い方などを徹てっ底てい的てきに叩たたき込こまれ、合間の時間は『政府が如何いかに有能であり、絶対の存在であるか』という事を教え込まれてきたのだが──政府があっさりと別のものに替わってしまった時点で、それが全すべて嘘うそなのだと理解した。

何も信じるものはない。

己おのれの技量すら、雇い主の魔術やファルデウスの部隊の訓練を見た後では頼りなくあやふやなものとしか思えなかった。

だからこそ、彼は思う。

およそ信仰心という物のない自分が、『聖せい杯はい』などというものを奪い合う戦いに参加してよいのだろうかと。

シグマは、『聖せい杯はい戦せん争そう』の意図は理解していた。

あらゆる願ねがいを叶かなえる願がん望ぼう器き。そのシステムの根幹たる聖杯の奪い合い。

しかしながら、シグマはその『願望器』という概念そのものを完全には理解できずにいた。

彼の中では、そもそも『願望』という概念そのものが非常に希き薄はくだったのだから。

聖杯にかける願いは何かあるのか？　そう雇い主に聞かれた時、シグマは回答に詰まった。

欲望が無いわけではない。強しいて言うなら、安眠と食事だ。

だが、聖杯などという外部装置に自分の未来を委ゆだねてまで欲しいものだろうか？

それに、仮にその『聖杯』とやらから永久に食事が湧わき出でるとして、その聖杯には一体何の得があると言うのだろう。

見返りを必要としない供給などがあるとしたら、それはシグマにとっては理解できないものであり、不気味極まりないものである。

だが、疑問に思うだけで、それを追及しようともしない。

感情の希薄な青年は、淡々と己の仕事だけをこなし続ける。

安眠と日々の食事、ただそれだけの為ために。

彼の生まれ育った環かん境きようでは、それこそが何よりも得がたいものだったのだから。

「降り立つ風には壁かべを。四方の門は閉じ――」

神も奇跡も、己の力すら信じた事のない青年が、神の御み業わざに等しい奇跡、『英えい霊れい召しよう喚かん』を成そうと呪じゅ文もんを唱える。
　思い入れも欲望もなく、ただ、機き械かいのように魔力を己の全身と儀ぎ式しきの場に巡らせながら。

「抑止の輪わより来たれ、天てん秤びんの守り手よ！」

　特に力を籠こめるつもりはなかったのだが、詠えい唱しようが終わろうという段階で全身から魔ま力りよくを急きゆう激げきに引き出され、思わず声を張り上げてしまった。
　だが、それは間違い無く魔力が儀ぎ式しきの中心へと流れ込んだ証あかしでもある。
　周囲に光が溢あふれ始はじめるのを見てもなお、シグマの心は揺らがない。
　ただ、魔力を持って行かれた疲労感があるだけだった。
　青年は魔力の光が渦巻くのを見ながら、極めて冷静に自分の立ち位置を再さい確かく認にんする。
　自分はこの『聖せい杯はい戦せん争そう』とやらにおいて、雇い主が数合わせとして用意した駒こまに過ぎない。
　何の触媒も持たされなかったのが良い証拠だ。

　──「本当はね、君にも色々と用意してあげる予定だったんだよ？」
　──「黒くろ髭ひげ君の財宝とか、パラケルススの奴やつのフラスコとか英雄スパルタクスの手て枷かせとか」
　──「だけどね、ちょっと考えちゃったの」
　──「本当に何の触媒もない状態で、『街』に英えい霊れいを選ばせたら、一体何が来るのかなって」
　──「この街の混迷した状況に合わせたら、一体何が引き寄せられるのかなって」

何が起こるのか解わからない。
そんな不確定要素を自分から抱えるという愚行を、雇い主は恍こう惚こつとした笑えみを浮かべながら朗々と語り続けた。
──「ルーラーは来ないようになってるけど、もしかしたらって事もあるしね？」
──「でも、触媒が無くても。本人の性質に近い英雄が出ちゃうかもしれないんだよね」
──「だから、何もない君がいい」
──「世界への願がん望ぼうも何もない、何かを残すつもりもない……」
──「英雄らしさが何もない『兵士Ａ』な君だから、プレーンな状態になれるんだよ？」
──「本当に、ただ、偽の聖杯が聖杯の意志で選ぶんだとしたら……何が来るんだろうね？」
──「まあ、何も来なかったら……。うん、別にこの街から逃げてもいいよ？」

要するに、雇い主の好奇心を満たす為ための捨て駒というわけだ。
何の役にも立たない英雄が現れても、それはそれで構わないのだろう。
──そんなものが出て来たところで、どうするべきか。
話相手ぐらいにはなるだろうか。
しかし、かつて名を馳はせた英雄だろうと、話す事など特にはない。
シグマはそんな冷めた思いを抱きながら、光と魔力の奔ほん流りゅうが落ち着くのを待ち続けた。

実際、彼はこの聖杯戦争において、誰だれからも注目されない、ただの駒に過ぎなかった。
名前ですらない『シグマ』という識しき別べつ記号だけの存在。

雇い主であるフランチェスカも、『何か面おも白しろい不ふ確かく定てい要素が起きれば良い』程度の認にん識しきであり、『お気に入りの駒こまなので生き残れば儲もうけもの』くらいにしか考えていなかった。
　シグマという青年は、この偽りの『聖せい杯はい戦せん争そう』において、魔ま術じゆつ師しですらない『兵士Ａ』に過ぎなかったのである。

　召喚の儀ぎ式しきが終わる、この瞬しゆん間かんまでは。

×　　　　　　×

スノーフィールド　大森林

「……」
　最高クラスの『気け配はい感かん知ち』スキルを持つエルキドゥは、とある『異変』を察知する。
　だが、エルキドゥはその『異変』を、英えい霊れいの召喚によるものとは考えなかった。
　僅わずかに目を細め、申し訳無さそうに地面に目を落とす。
「少し……怒らせてしまったかな」
　その言葉を聞くのは、英霊の側そばで蹲うずくまる銀ぎん狼ろうのみ。
　意味を理解する者が誰だれも存在せぬまま、エルキドゥの言葉は森の木々の間へと吸い込まれた。

×　　　　　　×

沼地の屋や敷しき　地下

「……」
　光の後、儀式の祭さい壇だんの前には何もいない。そのまま周囲にゆっくりと目を向け、シグマは部へ屋やの隅の椅い子すに一つの影かげがある事に気付く。
　古びた椅子に座っていたのは、杖つえを手にした初老の男だった。
　灰はい色いろの髪に、顔から襟えりの下にまで縦たてに走る大きな疵きず痕あと。
　顔つきを見れば老人と判断していい年とし頃ごろなのだが、その逞たくましい肩幅などを見ると現役の海兵隊員のようにも感じられる。
　そして何より特徴的なのは、片足の膝ひざから先に取り付けられた、白色の滑なめらかな義足だった。
「……」
　警けい戒かいしたまま、シグマは無言でその老人を観かん察さつする。
　確たしかに威圧感はあるが、『英えい雄ゆう』というには少し違う気がした。
　服装は想像していたよりも近代的であり、少なくとも神話や中ちゅう世せいの絵物語に出てくるような古い人物には見えない。
　シグマが声をかけあぐねていると、その老人の方が先に口を開いた。
「お前が、聖せい杯はい戦せん争そうのマスターか？　……フン、覇は気きのない面つらだ」
「……お前は、何者だ？」
「俺おれか？　俺の事は船長と呼べ。だが、それもすぐに意味がなくなる」
「？」
　相手の迂う遠えんな物言いに、シグマは心中で首を傾かしげる。
　──意味が無くなるとはどういう事だ？
　──……とにかく、まずすべきことは正式に契約を結ぶ事だろう。
　相手の正体を確かく認にんしてから問とい質ただす事にしたシグマ

は、とりあえず最初の英えい霊れいの質問に答える事にした。
「……俺は、確かに召喚の儀ぎ式しきでお前を喚よび出だしたマスターだ」
　すると、老人はその口元に凶悪な笑えみを浮かべて首を振る。
「くくッ……小僧、勘違いしているようだな」
「？」
　戸惑うシグマに答えたのは、老人ではなかった。
「僕達は、君に召喚されたわけじゃない」
　突然背後から聞こえて来た声に、シグマは勢い良く振り返る。
　同時にホルスターから拳けん銃じゆうを抜き放っており、背後に居た人ひと影かげに狙ねらいを定めた。
「誰だれだ」
　尋ねながら相手を確かく認にんすると、それが異様な姿をした少年だと気付く。
　肩から背にかけて、絡から繰くり仕じ掛かけの翼つばさのようなものを装着しているが、それは不気味な骨組みの翼と化しており、所々に蠟ろうと白い羽根が絡みついていた。
　どちらかというと、それこそ古い神話の時代の人物といった装しよう束ぞくに身をつつんでおり、シグマは『もしやこちらが英えい霊れいで、今の老人は侵入した魔ま術じゆつ師しなのでは』と考え、老人の方に視し線せんを向けたのだが──
　そこには既に老人の姿はなく、誰だれもいない椅い子すだけがその場に取り残されている。
　混乱するシグマを余所よそに、少年は苦笑を浮かべながら言った。
「僕は……君の感覚で言うなら、ただの脱だつ獄ごく囚しゆうだよ」
「どういう事だ。……⁉」
　声に反応してシグマが振り返ると、もうその声を発した者の姿は居なかった。
　代わりに、更に別の方向から、また違う男の声が響ひびく。
「私達は君が喚よび出だした英霊ではない。ただ、その英霊の影かげ

法ぼう師しとして君の周りに投とう影えいされているだけさ」
　ドアの前にいたのは、白い装束を纏まとった10代前半と思おぼしき少年だった。彼の持つ杖つえには穏おだやかな顔つきの蛇が絡み付いており、シグマの方に顔を向けてチロチロと舌を出している。
「子供……？」
「ああ、すまない。メドゥーサの血を使った臨りん床しよう試し験けんを自分の身体からだでやった影えい響きようでね……。まあ、気にする事じゃないさ。僕も影法師だ、すぐに消える」
　すると、微笑ほほえむ少年の姿が霧きりのように薄うすらぎ、そのまま空気の中に掻かき消きえてしまった。
　──なんだ……？
　──何が起きている？
「運が悪かったなぁ、兄にいちゃん。アンタもう、逃げられないぜ。兄ちゃんが可愛かわいい女の子だったら俺おれも頑張って英霊として顕けん現げんしてたんだけどな」
　また別の声が。
「わしらは英霊でもなんでもない。宝ほう具ぐなど使えんし、刀どころか箸はし一つ持てぬ身よ」
　更に別の声が。
「貴方あなたが悪かったのは運と人の縁えんだけ。そのせいで、貴方はどうしようもない苦く難なんを召喚してしまったの」
　地下室の中に異なる声が幾いく重えにも現れては消えて行き、意味の解わからない言葉でシグマの心を翻ほん弄ろうする。
「でもね、私達は貴方あなたに期待してるのよ？　貴方が、全すべてを貫く槍兵ランサーになる事を」
　令れい呪じゆが宿ってマスターとなった者は、英えい霊れいの状態が見られると聞いていた。
　しかし、現れる英霊らしき者達からはなんの情報も読み取れない。
　だが、契約すらしていないのに『何か』と魔ま力りよくのパスが繫つながった感覚は確たしかにあった。

──それにしては、魔力が吸い上げられる様よう子すはないな。
　通常の人間ならば絶叫していてもおかしくない状況だが、元々感情が希き薄はくなシグマは、ただ薄うすい困惑の色だけを浮かべて、現れては消えて行く『自称影かげ法ぼう師し』の群れに問い掛ける。
「俺おれがランサーになるとはどういう事だ？　それ以前に、一体貴方達は何者なんだ？　結局、なんのクラスの英霊が現れたのかも解らない」
　すると、椅い子すの上に現れた『船長』を名乗る男が再び現れ、厳いかめしい顔の眉み間けんに更に皺しわを寄せながら答えた。
「そうだな、少し語ご弊へいはあるが……」

「こちらを常に高みから見下す事が役目の……【番人ウオツチヤー】……とでも言うべきか」

ゆめのなか

「お日さまがポカポカして気持ちいいね！　まっくろさん！」
　椿つばきが見るスノーフィールドの夢の世界。
　何匹もの動物達が行き会う庭の芝生しばふに座りながら、繰くる丘おか椿が無邪気な声でそう言った。
　だが、『まっくろさん』と呼ばれた異い形ぎようの存在──ペイルライダーは、その身を庭の木陰に寄せて縮ちぢこまっている。
「あれ？　まっくろさん、お日さまが嫌いなの？」
　椿の問いに答えるように、ライダーがその身をブルリと震ふるわせる。
『少シダケ』
　黒い塊の仕し草ぐさから、なんとなく、そう言っている気がしたが──気のせいかもしれないと、椿はそのままライダーへと呼びかける。
「たいへんそうならおうちの中に入ろう？」
　初めて会った時以来、暫しばらく『まっくろさん』ことライダーは椿つばきに対して何も喋しやべらない。だが、数多あまたの動物を夢の中に取り込んで以降、徐々に自分の意志を態度で示すようになってきた。
　それこそ動物のように、簡かん単たんな上じよう機き嫌げん不機嫌が解わかる程度のものなのだが。
　家の中に向かう椿は、ふと、静かな周りの住宅地を見て呟つぶやいた。
「みんな、この街が嫌いだからどこかにいっちゃったのかなあ……」
　顔を曇くもらせる椿に、彼女と同じぐらいの大きさに変化した

『まっくろさん』が身を寄せる。
　何か困った事でもあるのかとばかりに頭を撫なでる『まっくろさん』に、椿が笑顔えがおを向けながら首を振った。
「ありがとう、大丈夫だよ、まっくろさん」
　そして、庭で戯たわむれる無数の動物達を見ながら言葉を続ける。
「前と違って、今はこんなに動物さん達がいるんだもん……」

「今ならもう、お父とうさんもお母かあさんも、誰も街から出て行かないよね」

　その言葉を聞いたライダーは、それが彼女の『願ねがい』であると判断した。
　現在のライダーは、椿というマスターの命令を聞く不完全極まりない願がん望ぼう器きである。
　彼女が望む状況を自分の持てる力で作り出せるように、ライダーは密ひそやかに蠢うごめき始めた。
　だが、現時点でのライダーは複雑な推測などはできない身の上だ。

　そして——

×　　　　　　　　×

現実世界　スノーフィールド郊外

　荒野を走る長い道路を、数台の車が走っている。
　そのうちの一台には、数名の魔ま術じゆつ師し達が乗っていた。
　時計とけい塔とうでもあまり名の知られていない魔術師達だったが、今回の噂うわさを聞きつけ、己おのれの名をあげようとスノーフィールドを訪れていた一派の一つだ。
「今、街の境を越えました」

運転手の若い魔術師の言葉に、背後にいた中年の魔術師が呻うめく。
「いふぉげ！　ふぉっふぉふぉ、まひからはふぁふぇろ！」
何を言っているのか解らないが、強く怯おびえているのは解った。
彼はアサシンらしき英えい霊れいに交渉を持ちかけ、その舌を短剣で縦たてに割さかれたのだという。
治ち癒ゆ系統の魔ま術じゆつは不得意なようで、舌に呪じゆ符ふを巻き付けながら弟子である運転手に喚わめき続つづけていた。
「解わかっていますよ師匠。我々はもう、あの砂漠のクレーターができる瞬しゆん間かんを見てから心が折れていますから、逃げたいのは一いつ緒しよです」
「前を走ってる車も、多た分ぶん魔ま術じゆつ師しですよ。上を使つかい魔まが旋回して……」
そこで、運転手は異変に気付いた。
街の境を越えたあたりから、道の両りよう脇わきに何台もの車が止められている事に。
そして、だいぶ前を走っていた車も、慌てたように路ろ肩かたへと停車させている。
こんな荒野の途中で一体何事だろうかと考えた運転手だったが──
前の車の上を飛んでいた使い魔が落下するのを見たのと同時に、突然強い吐き気を催もよおし、運転を続けるのが困こん難なんになってしまった。
「……!?」
慌てて車を道端に止め、言い訳をする為ためにバックミラーに目を向ける。
「す、すいません、急に体たい調ちようが……。……!?　師匠!?」
バックミラー越しに映った異常。
自らの師である中年の魔術師が、顔色を真まっ青さおにしてぐったりと倒れ込んでいたのである。
「大変だ、すぐに……」

自らの吐き気を抑えながら助手席にいる兄弟子にそう声をかけようとした運転手は、そこで再び身を震ふるわせた。
助手席にいた兄弟子も真っ青な顔でピクピクと痙けい攣れんしており、その手の甲や首筋などに、青い痣あざのようなものが浮かび上がっている。
「なッ……あ……うぁあぁあああ！」
そこで運転手は気が付いた。
自分の両腕にも、同じような痣が浮かび上がり、自らの身体からだを浸しん蝕しよくせんと蠢うごめいている事に。
車の中に絶叫が響ひびき──ついで、沈ちん黙もくが訪れた。

そして数分後、車はゆっくりと動き出す。
周囲に停とまっていた他ほかの車も同様に、エンジンがかかると同時にゆっくりと車体を動かし始めた。
その場でＵターンをし、スノーフィールドの街へと戻る形で。

街に向かう車の中で、虚うつろな目をした運転手が口を開く。
「スノーフィールドに戻るの、楽しみですね！」
「ああ、あそこはいい街だからな。聖せい杯はい戦せん争そうを特等席で見物しなきゃな！」
助手席の兄弟子も、同じような目をして答えた。
彼らの身体からだにできていた痣あざはだいぶ薄うすくなり、顔色も回復しつつあったが、その心だけは、まったく別の何かへと変質してしまっている。
「ひゃあ、はひゃくまふぃぃへもふぁれ」
楽しそうな声で呻うめく師匠の声を聞きながら、車は荒野をひた走る。
混こん沌とんたる争いが続く、スノーフィールドの街へと。

この日、この瞬しゆん間かんを境に、スノーフィールドの街は緩ゆ

るやかな牢ろう獄ごくと化した。
　出る事は叶かなわず、入る者は拒こばまず。
　その光景はまるで、街そのものが意志を持って人を喰くらっているかのようだった。

×　　　　　　　　　　×

スノーフィールド北部　大だい渓けい谷こく

　──これは……何？
　──あの英えい霊れい達は、一体何者なの……？
　ティーネ・チェルクは、ギルガメッシュが宝ほう物もつ庫こから出した飛ひ行こう宝ほう具ぐ『ヴィマーナ』の後部から顔を覗のぞかせ、そこで起こった光景をその目に焼き付けていた。

　謎なぞのアーチャーと対たい峙じしたギルガメッシュ。その戦いに横やりを入れた謎の女サーヴァント。
　横やりを入れた英霊に対し、ギルガメッシュはあからさまに不ふ機き嫌げんな顔をしていたのだが、相手が反応を見せる前に事態が動いた。
　女英霊の一いち撃げきによって渓谷の瓦が礫れきに埋もれた謎のアーチャーだったが、その瞬間、小山となった瓦礫が火山の噴ふん火かのように弾はじけ飛とんだのである。
　見上げる程の高さまで舞まい上あがる巨大な岩の数々。
　すると、その岩のいくつかが唐突に砕けちり、その破片の中から夥おびただしい魔ま力りよくを纏まとった矢が現れたではないか。
　瓦礫と共に飛ひ翔しようした謎のアーチャーが、舞い上がる岩の裏側から無数の矢を撃うち放はなったのである。
　一本一本に竜巻を纏う矢の雨が、破砕した岩の欠片かけらを真空の渦に巻き込みながらギルガメッシュと女英霊目がけて降り注いだ。

次の瞬間、ギルガメッシュは『王の財宝ゲートオブバビロン』から武具を出し、女おんな英えい霊れいは、手の中に現れた弓に複数の矢をつがえると、何本もの矢を同時に射出した。
　ティーネの目に追えぬ速度で撃うち出だされる武具と矢が、雨あめ霰あられと降り注ぐ暴ぼう威いの竜巻を次々と打ち払っていく。
　──ギルガメッシュ様は当然として……あの英えい霊れいは一体……？
　馬に乗ってこの場に現れたという事は、ライダーの英霊だろうか。
　しかし、その弓の腕前だけを見れば、アーチャーとみてもおかしくないのだが──そうなると、アーチャーが三柱もこの街に顕けん現げんしている事になる。
　──それとも……弓兵ではないのに、あの威力で弓を扱えると……？
　ありえない、とティーネは考える。
　それではまるで、弓兵が剣で他ほかのクラスと切り結ぶようなものだと。
　英えい雄ゆう王おうもアーチャーでありながらエアや【原罪メロダツク】という剣を持っているが、その凄すさまじい威力を抜きにして、純粋な剣技のみでセイバーのクラスと真正面から斬きり合あうような真似まねはしないだろう。少なくともこの時点のティーネはそう考えていたのである。
　しかし、そんな彼女にとっての常じよう識しきを覆くつがえす光景が、目の前で繰くり広ひろげられた。
「……」
　女英霊が右手を横に翳かざすと、そこに一頭の駿しゆん馬めが顕現する。
　そして、彼女はそれに軽々跨またがると、渓けい谷こくの上を勢い良く走らせた。
　彼女が腕に巻く布からは、相変わらず色いろ濃こい神しん気きが溢あふれている。
　その濃のう密みつな魔ま力りよくを手た綱づな越ごしに馬へと巡ら

せ、まさに人馬一体と化した動きで暴風の雨の合間を駆け抜けた。
　地面に落下し始めた巨大な瓦が礫れき。
　その上を軽々と駆け上りながら、ついには落下中の岩にまで足をかけ始める。
　瓦礫の滝を遡さかのぼる女英霊と馬を見ながら、ティーネは確かく信しんした。
　──やはり、あれはライダーのクラス！
　となれば、元々弓兵の素質がある英雄が、今回はライダーという形で顕現したのだろう。
　弓のあの威力は、腕に巻いた布から流れる神気によって底上げされた物と考えるのが妥当ではないだろうか。
　──あの『布』はやはり宝ほう具ぐ……。使用者の能力を強化する類たぐいの……。
　女英霊は見る見るうちに天高く上り詰め、やがて落下しつつある瓦礫の頂点へと辿たどり着つく。
　そして、眼下に謎なぞのアーチャーの姿を見つけ、馬上から勢い良く弓を引き絞った。

　謎のアーチャーはその気配けはいに気付き、頭部を覆おおう布越しにそちらに視し線せんを向ける。
「……」
　太陽を背にした騎兵の女が、こちらに向けて濃のう密みつな神気を纏まとわせた弓を引き絞っていた。
「……そうか」
「アーチャァァァァァ──ッ！」
　強い敵意を剝むき出だしにする女おんな英えい霊れいの叫びを全身に受けつつ、弓兵がぼそりと口を開く。
「……貴様か、裏切りの女王」
　避ける事すらせずに弓を構え、己おのれもまた、腕に巻いた方の布地から濃のう密みつな神しん気きを湧わき上あがらせた。

そして、騎兵の弓から放たれた五本の矢を、自ら放った同数の矢で迎げい撃げきする。
一寸の違いもなく矢や尻じり同士が接触し、籠こめられた魔ま力りよくが弾はじけて周囲に豪風となって襲おそいかかった。
砂さ礫れき混じりの風を自らの魔ま術じゆつで防ぎながら、ティーネは次なる弓兵の動きに目を向ける。

だが、先に動いていたのは騎兵の方だった。
弓兵の背後で、先刻以上に濃密な神気が練り上げられる。
矢を放つと同時に馬から飛び降り、愛馬を囮おとりとして相手の弓兵の背に回り込んでいたのだ。
「……小こ癪しやくな」
そう言いながら弓兵が振り返ろうとするが、それよりも先に音速の矢が、弓兵の背、丁ちよう度ど心しん臓ぞうの辺りに直ちよく撃げきする。
しかし、どうした事だろうか。
矢尻は男の身体からだ──頭から覆おおい被かぶさる布に当たると同時に砕け散り、その肉に食い込む事なく空中に四散した。
「……！」
その様よう子すを見て、『女王』と呼ばれた騎兵が呻うめく。
「やはりか……」
驚おどろきというよりは、自らの推測が確かく信しんに至った、という意味合いの呻きだった。

「……なるほどな」
その様子を見た地上のギルガメッシュが、一いつ旦たんヴィマーナの機き上じように戻りながら呟つぶやいた。
「何か、解わかったのですか？」
恐る恐る尋ねるティーネに、英えい雄ゆう王おうは面おも白しろくなさそうに答える。

「あの弓兵風ふ情ぜいが、何なに故ゆえ我オレの宝ほう具ぐを防ぎ切ったか。そして、なぜあの騎兵風情の拳こぶしの一いち撃げきはまんまと喰くらったのかという事だ」
「やはり、何か理由が……？」
「さほど大した事ではない。単に、奴やつの具ぐ足そくが特殊だっただけの事よ」
「具ぐ足そく……ですか？」
　尋ねながら、ティーネが地上に着地した弓兵に目を向けた。
　その弓兵はおよそ鎧よろいと呼べるようなものは身につけておらず、上半身を覆おおうものといえば、頭から被かぶっている奇妙な紋様の布と、腕に巻いた別の紋様の布だけである。
「あれは、恐らく魔ま獣じゆうか神獣の類たぐいの袭かわごろもだろう。よくもあそこまで加工してみせたものだが、恐らく元はウガルルムに似た何かであろうな」
　バビロニアの魔物の名を例に挙げるギルガメッシュだが、ティーネはそれだけでは納得がいかず、更に尋ねた。
「その皮が……あの凄すさまじい王の連撃を防いだと？」
「手数など関係ない。神獣、魔獣とは時にそうして人類の文明そのものを拒絶するものよ。先刻、一級品の武具に限らず、普段ふだんは撃うち出ださぬ下位の宝具まで含めてありとあらゆるものを喰くらわせたが、奴やつが手腕のみで全すべてを防いだとは思えん。だが、肉体や魔力の類で防いだのだとしたら。あの袭に傷一つ無い事に説明がつかん」
　英雄王はそこでスウ、と目を細め、自らの手中にある選定剣『原罪メロダツク』を握にぎり締しめる。
「人の文明そのものを拒絶する特異点、時折そのような生物が現れる。少なくともアレには人が生み出すあらゆる『道具』が通じぬであろうな」
　そう言うと、ギルガメッシュは僅わずかに口元を緩ゆるませた。
「？　如何いかがなさったのですか？」

「なに、あの裘かわごろもを獣けものから剝はぎ取とったのが奴自身であればと期待しただけの事よ」
　苦笑を浮かべた英えい雄ゆう王おうを見て、ティーネはその言葉の意味を理解する。
　この強者の極みである英えい霊れいは、眼前に立つ者が己おのれに匹敵する強者である事を望んでいるのだと。並の英雄であれば、宝ほう具ぐの力を借りて自分の宝を打ち払った者など無礼と断罪するのではないだろうか。
　故に、ティーネは視し線せんの先にいる弓兵が恐ろしい敵である事を再さい確かく認にんする。
　あの英霊は、この傲ごう岸がんにして偉大なる王を『期待』させる程の存在なのだと。
「具足に頼らずとも、弓で宝具を打ち払ったのは大した技量だ。そこらの有う象ぞう無む象ぞうではあるまいが、賞しよう賛さんに値すべきものよ」
「しかし、あの両者が腕に巻いている宝具は一体……」
「恐らくは、神が人に押しつけた遺い産さんの類であろう。見よ、物は同じだが、あの両者では使い方がまるで違う」
「？」
　英雄王に言われ、ティーネが双そう眸ぼうに魔力感知の魔術をかけて戦いに目を凝こらす。
　すると、確たしかに両者には違いがあった。
　女騎兵の方は、全身にその神しん気きとも言うべき高密度の魔力を巡らせているのだが、弓兵の方は、あくまでも己おのれの武具などに付与しているだけで、その身の内に力を受け入れようとはしていない。
「一体どうして……あれほど素質を持つ肉体ならば、神気を流し込めば相手を圧倒できるかもしれないのに」
　ティーネの言葉に、英雄王はフム、と一考した。
　そして、物珍しい玩具おもちゃを見つけたように、その表情に愉悦

の色を浮かべて見せる。
「我オレは単に我オレの知る神々がいけ好かぬだけだが……どうやらあの輩やからは、己の信仰していた神々そのものを、殺意を抱く程に憎んでいるようだな」
「神を……憎む？」
「滑こつ稽けいなものよな。恐らく、あの頑強な肉体を造り上げたのも神々であろうに。己の存在そのものを憎みながらあの英気を保つとは、中なか々なかに見所のある道化ではないか」

　そんなギルガメッシュの言葉が届いていたわけではないが、矢を続けざまに放ちながら、女騎兵が弓兵へと叫ぶ。
「何故なぜだ！　何故我が父の力を、戦いくさ帯おびの力をその身に宿さない!?　私を見下し、嘲あざけっているのか!?」
　一いち撃げき一撃に破軍の威力を籠こめられた矢を手持ちの弓で打ち払いながら、弓兵が重々しい声で女騎兵の問いに答えた。
「神の力は、己の身に宿すものではない」
「……なに？」
　それを聞いた女騎兵は、そこでようやく相手の身体からだの奥に流れる『何か』に気付く。
　神の力とはまったく異質な、焼け付いた毒のような力が弓兵の身に満ちていると。
　弓兵はその力をもって、『戦帯』から放たれる力を、それこそ使つかい魔まであるかのように力ちから尽ずくで使し役えきしている。
　神気と『何か』の力が混ざり合った弓を構えながら、弓兵は布の奥から怒りと嘲あざけりが入り交じる、呪じゅ詛その如ごとき言葉を口にした。

「ねじ伏せ、踏ふみ躙にじり……人の腕かいなで支配すべきものだ」

×　×

同時刻　警けい察さつ署しよ

「報告します。北の渓けい谷こくで英えい霊れいらしき反応を複数確かく認にんしました。その内一体はアーチャー……ギルガメッシュと思われます」
　秘書の報告を受けた警けい察さつ署しよ長ちようは、大きく息を吐き出した後、ソファーに座ってどこからともなく取り出したケーキを食べている黒幕の少女に目を向けた。
「……説明してもらうぞ、フランチェスカ」
「何を？　本物の英えい霊れいを喚よぶ事は、最初から説明済みだったと思うけど？」
「私が聞きたいのは、誰だれが、何を喚んだかだ」
　静かに睨にらみ付つけてくる署長に、フランチェスカは顎あごに指を当てながら顔を逸そらす。
「え？　聖せい杯はい戦せん争そうでそれを聞いちゃう？　うーん。私はその英霊の正体もマスターの情報も知ってるから教えてあげてもいいんだけど、ファルデウス君やその上の人達は君の事あんまり信用してないみたいだからねー。どうしようかなあ？」
「とぼけるな。昨日きのうのオペラハウスの一件もそうだが、参加する魔ま術じゆつ師し達に秘ひ匿とくの意図があるのかも怪しいものだ。白昼堂々カジノホテルを襲しゆう撃げきするなど、街の人間を巻き込むやり方だ。今の所まだ死者は出ていないが、割れた硝子ガラスで怪け我が人にんが出たとの報告もあるんだぞ！」
　僅わずかに声の調ちよう子しを荒げながら言う署長に、フランチェスカは仄ほの暗ぐらい笑えみを向けて言った。
「あれぇ？　この街を聖杯戦争の舞ぶ台たいにするって決めた時点で、民間人を巻き込む事は覚悟してたと思ってたけど？」
「ここまで目に見える形でなければな。我々があのキャスターを喚んだのは、被害を最小限にしながら、尚なおかつ確かく実じつに勝つ為

ためだ。さしたる理由もなく街の住人を巻き込んだマスターがいるとするならば、それは真っ先に排除すべきだと思うがな」
「本当にお堅いねー。まあ、私だって別に街の人の虐ぎやく殺さつがしたいわけじゃないから、ヒントだけあげようかな」
　すると、フランチェスカはクスクスと嗤わらいながら言葉を紡ぐ。
「神様、って知ってる？　聖せい堂どう教きよう会かいの子達が崇すう拝はいしてるのとは違う、もっと違う神話の神様達」
「……？」
「神かみ代よって呼ばれる、この世界がまだ魔ま力りよくに満ちあふれてた時代はさ、色んな『概念』や『異物』と人の間に交わりがあったんだよ。お互いに知恵はあったけれど、結局は別の生き物でさ」
　遠くを見ながら語るフランチェスカは、過去を懐なつかしむように目を細めた。
「そうなると、やっぱりどうしてもすれ違いとか起きてさ、いくつもの喜き劇げきと悲劇が生まれてきたの。まあ、それは人間同士でも一いつ緒しよだけど……何しろ相手は力の塊みたいなものだからね、すれ違いのレベルも勘違いのレベルも段違い！　笑いも悲しみも倍率アップってわけだね！」
「……何が言いたい？」
「もちろん、憎しみもそれに見合ったレベルで煮詰まってるんだよね」
　そしてフランチェスカは、渓谷の方角から僅かに感じる魔力の渦に意い識しきを向けながら、恍こう惚こつとした調子で夕べ見たものを思い出す。
「確たしかにクラスはアーチャーだけど、本質がガラリと変わってたからね。もうあれは、半分ぐらい『復讐者アヴエンジヤー』って呼んでもいいんじゃないかなぁ？」
「……復讐者アヴエンジヤー、だと？」
　第だい三さん次じ聖せい杯はい戦せん争そうで、アインツベルンがそのような特殊なクラスの英えい霊れいを喚よんだという情報は署長

もファルデウスから聞いていた。
　英霊としての強さはさほどでもなく、早々に敗退したらしい。
　だが、実際の参加者が己おのれの人形に残した情報を読み取ったファルデウスが、『確かく証しようはありませんが……。もしもあの英霊が勝ち残っていたら、世界そのものが終わっていたかもしれません。とにかく不気味な英霊でしたよ』と真剣な表情で語っていたのを覚えている。
　もしもそんな英霊と同質の存在が現れたのならば、それは途轍とてつも無なく危険な存在なのではないだろうか？
　署長が眉まゆを顰ひそめていると、フランチェスカが肩を竦すくめながら弓兵復讐者の情報を口にする。
　楽しそうに、嬉うれしそうに、件くだんの英霊の怨えん讐しゅうそのものを慈いつくしむかのように。

「ま、その英霊が恨うらんでるのは人類じゃ無くて……もう今じゃ星のどこかに消えたんだか朽くちかけてるんだか隠れるんだかしちゃった、古い古い『神様』達なんだけどね！」

×　　　　　　×

大だい渓けい谷こく

　遠えん距きょ離りによる弓きゅう撃げきと近接攻撃を織おり交まぜながら、同じ宝ほう具ぐを持つ弓兵と騎兵の争いが続いている。騎兵は元から身に宿っていた色いろ濃こい神性を持つ魔ま力りょくより槍やりと弓を生み出しているのだが、それを器用に使い分けながら愛馬と共に弓兵を責め続けた。
　その戦いの様よう子すを見て、ティーネは思う。
　あるいはあの馬自体が宝具の一つなのであろうかと。
　通常の馬では考えられぬ幻想種めいた動きを見せながら、彼女は更

に弓兵を追い詰めようとしたのだが――
　何かを察した馬が高く前足を上げて動きを止めると同時に、弓兵との間の地面に無数の武具が突き立っていく。
「……邪魔をするな、と言った筈はずだぞ！」
　騎兵がそれらを撃うち放はなった男を睨にらみ付つけると、その男――英えい雄ゆう王おうが吐き捨てるように言った。
「たわけが。王の面前で下馬すらせぬ無礼な女に傾ける耳など持ち合わせておらぬわ」
　ヴィマーナの先端に立ち悠然と見下ろしながら、背後の空間を光らせ、宝ほう物もつ庫こに眠る無数の宝具の先端を覗のぞかせる。
　すると、騎兵は二人ふたりの弓兵から一いつ旦たん距きょ離りをとり、ヴィマーナの機き上じようの男を訝いぶかしげに見た。
「王だと？　貴様がか？」
「やれやれ。女王などと呼ばれていたが、やはり我オレが留守の間に庭で縄なわ張ばり争あらそいをしていた賊ぞくの類たぐいか。無礼な上に蒙もう昧まいとは呆あきれ果はてたものよ」
　皮肉などではない、明めい確かくな侮ぶ蔑べつが籠こめられた冷たい言葉。
「真の王たる我オレと同じ場に存在する価値もない。疾とく失うせよ」
　道端の石を蹴けり払はらうような感覚で、英雄王は『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』の宝具群を射出する。
「……ッ！」
　直ちよく撃げきは不味まずいと本能が察したのだろう。
　馬を巧たくみに操あやつり、騎兵は宝具の雨の合間を駆け抜ける。
　すると、その馬を狙ねらう形で、布を被かぶった弓兵が鋭するどい一矢を撃うち放はなった。
「！」
　間かん一いつ髪ぱつでそれを避けたものの、馬がバランスを崩し、そこに『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』の第二波が襲おそいかか

る。
　刹せつ那な、騎兵の女は一際強い魔ま力りよくを湧わき上あがらせた。
　己おのれの内にあった神性の濃こい魔ま力りよくと、布から湧き出る神しん気きそのものと言うべき純粋な魔力を練り合わせ、それを手にした槍やりに宿らせる。
　襲おそい来くる無数の宝具を力業で打ち払うと、女騎兵は英えい雄ゆう王おう目がけて槍を投とう擲てきした。
　追撃の宝ほう具ぐの雨を貫き払い、神気纏まといし槍がギルガメッシュの心しん臓ぞう目がけて突き進む。
　だが、英雄王はその場から一歩も動かなかった。
『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』から複数の盾型宝具を展開し、目の前に迫る槍はその盾を数枚貫いた所で停止する。
「先刻から気になっていたが……。なんだ？　そのデタラメな宝具の数は」
　呆れたように言う女騎兵の声を無視し、ギルガメッシュは淡々とした調ちよう子しで口を開いた。
「よりにもよって神なぞの力を我オレに向けるとは、どこまでも無礼な女よ」
　だが、そこで少し興きよう味みを持ったかのように女騎兵を観かん察さつしながらニヤリと笑う。
「無傷とはいかぬようだが、高位の宝具をその身で受けきったか」
　打ち払いきれなかった宝具のいくつかが身体からだをかすめたのだろう。女騎兵は肩口や脇わき腹ばらに傷を負っており、少なからぬ量の血を流していた。
　それでも尚なお、馬上で戦士として振ふる舞まうその女を見て、英雄王はふむ、と頷うなずき一考する。
「どうやら、我オレの知らぬ神の血を色濃く受け継いでいるようだな。興きようが削そがれたと思ったが、貴様ら二人ふたりが相手ならば、我が友との約やく定じようを果たす為ための肩かた慣ならし程度

にはなるであろうよ」
　尚なおも余裕を見せる英雄王だが、その顔つきには油断も慢心も無い。
「貴様らは試し金きん石せきよ。我オレの許し無く斃たおれる事は罷まかり成ならん」
　英雄王にとっての本気の肩かた慣ならしとは、友との戦いに備え、普段ふだん使わぬような手て練れん手て管くだまで全すべて試すという事なのだから。
「……これ以上私の邪じや魔まだてをするのならば、貴様から排除するぞ。金こん色じきの王よ」
　すると、英雄王が小こ馬ば鹿かにしたように鼻で笑う。
「邪魔だてか。救済の間違いではないのか？　女王を名乗る小娘よ」
「何……？」
　訝いぶかしむ騎兵に対し、ギルガメッシュは崩れた瓦が礫れきの前で仁に王おう立だちしている弓兵をちらりと見ながら答えた。
「遊ばれている事にすら気付かぬ貴様が、どうやってあの男を獲え物ものとして狩るというのだ？」
「……遊ばれている、だと」
「貴様とそやつでは英えい霊れいとしての格が違う。それが解わからぬ程に安い器うつわでもあるまい」

　ヴィマーナの影かげから英霊達を観かん察さつしていたティーネも、英雄王の言葉には納得できた。
　聖せい杯はい戦せん争そうのマスターには、相手の状態や筋力や敏びん捷しようといった区分けごとに大まかな強さを知る事ができる簡かん易い的てきな透視能力が与えられる。
　これはマスターの感性によって見え方が違うのだが、ティーネの場合は一つの山から流れる六本の川の流れの速さの違いとして目に映っていた。
　それを見る限り、全ての川の流れが速いのが英えい雄ゆう王おうと

布を被かぶった弓兵の二人ふたりであり、騎兵の女は所々で二人と比べてなだらかな流れの川がある。
　特に機き運うんを司つかさどる川の流れが遅いのが特徴的であり、単純に基本能力だけで比べるならば、騎兵の女は些いささか不利であるかのように思われた。
　宝ほう具ぐからの神しん気きをその身に宿らせる事で、本来の力を数段底上げしているようだが、相手が同じ宝具を持っている状態では優ゆう位いを得るには至らないだろう。
　あるいは、神の力を身に宿すのと、道具として使うのとで違いはあるのかもしれないが、それが如何いかなる影えい響きようを及ぼすかまでは推測する事ができなかった。
　ティーネがそう考えていると、騎兵の女が表情を引ひき締しめ、鋭するどい目つきで弓兵を睨にらみ付つける。
「格が違うなんて事は解ってる……」
　一いつ瞬しゆんだけ年相応の少女らしい口く調ちようになったかと思うと、純粋な敵意を剝むき出だしにしながら、堂々たる調子で宣言した。

「何しろ私は、この男に殺されたんだからな！」

「え？」
　騎兵の言動の意味が解わからず、一いつ瞬しゆん固まるティーネ。
　言葉の意味は解る。
　だが、自分の真しん名めいのヒントを他者に与えるような言葉を叫ぶ意味が解らなかった。
　弓兵とは顔見知り、英雄王相手では真名の秘ひ匿とくなどあまり意味はなさないだろう。
　しかし、どこで使つかい魔まなどが監かん視ししているか解らないこの状況で、己おのれの真名の手がかりを晒さらすなどという事があって良いのだろうか。

もしかしたら、この女騎兵は想像以上に直情的な性格なのかもしれない。

そして、その疑問をきっかけとして、ティーネは改めて相手の英えい霊れい達の真名について考えを巡らせる。

──弓と槍やりを扱い、馬術に長たけた女王と呼ばれる女。

──それを殺したという英雄。

──二人ふたりに共通する布の宝ほう具ぐ。

──人理を否定する獣けものの皮。

聖せい杯はい戦せん争そうに向け、様々な神話や英えい雄ゆう譚たんを学んで来たティーネの中で、いくつものパズルピースが寄り合わさり、ある英雄達の姿を組み上げていく。

だが、それを答えとする事を簡かん単たんには良しとしなかった。

女騎兵の方はともかく、弓兵の方は、ティーネの想像した英雄とあまりにもイメージがかけ離はなれていたからだ。

そして、それを証明するかのように、女騎兵が叫ぶ。

「だが、今や私の末路など些さ末まつな事だ！」

女騎兵は、弓兵に続いてティーネの方へと目を向けた。

□□!?

突然視し線せんを向けられ、ティーネは身を強こわばらせる。

だが、ティーネに何か攻こう撃げきを加えるでもなく、女騎兵はそのまま弓兵に視線を戻し、叫んだ。

「答えろ！　貴様……先刻、何故あの幼子を狙った！」

対する弓兵は、淡々と言葉を返す。

「サーヴァントと共にのこのこと顔を出しているマスターを狙ねらうのは当然のこと。幼子とて、相手を潰つぶす覚悟をもって戦いくさに加わった魔ま術じゆつ師しだ。手心を加える理由などあるまい。よりにもよって、戦そのものを起源とする貴様がそれを問うのか、女王よ」

「うるさい黙だまれその口を閉じ消きえ失うせよ！　答えろとは言ったが、他人の口から流れるような凡ぼん庸ような正せい論ろんが聞き

たいわけではない！」
　女騎兵は理不尽とも思える事を言いながら再び槍やりを具現化させ、その穂ほ先さきを弓兵に向けて問い続けた。
「戦いくさ場ばの常じよう識しきなど、全すべてその力と知恵で自分の望む形にねじ伏せてきたのが貴様だろう！　だからこそ……貴様は、貴様だけは、そのような真似まねは決してせぬ男だと思っていた！」

　もはや意識は完全に弓兵に集中しており、ティーネからすれば、絶好の隙すきであるように思われたが──
「王よ……」
「まあ良かろう。道化の誹そしり合あいを眺めるもまた一いつ興きようよ」
　英えい雄ゆう王おうはそう言うが、身体からだに纏まとう魔ま力りよくに乱れや油断は無い。
　ただし、相手の本質をより深く知りたがる好奇心のようなものも感じられた。
　この傲ごう慢まんな王に興味を持たせるとは、少なくともあの弓兵の方は余程の資質なのだろう。
　だが、ティーネが気になるのは、あの騎兵の方だった。
　──あの騎兵は、弓兵が私を狙ねらった事について怒っている……？
　──自分が殺された事よりも？
　──……どうして？
　自分は、自らの命を部族の為ために捧ささげている身だ。英雄王を喚よび出だし、魔術師達を排除すると決めた時から、返かえり討うちで殺される覚悟もしている。
　そんなティーネの観かん点てんからすれば、弓兵の言葉は確たしかに正せい論ろんだ。
　──私は……敵としてすら見られてはいないんだろうか……。

困惑する少女を余所よそに、騎兵の女はなおも馬上から叫ぶ。
「お前は確かに戦いでは容赦なく、敵国の市し井せいから略奪もしたと聞く。目的の為ならば卑ひ怯きような騙だまし討うちもしたのだろう。しかし、それが大たい望もうの為ならば英雄の名を揺るがすものではない」
外見よりも遙はるかに大人おとなびた調ちよう子しで、馬上の少女は更に声を張り上げた。
「……だが、たとえどのような事情であろうと、相手が世に災さい厄やくをもたらす呪のろい子ごであろうと！　嘻き々きとして幼子に弓を向ける事はしなかった筈はずだ！　いや、他ほかの誰だれよりも、貴様自身がそれを許さぬ筈だ！」
「……」
「我らが故郷、テルメーの沃よく野やの果てにまで畏い怖ふと崇すう敬けいの歌声を轟とどろかせた、神の栄光たる名をどこに捨てた！　■■……」
勢いと怒りに任せ、自分の真しん名めいを確かく定ていさせる事になるのも構わず、相手の名を叫ぼうとした女騎兵だったが──

「黙だまれ」

弓兵が放った一言で、周囲の空気が凍り付いた。
同時に、男の身体からだを染め上げる色と同じ赤黒い影かげが湧わき上あがり、生き物のように蠢うごめき出だす。
それは憎悪であり、それは恐怖であり、
それは侮ぶ蔑べつであり、それは悔かい恨こんであり、
それは嫉しつ妬とであり、それは憐れん憫びんであり、
それは憤ふん怒ぬであり、それは諦てい念ねんであり、
それは嫌悪であり、それは無念であり、
それは絶望であり、それ故に空虚であった。
様々な感情が極限まで煮詰められたその影の奥底から響ひびく、聞

いた者全すべてに呪のろいを与えるかのような声。
　気き丈じように振ふる舞まっていた女騎兵も一いつ瞬しゅん鼻はな白じろみ、ティーネは己おのれの心しん臓ぞうが止まるかと錯さつ覚かくした。
　平然としていたのは英えい雄ゆう王おう一人ひとりであり、喜き劇げきを観かん覧らんする批評家のように口元を薄うすく緩ゆるませてすらいる。
　そんな三者三様の反応を無視し、弓兵は言葉を続けた。
「その名の英雄は既に存在しない。いや、『奴やつ』はもはや英雄ですらない。耽たん楽らくに塗まみれた暴ぼう君くんどもに迎合し、その代だい償しようとして炎と雷いかずちの中で地上の衣人の魂を焼き捨てた愚ぐ物ぶつよ。奴は末まつ期ごに誓いを破り、苦く難なんではなく快楽を選んだのだ！」
「お前は……誰だ？　何が目的なんだ……？」
　頬ほおから冷や汗を流しつつ、女王が尋ねた。
　自分の知る大英雄である男とは、もはや別人なのだという確かく信しんを持ちながら。
「私はただの人間だ。貴様の父たる戦神アレスを含め……オリンポスの神々を否定し、蹂じゅう躙りんし、穢けがす。それだけの為ために生きる復ふく讐しゅう者しやに過ぎぬ」

「ああ、そうだ。我が骨肉、我が魂こそは、神になり下がった愚者の影かげ法ぼう師しよ！」

×　　　　　　　×

警けい察さつ署しよ

　早朝、バズディロットの許可を得て水晶玉越しにその『英えい霊れい』を見た事を思いだし、フランチェスカは興こう奮ふんに身を捩よ

じらせる。
「ああ、ああ！　思い出すだけで内ない臓ぞうが沸ふつ騰とうしそうだね！　あの神様を穢す為だけに、神様を冒ぼう瀆とくする為だけに生きてるあの感じ！　私は大好きだよ！　一番の親友を思い出すからね！　きっと会わせたら仲良くできるんじゃないかな。恨うらんでるのは全然別の神様だったけど」
　自分一人ひとりの世界に入り、わけの解わからない事を言っているフランチェスカを無視し、署長は部へ屋やを出ようとする。
「あれれ？　どこに行くの？」
「無む論ろん、事態の対処にだ」
「正気？　昨日きのうはアサシンの女の子と良い勝負だったみたいだけど、渓けい谷こくの子達をどうにかするのは無理だと思うよ？　下手へたに邪じや魔まなんかしたら、その時点で金ピカの王様に殺されちゃうと思うけど」
　足を閉じて真顔で尋ねるフランチェスカ。
　彼女の言う事が正しいというのは署長も充分に理解している。
　だが、魔ま術じゆつ師しとして魔術秘ひ匿とくを第一とする観かん点てんからも、警けい察さつ署しよ長ちようとして街の安全を確かく保ほするという観点からも、黙だまって見過ごすわけにはいかなかった。
「放置するわけにもいくまい。このままでは流れ弾一つでビルが崩れかねん。無む駄だだとは思うがファルデウスにも協力を打診する。直接戦いには介入できずとも、秘匿への対処は早い方がいいからな」
「あーあー、そんなに気負わなくても大丈夫だよ？　手は打ってあるからさ」
「なんだと……？」
　訝いぶかしむ署長に対し、フランチェスカがいやらしく破顔して言葉を紡ぐ。
　署長にとって、更なる頭痛の種となる一言を。

「今ね、私の喚び出したサーヴァントが、横槍を入れに向かってるの！」

×　　　　　　　　　　　　　　　　×

「そうか……」
　色いろ濃こい怨えん嗟さと覚悟に満ちた弓兵の声を聞いた女騎兵は、身の内から激げき情じようを一度消し去った。
「貴様はもはや、あいつではないのだな」
　彼女は目をスウ、と細めると小さく呼吸を整ととのえ、愛馬の首筋をそっと撫なでた。
　刹せつ那な、全身に纏まとう神しん気きが己おのれの魔力と絡みつき、その純度を急速に高めていく。
「……!?　これは……」
　大地の霊れい脈みやくを通して魔力を感じるティーネが、思わず息を呑のんだ。
　聖せい杯はい戦せん争そうのシステム──少なくともティーネが事前に調しらべた冬ふゆ木きのシステムと同一の物であるならば、神しん霊れいを喚ぶ事はできない筈はずだ。
　だが、喚んだ後に、その英えい霊れいは神の力をどこまで行使できるのか──それはティーネも与あずかかり知しらぬ事である。
　騎兵がティーネの想像する通りの存在ならば、彼女は『神』を父に持つ半神の筈はずだ。
　そして、完全なる神霊として足りぬ力を、あの布型の宝ほう具ぐが補うとしたら、果たして何が起こるのだろうか？
　顔を青ざめさせるティーネだが、それでも彼女は怯おびえ惑まどいはしなかった。
　ティーネにとって神以上に畏い敬けいの念を払うべき『王』が、彼女の側そばに立っているのだから。

「ならば、私も貴様を正道に戻すとは言うまい。金こん色じきの王共々、『敵』として排除するまでだ」
　その言葉を聞いた瞬しゅん間かん、英えい雄ゆう王おうの表情が凶悪な笑えみに塗り替えられた。
「吼ほえたな、小娘！」
　傲ごう慢まんを絵に描かいたような笑みだが、その中に、先刻までの侮ぶ蔑べつと蔑さげすみの色はない。
　英雄王は誰だれよりも早く気付いていた。
　感情にまかせて暴あばれていただけの騎兵の気配けはいが、瞬時にして身に纏まとう神気に相応ふさわしい戦士のそれに切り替わったという事に。
　そして、現時点で慢心薄うすき英雄王の双そう眸ぼうは、相手の本質の一部を見通していた。
　これから、彼女が『何』に変質せんとしているのかという事も。
　だが、王は王であるが故に、己おのれの傲岸を貫き通す。
「王たる我オレを復ふく讐しゅう者しや如ごときと一ひと絡からげにするつもりとはな！　その蛮勇、貴様らの茶番と共に一笑に付してくれよう！」
　確たしかに今回の聖せい杯はい戦せん争そうにおいて、英雄王に慢心も油断も無い。しかし、彼が王である限り、その驕きよう慢まんたる気質は彼の自然体として常に共にあり続けるのだろう。

　一方で、弓兵は魔ま獣じゆうの皮の下で口元を凶悪に歪ゆがませた。
「良い幸さい先さきだ。朽くちた暴ぼう君くんどもは信じぬが、星が巡らす因果はあるやも知れぬ」
　そう言いながら弓につがえた矢に、禍まが々まがしい魔力がまとわりつく。
　素人しろうとの魔ま術じゆつ師し、あるいは単なる一般人であれ、その矢の放つ空気を前にすれば気付くだろう。

「戦いの初手から、半神どもを二人ふたりも撃うち屠ほふる事ができるのだからな」
　変わったのは矢の質だけでは無い。
　構えそのものが、これまでの仁に王おう立だちに近いものではなく、より自然体に近い形となっていた。矢をつがえた弓もダラリと下におろされており、一見するならば『構えを解いた』と言ってもおかしくない状態だ。
　しかし、その状態にも拘かかわらず、全身から放たれる不気味な圧力は増す一方であり、並の闘とう士しならば見た瞬間に絶望にも近い恐怖に襲おそわれる事だろう。
　だが、相あい対たいするのは神しん気き纏まとう女王と、黄金の輝かがやきに包まれし原初の英えい雄ゆう王おう。
　怯おびえなど微み塵じんも見せぬ二人の王を前に、弓兵は全身から黒い泥のような魔力を滲にじませ──

『はい、おしまい……っと』

　それぞれの英えい霊れいが動きを見せようとした刹せつ那な──
　無邪気な少年の声が、雪が降りしきる見渡すかぎりの大森林に響ひびき渡わたった。

「……え？」
　少年の声から一いつ瞬しゅん遅れて、ティーネの呆ほうけた声が漏れ聞こえる。
「……!?」
「！」
「……」
　女王は驚きよう愕がくに目を見開き、弓兵は僅わずかに目を細め、英雄王は胡う乱ろんな物を見る目で周囲の光景に視し線せんを巡らせる。

彼らが立っていたのは、草木も疎まばらな大だい峡きよう谷こくの筈はずだった。
しかし、少年の声が聞こえるか否かという瞬間に、彼らの視界が一面の森に埋め尽くされたのだ。
針しん葉よう樹じゆには雪が厚く積つみ重かさなっており、葉や樹皮の色よりも、圧倒的な白に支配された森の中に彼らは立っていたのである。
露ろ出しゆつしたティーネの細腕に粉雪が舞まい落おち、ひやりとした感触が肌を通して伝わって来た。
──強制転移!?
慌てて魔ま術じゆつを行使し、防寒の為ための空気層を身に纏まといながら、ティーネは自分達の身に何が起こったのかを推測する。
──まさか、そんな魔法にも近い高度な魔術……！
現在、スノーフィールドの周囲にこのような景色けしきが見られる場所はない。
西に大森林は存在しているが、木の種類が違うし、そもそもスノーフィールドなどと名付けられてはいるが、雪が降る事自体が珍しい土地だ。
あるいは、何らかのサーヴァントが生み出した異界──『固有結界』と呼ばれる特殊な空間に引きずり込まれたのかもしれない。英えい霊れいの中には、そのような御み業わざを使う者もいるという話は聞いていた。
だが、彼女のサーヴァントである英えい雄ゆう王おうは特に焦った様よう子すも見せず、ティーネに言った。
「焦るでない。ただの幻術に過ぎぬ」
「幻術……？」
魔術において、幻術は多た岐きに亘わたって利用される汎はん用よう魔術の一つである。特定の場所を隠す為ためや、特定の場で方向感覚を惑わせる為のもの、あるいは暗示の強化や修行の為に己おのれにかけるタイプの物まで様々だ。

しかし、生なま半なかな幻術はある程度以上の魔ま術じゆつ回かい路ろや魔術刻印を持つ魔ま術じゆつ師しには無効化される場合が多い為ために、『汎はん用ようの便利な魔術』以上にその道を究きわめようとする者はそれほど多く存在しない。
　実際、ティーネは過去に幻術をかけられた経けい験けんはあるが、土地の霊れい脈みやくと繋つながり、その霊脈を通して感覚を強化している自分には通じなかった。
　しかし、現在の状況は、土地の霊脈を通してもなお冷気を感じられる。
　──……魔力の繋がりから見ても、ここは確たしかに祖先の土地の渓けい谷こくのまま……。
　──じゃあ、やはりこれは幻術……？
　──まさか、だとするならば人の感覚だけじゃない……土地そのものを騙す程の……!?
　人間の魔術師でそのレベルまで辿たどり着つける者など何人いると言うのだろうか。高位の魔眼のような特殊な媒体を持っているならば話は別だが、普通に考えれば人の魔術師の領域を超えているレベルの幻術だ。
　──……新手のサーヴァント！
　宝ほう具ぐによるものか、あるいは素の魔術によるものかは解わからない。
　だが、少なくとも先刻の少年の声、あれを発した者が新たなるサーヴァントである可能性は大きいだろう。

『ダメだよ、みんな。頭を冷やさなきゃ。初日から切り札を出してどうする気なの？　噂うわさじゃ、本番前から砂漠でいきなり切り札を撃うち合あった人達も居るみたいだけどね！　ハハッ！』

　少年の声が雪の森全体に響ひびくが、どこから声を出しているのかは掴つかめない。

まるで、降りしきる雪の一粒一粒がスピーカーの役目を果たして空間全体に声を響かせているかのようだった。

　ギルガメッシュはその声を平然と聞き流し、やや不ふ機き嫌げんな調ちよう子しで口を開く。

「この期ごに及んで尚なおも我オレの興きようを削そぐ不敬な賊ぞくがおったとはな。何が目的かは知らんが、この程度の幻術で我オレの目を欺あざむけるとでも思ったか？」

『おやおや、流石さすがは英えい雄ゆう王おうギルガメッシュ！　名君と暴ぼう君くんの名を両方恣ほしいままにした人類そのものの管理者様は言う事が違うねえ！　どうやら偉大にして傲ごう慢まんにして賢けん明めいにして衒げん学がく的てきな貴方あなた様さまの炯けい眼がんを誤ご魔ま化かす事はできそうもないや！　困ったなあ』

　修飾過多、というよりも、あからさまに相手をおちょくる物言いを幻術の森に響かせる少年らしき声。

　すると、次の瞬しゆん間かん──

　ギルガメッシュとティーネの後ろから、少年のものとは違う中性的な声が響ひびき渡わたる。

「じゃあ、耳の方はどうかな？　ギル」

　ティーネが振り返ると、そこには一柱の英えい霊れいが存在していた。

　どことなく幼さも残した、男女どちらとも受け取れる顔立ちと体つきの英霊だ。

　完成された獣けものを想起させる、滑なめらかに引ひき締しまった身体からだ。男女どちらだとしても構わないと思わせる程に端たん麗れいで美しい顔立ち。

──この……サーヴァントは……。

　突然後ろに現れた存在がなんなのか、即座に理解できた。

　使つかい魔ま越ごしの映像で遠目に確かく認にんしただけだが、そ

れは確たしかに、ギルガメッシュが顕けん現げんした直後に相あい対たいし、砂漠にクレーターを造り上げた英霊である。
　しかし、流石さすがにタイミングと台詞せりふからして、それが幻術による偽物であるという事はティーネにも即座に理解できた。
　ならば英雄王はどう反応するのか。
　ティーネが視し線せんを動かそうとしたその瞬しゅん間かん──
　英雄王が握っていた原罪メロダツクの刃やいばが煌きらめき、幻術によって生み出された英霊を霧む散さんさせていた。
「誰だれの許しを得て、我が友の姿と声を模かたどった？」
　魔力のパスを通じて、ティーネの魔力回路に熱あつい揺らぎが押し寄せる。
　恐らく英えい雄ゆう王おうは、感情に任せた激げつ昂こうではなく、静かに怒りを身の内に滾たぎらせているのだろうと想像できた。
「更にはそれを用いて我オレを惑わそうとは、万死すら生ぬるい。人類が他者を苦しめる為ためだけに造り上げた財技術の数々、その全すべてを用いて貴様の軽挙を後悔させてくれよう」
　すると、雪の森に再び少年の声が響ひびき渡わたる。
『怒らないでよ、王様。ただの道化の悪ふざけだよ？』
　自らを道化と称し、王に形だけの許しを請こう少年の声。
　しかし、そこでギルガメッシュはこれまでに無い程に激はげしい怒りを顔に浮かべ、空間そのものを叱しつ責せきするかの如ごとき怒号を森に響かせた。
「うつけが！　道化とはその在り方だけで人を愉ゆ悦えつに落とし込むものだ！」
　道化という存在に何か一いつ家か言げんあるのか、普段ふだん以上に傲ごう岸がんな態度で、明めい確かくな怒りを言葉の中に滾らせる。
「自ら道化を名乗り、己おのれが道化である事を不敬の免罪符にしようとはな！　貴様はもはや三流ですらない、道化と名乗る事も罷まかり成ならん！　己の奇行に酔うだけの愚ぐ物ぶつに過ぎん！」

これまでにない程の怒りを見せるギルガメッシュに、ティーネは冷や汗を滲にじませた。
　怒り所が今一つ常人とズレている為、今後自分が臣下として何に気を付ければ良いのかもハッキリせず、とりあえず彼女は『王の前で道化の話は禁きん忌きである』と心に刻む事にする。
　もっとも、そんな話をこちらからふる機き会かいがあるとは思えなかったのだが。

　すると、離はなれた場所でも破砕音が響ひびき渡わたり、幻術で生み出された筈はずの木々がリアルな音を立てながらなぎ倒された。
　幻覚は女王の方にも見えていたようで、彼女は憤ふん怒ぬの形ぎよう相そうで空を見上げ、叫ぶ。
「巫山戯ふざけるな！　どこにいる……姿を現せ！　まやかしの使い手め！」
　一度冷静になった筈の彼女が、再び激げき情じように呑のみ込こまれていた。
　何を見せられたのだろうかとティーネが気にしていると、不意にその表情が戸惑いを見せる。
「なに……？」
　不意にその動きを止め、騎兵が虚こ空くうに向かって叫ぶ。
「退ひけというのかマスター！　しかし……」
「！」
　彼女の声を聞き、ティーネが即座に理解した。
　恐らくは念ねん話わを用いて、騎兵のマスターが撤てつ退たいの指示を出したのだろう。
　一方の弓兵は、一人ひとりだけなんの幻覚も見せられていないのか、平然とした顔で雪の中に立ち続けていた。
　女騎兵はそんな弓兵に顔を向け、憐あわれみにも似た悲しげな視し線せんを送った後に俯うつむいた。
「……解わかった、マスターに従おう」

彼女は馬に跨またがったまま、槍やりを消し英えい雄ゆう王おうと弓兵に向かって宣言する。
「また会おう。金こん色じきの王。そして己おのれを偽る復ふく讐しゅう者しやよ。次は戦いくさの礼を踏まえ、一人の戦士として相あい対たいすると誓おう」
「不敬にも聖杯我が財を狙ねらう賊ぞくを、この場より逃のがすと思うのか？」
「お前は王なのだろう？　逃亡者をせせこましく追う真似まねなど、王には似合わぬ。私を追いたくば玉座より降り、一人の戦士として走るが良い」
　この言葉に、ティーネは英雄王が激怒するものと考えた。
　だが、ギルガメッシュは不敵に笑うと、何もせずにその背に声をかける。
「幸運であったな。この我オレに対し玉座から降りよなど、死に値する大言だが……既にあやつと相対した際、王としての立場を忘れかけた。自戒の為ためとは言わぬが、友との再会を祝し恩おん赦しやをくれてやるとしよう。ありがたく賜たまわるが良い」
　持って回った言い方をした後、ギルガメッシュはもう一人の弓兵の方を見た。
「もっとも、奴やつが貴様を見逃すかは与あずかり知しらんがな」
　それに反応したのは、雪の中に響く少年の声だった。

『あれれ、女王様はお帰りだね。ま、こっちも少し厄やつ介かいな事になってるから、僕らも一いつ旦たん退しりぞくよ、本物のアーチャー君。いや、アヴェンジャーって呼んだ方がいいのかな？』
　すると、ギルガメッシュは森そのものをジロリと睨ねめ付つけながら、不ふ機き嫌げんな声で言い放つ。
「貴様への裁断は変わらぬぞ、雑種にすら届かぬ下等な魔ま物ものよ」
　少年の声を『魔物』と断じた後、英雄王は弓兵に向けて王としての

言葉を吐き出した。
「雑種よ。もはや真しん名めいを隠す意味などあるまい？　いいや、貴様の目的が己おのれの半身を穢けがす事であるならば、名乗ってこそその大たい望もうに近づくのではないか？」
　あくまでも傲ごう慢まんに、ギルガメッシュは弓兵に対して王命を下す。

「良いぞ、王たる我オレが許そう。貴様の真名を名乗るが良い」

　真名を名乗れなどというデタラメな物言いに、弓兵は苦笑を浮かべた後──弓を肩にかけながら、ゆっくりと革布の下の口を開いた。

「我が名は、アルケイデス」

　女騎兵はその名を聞き、馬上で無言のまま頭かぶりをふる。
　ティーネは最初、その名の意味が解わからなかったが、すぐに脳内から記き憶おくの欠片かけらを拾い出す。
「アムピトリュオンとアルクメネの子にして、ミュケナイ王おう家けの血を引く者なり」
　それは、とある大英雄の幼名──人間として付けられた名であるという事を。
「金こん色じきの王。私が知る王達では比肩する事すら叶かなわぬ最も強き王よ。そして弱き戦士よ。また会おう。次こそは、貴様の最さい奥おうに潜ひそむ神の力、蹂じゆう躙りんしてくれようぞ」
　言い終えるが早いか、彼の身体からだから湧わき出でる泥の如ごとき魔力がその全身を包み込み──森の雪原に虚こ空くうの如ごとき穴を穿うがち、次の瞬しゆん間かんにはその泥すらも消きえ失うせ、存在そのものをその場から消し去っていた。
『じゃあ、またね王様達。堕だ落らくしたい時はいつでも言ってよ？　愚行と狂気こそが僕の起源だからね！　アハハハハハハ！

アッハハハハハハハハ！』
　無邪気な少年のような声質のまま、狂ったような笑い声が響ひびき渡わたる。
　その声が消えるか否かというタイミングで、雪原は蜃しん気き楼ろうのように消え失せ、元の渓けい谷こくがティーネ達の周囲に広がっていた。
　最後に残された女騎兵は、何故なぜかティーネの姿を見て軽く微笑ほほえみ、名乗りながら馬の手た綱づなに手をかける。
「奴やつが真名を名乗った以上、お前達に私の真名を隠す事は無意味だな」
　呆あきれたように首を振り、『女王』は高らかに名乗りを上げた。

「我が名は、ヒッポリュテ」

「戦せん神じんアレスと、アルテミスの巫女みこたるオトレーレの間に生まれし子。誇り高き部族、アマゾネスの戦士長である！　金こん色じきの王と幼き家臣よ、また相まみえようぞ！」
　名乗り終えると同時に馬を走らせたかと思うと、騎兵──ヒッポリュテはその馬ごと光の粒子と化し、その場から完全に消きえ失うせてしまった。

　短くも激げき動どうと言える時間を過ごしたティーネは、自分の精神を魔ま術じゅつで安定させながら、自らのサーヴァントである英えい雄ゆう王おうに尋ねた。
「恐れながら……。王は、名乗らずとも宜よろしかったのですか？」
「……」
　英雄王はそこで僅わずかに眉まゆを動かす。
　そして、何かを誤ご魔ま化かすかのように首を振ると、一際不敵な笑えみを浮かべて言った。
「フッ……奴やつらはまだ我オレの名を聞くに値せん。再び我オレの

面前に立つならば、その栄誉を讃たたえて我が名を伝えてやるとしよう」
　王の言葉を疑う事なく、ティーネはそういうものかと頷うなずいた。
　そして、一つ疑問に思った事を口にする。
「あの少年らしき声が言っていた、『厄やつ介かいな事』とはなんなのでしょうか」
「ふむ」
　ティーネの疑問に対し、英雄王は表情を消し、渓けい谷こくから見える街の方角を眺めて自分の推測を口にした。
「恐らくは、我オレと友の再会に水を差した賊ぞくについてであろうな」
「？」
「死の呪のろいなど我が財貨の一振りで消し去ってくれようと思ったが、よもやこのような形で我オレに足取りを摑つかませぬとは思わなんだ」
「死の……呪い？」
　眉まゆを顰ひそめるティーネに、ギルガメッシュはやはり不敵に笑いながら断言する。
「たわけ。王の前で不安を顔に浮かべるとは、不敬であろう？」

「貴様は王の庇ひ護ご下かにいるのだ。呪いを畏おそれる暇があれば、我オレに畏い敬けいの念を向けるが良い」

×　　　　×

同時刻　コールズマン特とく殊しゆ矯きよう正せいセンター

　現代的なモニターの数々に、使つかい魔まや魔ま術じゆつ的てきな監かん視し装そう置ちを通した光景が映し出される歪いびつな空気の

監視ルーム。
　その部へ屋やの主あるじであるファルデウスが、集まりつつあるデータを見ながら眉まゆを顰ひそめた。
　──やはり、バズディロットは早めに排除しておく必要があるな。
　──いや、後ろ盾であるスクラディオ・ファミリーの方が問題かもしれない。
　──聖せい杯はい戦せん争そうの結果如何いかんに拘かかわらず、このままでは、いずれ手た綱づなを握れなくなるだろう。
　──そうなれば、もはや他ほかの部署……いや、ホワイトハウスの総力をもってしてもスクラディオ・ファミリーを止める手立てが失われる。
　表情には出さぬまま、心中で苦にが虫むしを嚙かみ潰つぶすファルデウス。
　問題はそれだけではなかった。
　繰くる丘おか夫ふ妻さいの動向も未いまだ詳細が摑つかめず、相手の喚よび出だしたサーヴァントの詳細が分からぬ限りは迂う闊かつに手を出す事すらできぬ状態である。
　──あの銀ぎん狼ろうが喚び出した英えい霊れい……恐らくはバビロニアの泥人形がランサーだとするならば、繰丘が喚び出したのはライダーかバーサーカーという事になる。
　銀狼が喚び出したランサーと思おぼしき英霊、エルキドゥ。
　死体となっていたジェスター・カルトゥーレの一派が喚び出したと思しきアサシンの女。
　警察署長が喚び出したキャスター、アレクサンドル・デュマ・ペール。
　そして、ティーネ・チェルクが使役するアーチャー、英えい雄ゆう王おうギルガメッシュ。
　──フラット・エスカルドスは公園で英霊と何らかのコミュニケーションを取っていた節ふしがある……となると、バーサーカーではない可能性が高いか。

──そうなると、繰丘夫妻が喚び出した英霊がバーサーカーという可能性が高い。
　繰丘夫妻が始し皇こう帝ていを喚びだそうとしていた事は掴んでいるが、そのような戦術、戦略の組み立てが巧たくみであろう英雄をバーサーカーで喚び出す意味が解わからない。
　何かの間違いでバーサーカーとして始皇帝が顕けん現げんしたとすれば、サーヴァントが繰丘夫妻を狂気のままに支配している可能性もあるが、全すべてはファルデウスの推測にすぎなかった。
　自分が喚び出した真なるアサシンを偵察に向かわせる事も考えたが、万が一天敵と言えるような相性の英霊が繰丘の手て駒ごまだった場合、みすみす強力な駒を失う事になる。
──まったく、次から次へと。
　セイバーを喚び出したカーシュラは偽のアサシンに殺され、真なるライダーを喚び出したドリス・ルセンドラはファルデウスには非協力的で連絡も寄よ越こさない。真なるバーサーカーを喚よび出だす予定だったハルリとは音信不通となっており、順当に行けばランサーを喚び出したであろうシグマからは、『何かを喚び出したのは確たしかですが、正体がまるで分かりません。真しん名めいが分かり次第また報告します』という短い連絡が入っただけだった。
──我々の目的は聖せい杯はいで願ねがいを叶かなえる事ではない。
──その先を……第だい三さん魔ま法ほうの解析そのものを進める事だ。
　聖杯を手に入れて『第三魔法を我が手に』と願えばどうなるのだろうか。
　ふと、そんな子供じみた事を考えたが、何をどう考えてもろくな事にならないと判断し、それ以上考える事はしなかった。
──個別の勝敗そのものに固こ執しつする必要はないが……我々の側が勝利する必要はある。
　ティーネ・チェルクは聖杯を求めているわけではないが、仮に聖杯を手にして、『スノーフィールドの聖杯のシステムそのものの破は壊

かい』を願ったらどうなるか。そのような懸け念ねんがファルデウスの中で警けい報ほう音おんを鳴らしている。
　──最悪、内通者にティーネを消させる手があるが……英えい雄ゆう王おうが他ほかのサーヴァントと戦っている隙すきをつく必要がある。
　──だが、それ以前に……セイバーの動向が摑つかめないのも問題だ。
　──街の要所要所にはカメラを仕掛けていた筈はずだが……あの眼鏡めがねの女は映っていなかった。
　──アインツベルンのホムンクルスと接触するものと思っていたが……。
　監かん視しを続けていた『白い女』──アインツベルンのホムンクルスは、夕べ一時的に姿を消していたが、現在は監視の網あみにひっかかっている。
　だが、奇妙な事に朝から街のショッピングモールやカジノに出入りしており、行動に一貫性が見られなかった。
　──こちらを攪かく乱らんする罠わなか。監視には当然気付かれているのだろうな。
　まったくもってままならない。
　次から次へと問題が湧わき上あがる状況を前に頭痛を覚え、ファルデウスは思わず目め頭がしらを手で押さえた。
「ディオランド部長」
　そんなファルデウス・ディオランドに、配下の女性が声を掛けてくる。
「どうしましたか、アルドラさん」
「街にいるマスターからあぶれた魔ま術じゆつ師し達なのですが……妙な動きが見られます」
「？」
　渡された報告書を見て、ファルデウスは自らも無数にあるモニターのいくつかに目を向けた。

「……確たしかに、妙ですね」
　魔術師達の何割かは、昼前に街を出て行った。
　砂漠のクレーターを見て腰が引けた者も多いのだろうが。偽のアサシン──爛らん熟じゆくたる狂信者の手によって、多くの魔ま術じゆつ師し達がその身を害されている。
　この状況では、生なま半なかな魔術師達は『自分達の手にはおえない』と逃げ出すのも無理はないだろう。
　だが──妙だったのは、そこからだ。
　昼前に街を出た筈はずの魔術師達が、揃そろって車やバイクをＵターンさせ、スノーフィールドの市街地へと舞まい戻もどっているというのである。
「……まさか、街を出た瞬しゆん間かんに他家に雇われたのか？」
　真っ先に思い浮かんだのは、時計とけい塔とうの介入だ。
　彼らが街から出て行く魔術師達に目を付け、何らかの対価を約束して時計塔の手て駒ごまとしたのではないかと考えたのである。
　しかし、その推測は続くアルドラの言葉で否定された。
「魔術師だけではありません、部長」
「……何？」
「ある時間を境として、仕事などで街の外に向かった一般人が、全すべて街に引き返しています」
　ゾクリ、と、冷たい違和感がファルデウスの力を走り抜ける。
「……」
　ファルデウスは自分の認にん識しきの甘さを痛感した。
　通常の魔術の範はん囲いを超えた、大掛かりな『何か』が街の中で起きている。
　それは確たしかなのだが、その理由までは解わからない。
　──人払いの結界？　いや……街に戻ってくるのでは、人寄せの結界と呼ぶべきか……？
　──だが、何が目的だ？
　──冬ふゆ木きの第だい五ご次じ聖せい杯はい戦せん争そうでは、一

般人から体内魔力オドを収集しようとする英えい霊れいが居たと聞いているが……。
　第五次聖杯戦争にはブラックボックスが多く、その英霊がどのような末路を迎えたのかまでは解らない。
　だが、実際にその時期に一般市民が集団で昏こん倒とうする事件が起こっており、聖せい堂どう教きよう会かいがガス事故として隠いん避ぴしていたという情報は入ってきている。
　それに関して現地の高校生達の間で『地下に米べい軍ぐんの落とした化学兵器の不発弾があり、そこからガスが漏れ出したのではないか』という噂うわさが広まったらしく、ファルデウスの同僚達が事実と異なる噂うわさの揉もみ消けし作業に追われた……という話を聞いた覚えがあった。
　──化学兵器……不発弾。そんな噂話で済む話ならばいいが。
　──処理能力を考えると、クレーターの件だけで手一杯だ。
　──スノーフィールドの人口は八十万……。
　──仮にその全てが消えたとしても、一応処理できるように手回しはしてあるが……。
　──できれば、そんな面めん倒どうな事にはなってほしくないものだ。
　そんな事を考えていたファルデウスだったが──。
　固く握った己おのれの手の中に、何かが握りこまされている事に気が付いた。
　それは断片的に文字が書かれたメモ用紙であり、くしゃくしゃに丸められたそれを丁てい寧ねいに広げていくと、そこにはファルデウスに対する明めい確かくなメッセージが記されている。

──【気付かぬか】
──【この施設は結界の壁かべが色いろ濃こい】
──【故に、アレはここに入り込んではいない】

「……」

今回の聖せい杯はい戦せん争そうにおいて、真なるアサシンであるハサン・サッバーハと契約したファルデウスではあるが、ハサンから何かを話しかけてくる事は滅多めつたになかった。
そもそも声を出す事自体を忌き避ひしているようで、このような手段で語りかけてくる事が多い。
しかも、その文字は決まってファルデウス自身が殴り書きをしたような文字で書かれていた。
まるで、他人が見た時に、アサシンという英えい霊れいの存在そのものがファルデウスの妄想だと思わせるかのように。
「アレ……とは？」
小声でボソリと呟つぶやくファルデウス。
それに答えるかのように、データの送受信を行っていたパソコンの一つの画面にブロックノイズが走り始めた。
その隙すき間まを縫ぬうように、短い文字列が浮かび上がり、ファルデウスの脳裏に焼き付けられる。
文字列は短く、ファルデウスの疑問に対する答えだけが記されていた。

―【呪のろわれし、死病の風】

×　　　　　×

２時間後　安モーテル

「はあ、やっと外に出られるー！」
室内のカーテンを開き、フラット・エスカルドスは差し込む日光を浴びながら高々と両腕を上に伸ばす。
「まさかあんなに怒られるなんて思わなかった……」
大きく背伸びをしたのも束つかの間ま、フラットはしょんぼりと肩を落として溜ため息いきを吐き出した。

「しかも、ジャックさんを喚よんだ触媒、教授が俺おれの為ために用意してくれたわけじゃなくて、全部俺の早はや合が点てんだっただなんて……」
　そんな彼の左腕に嵌はめられたスチームパンク風の腕うで時計どけいから、大人おとなびた紳士といった印象の声が響ひびき渡わたる。
「テレビゲームの懸けん賞しようグッズで喚び出されたと知った私のショックに比べればどうという事はあるまい。それに、２時間程度の説教で済んで良かったではないか」
　英えい霊れい時計ウオツチと化したバーサーカー、ジャック・ザ・リッパーの慰なぐさめを聞き、フラットは小さく首を振った。
「２時間も、ですよ」
　買ったばかりの携帯電話を握にぎり締しめ、フラットはベッドの上に倒れて悲しげに背を丸める。
　その携帯の番号をフラットの師であるロード・エルメロイII世にメールしてから、15秒と経たたずに英えい国こくからの国際電話が掛かってきて、２時間程の説教と、30分弱の方ほう針しん会かい議ぎが今しがた終了したのだ。
　電話に出るや否や男性の怒ど鳴なり声ごえが響き渡り、腕時計状態のジャックにも聞こえる形での長々とした説教が始まったのである。
　勝手に渡と米べいした事に始まり様々な追及と併あわせて説教をされていたのだが──
　──『いったい誰だれから召喚の呪じゆ文もんを聞いた？　君の事だ、大だい図と書しよ館かんの資料などからで自力で調しらべあげたというわけではあるまい。遠とお坂さかか？』
　と教授に聞かれ、
　──「あ、そうか。凛りんちゃんに聞けば良かったのか……いやその、街に来て色々やってたら、なんか魔ま法ほう陣じんも呪文も無しで喚べました」
　とフラットが正直に答えた所、数分の絶句の後にそれまで以上の勢いで説教が再開されるという一幕もあった。

フラットの精神的疲労は辛つらそうだったが、敢あえてジャックは厳きびしい言葉を投げかける。
「我慢したまえ。その説教を全すべて聞いた私からすれば、簡かん潔けつで解わかりやすく、なおかつグウの音ねも出ぬ程に真っ当な内容だった。あの効率の良い流れにも拘かかわらず長く説教される程の内容があった君の方に問題がある。甘んじて２時間という時間の消失を噛かみしめたまえ」
「違うんですよう、ジャックさん」
「バーサーカーと呼びたまえ。……で、何が違うというのかね？」
　首の代わりに長身の針先を傾かしげるジャックに対し、フラットは落ち込んだ表情で口を開いた。
「時計とけい塔とうにいる間の教授は、本当に１分も無む駄だにできない程色々な作業に追われてる人なんです……。なのに、俺のせいで、教授に２時間も無駄な時間を取らせちゃうなんて……それが本当に悪い事したなって思って……」
「ふむ……君は想像以上に師匠思いなのだな」
「教授の弟子で教授の事を尊敬しない人なんて、三、四人しかいませんよ！」
「いるにはいるのか……。だが、電話越しに話を聞いただけで解わかる。彼は優ゆう秀しゆうな『魔ま術じゆつの師』なのだろうな。過去の聖せい杯はい戦せん争そうを生き延びたという話も鑑かんがみるなら、『魔術師』としても一流なのであろう」
　素直な感想を述べるジャックに、フラットはパア、と顔を輝かがやかせて答える。
「もちろんです！　教授は聖杯戦争だけじゃなく、他ほかにも色々な時計とけい塔とうの事件を解決してるんですよ！　『剝はく離り城じようアドラ、月下の刻印争奪連続殺人事件』に『デンジャラスビューティー双そう貌ぼう塔とうに消ゆ事件』、『スーパーエクスプレス、ジャッジメントアイ事件』、ええと、それに……」
「うむ。君が勝手に事件に名前をつけて話に海かい竜りゆうの如ごと

き尾ひれをつけてまわり、教授殿の胃に多大なるダメージを与え続けているのは良く解った」
「やだなあ、尾ひれなんてつけないですよ。教授は本当に、時計塔でも伝説の人なんです！　あ、そうだ！　なんなら、電話でもう少し話してみますか？　さっきも言いましたけど忙しい人なんで、少ししかダメだと思いますけど……」
　フラットの提案に、ジャックは数秒思案したあと長針を大きく振った。
「遠えん慮りよしておこう。先刻も少しだけ会話をしたが、彼はまるでこちらの全すべてを見透かし……そうだな……まるで、私を別のモノに組み替えてしまうかのような雰囲気を持っていた」
「あー……いや、それは確たしかに教授と話した人はみんな言いますけど、でも、あれって悪意があったわけじゃなくって……」
「ああ、意図的なものではないというのは解る。彼の純粋な癖くせなのだろうな。とはいえ、あの本質を見抜く力は空恐ろしい。彼と話し続けたら、私はそれだけで己おのれの存在に満足してしまい、夢ゆめ叶かなえぬまま成じよう仏ぶつしてしまいそうだ」
「そうですか……」
　起き上がってベッドに腰を掛けながら、残念そうに言うフラット。
　そんな彼に、ジャックは更に続けた。
「だが、彼は信頼できる存在だというのは解った。私の知ち識しきにある魔術師らしい魔術師ならば、私をなんとか宥なだめ賺すかし、様々な手て練れん手て管くだを用いて聖杯戦争を放棄させて時計塔へと招き入れようとする筈はずだ。私は存在自体が貴重な研究対象だからな。それをしないという事は、魔術師らしからぬお人ひと好よしか、あるいは目先の損得よりも大局を見る事のできる人物という事だろう」
　本当に少し話しただけだが、ジャックはロード・エルメロイII世という人物に対して、ある程度の信頼と━ある種のシンパシーのようなものを感じていた。

それは即すなわち、『この人物もフラットには苦労させられているのだろうな』という一点においての事なのだが。
　己の奔ほん放ぽうさが師とサーヴァントの間に電話越しの結束感を生み出したという事も知らぬまま、フラットはカーテンを開いて燦さん々さんと日光の輝かがやく外に目を向けた。
「ええ！　教授は凄すごい人ですよ！　俺おれなんかよりもずっと未来が見えて……」
　そのまま窓を凝ぎよう視ししているフラットに、腕うで時計どけいが訝いぶかしげに問い掛けた。
「どうしたのかね？　あまり顔を出さない方がいいぞ。先刻も今後の方針として教授殿に『大人おとなしく隠れていろ』と言われていただろう」
「いや、そうなんですけど……。随分と、霧が濃いなと思って……」
「霧きり？」
　自分自身に連なるワードが気になったのか、ジャックも窓の外に目を向けるが、燦々とした日光に照らされ、実にクリアな景色けしきが広がっていた。
「何を言っている？　霧などどこにも出ていないぞ？」
　もしや何か目の病気なのではないかと考えるジャックに、フラットが顔から笑顔えがおを消して答えた。
「いえ……そうじゃなくて……魔ま力りよくの霧が……。いや、街に来たときから少しあったから、聖せい杯はいの影えい響きようかなって思ったんですけど……」
「？」
　断片的に語るフラットは、暫しばらく窓の外を観かん察さつした後、真剣な調ちよう子しで言葉を紡ぐ。
「バーサーカーさん、これ、少し不味まずいかもしれません」
「どうした」
「俺達……何か凄く危ないものに取り囲まれてるかも……」
「!?　敵の英えい霊れいの攻こう撃げきか!?　モーテルに結界でも張

られたか!?」
　フラットの言う『霧』というのは良く解わからないが、ジャックはフラットが天然気質ではあるものの、その手の冗じよう談だんを言うタイプの人間ではないという事は理解していた。
　しかし、フラットから返って来た答えを聞き──ジャックは、それが冗談であって欲しいと願ねがう事となった。

「モーテルどころじゃないです。これ……最低でも、この街が全部すっぽり包まれてますよ？」

沼地の屋や敷しき

　時は、英えい雄ゆう王おうが謎なぞの弓兵と相あい対たいした時にまで遡さかのぼる。

　聖せい杯はい戦せん争そうで喚よばれる英えい霊れいは、基本的に『セイバー』『アーチャー』『ランサー』『キャスター』『ライダー』『アサシン』『バーサーカー』の七つのクラスが割り振られる。
　しかしながら、そのいずれにも当てはまらぬ『エクストラクラス』が召喚される事が稀まれにあると言われており、実際に冬ふゆ木きの第だい三さん次じ聖せい杯はい戦せん争そうでは『アヴェンジャー』と呼ばれるクラスの英霊を喚び出したという記き録ろくが残されていた。
　その知ち識しきを聞かされていたシグマが、館やかたの一階にある書斎の椅い子すに腰掛けながら尋ねた。
「それで？　……エクストラクラスなのか？　その『番人ウオツチヤー』というのは」
　シグマの問い掛けに対し、その時現れていた『影かげ』──背中に羽根を付けた少年が答えた。
「正せい確かくには少し違うかな。冬ふゆ木きのシステムそのままなら、三さん騎き士しがエクストラクラスに変わる事はない。残された位相からすると、聖せい杯はい戦せん争そうで戦うべきサーヴァントはランサーと言うべきだろうね。だけど、ランサーのサーヴァントになるのは、英えい霊れいではなく君だという話さ。君が生きながらラ

ンサーになる為ための障しよう壁へきにして見張り番、それが君が喚よび出だしたものだ」
「言葉の意味は解わかる。今朝けさそれを聞いてから一眠りして、改めて考えてみたが、何一つ納得ができない答えだ。そもそも、人間がランサーになるという話からしておかしいだろう」
「僕らもまさか君がまず寝るとは思わなかったけどね。ま、おかしいのは、この聖杯戦争そのものさ。正しくエクストラクラスとして僕らが出るなら、正式なエクストラクラスっていうのも変な物言いだけれど、例えば『ゲートキーパー』として顕けん現げんしていたかもしれない」
　淡々と自分の意見を口にするシグマに、蛇の杖つえを持つ子供の姿となった影かげが口を開く。
「三騎士はエクストラクラスにならない、そのルールが適用されているかどうかも怪しいものだね。僕らは『影かげ法ぼう師し』として聖杯からある程度聖杯戦争についての知ち識しきを得ているけれど、それは冬木のルールを基準にしたものだ。このスノーフィールドの聖杯戦争は、本来のルールから逸脱し過ぎているよ」
「偽物だからな。そういう事もあるか」
　あっさりと納得するシグマに肩を竦すくめつつ、影法師は尚なおも語り続けた。
「現に、君が喚び出した『ウォッチャー』は、既に街の監かん視しを始めている。そして、もうほころびを見つけたらしい」
「ほころび？」
「三騎士のアーチャーとして喚ばれた筈はずの英霊が、それこそエクストラクラスの『アヴェンジャー』さながらに変質させられているし、本来喚ばれる筈の無いものが、互いに喚び寄せ合う形でワラワラとこの地に引き寄せられている」
　そこで子供の姿は掻かき消きえ、代わりに、部へ屋やの隅に杖つえを突いた『船長』が現れた。
「ああ、渓けい谷こくの方で俺おれと似た気配けはいを感じる

な……」
「……似た気配？」
「懐なつかしく、そして俺を滾たぎらせる匂においだ。臓ぞう腑ふの更に奥底から湧わき上あがる、純然たる憤ふん怒ぬを感じるな。ああ、もしも俺が正しく英霊として喚ばれていたのならば、それこそ騎兵ではなく、復ふく讐しゆうを礎いしずえとするクラスとして顕けん現げんしていただろうな。そうでない事が……『アレ』の影法師である事が無念でならん」
　言葉から徐々に感情が消えていき、その奥底に冷たく燃もえたぎるマグマのような不気味な躍やく動どうを感じ取ったシグマだが、特にその話を追及する事はしなかった。
　影法師と名乗る彼らは、時折何らかの無念や憎しみを語り出す事はあるが、どれもこれもシグマには興きよう味みの無い事だったし、自分が喚び出した英霊の真しん名めいを知る手がかりになるとも思えなかったので基本的には聞き流し続けている。
　しかし、生来の性さがか、あるいは幼少期からの特殊な訓練によるものか。聞き流しているつもりでも、耳に届いた言葉は頭の中にしっかりと刻み込まれ続けていた。
　だが、いつまでも相手の愚ぐ痴ちを聞き続けるわけにはいかない。
　シグマは先刻の話から幾ばくかの情報を纏まとめ、影かげ法ぼう師し達に問いを投げかける事にした。
「つまり、お前達は……この街の聖せい杯はい戦せん争そうを、客きやつ観かん的てきに観測しているのか？」

「正せい確かくには僕達じゃなくて、君が喚よんだ存在が……だけどね」

×　　　　　　　　　　×

市内某所　デュマの書斎

「……なーんか、今朝けさがたから妙な視し線せんを感じるな」
　与えられた部へ屋やで『ヒュドラの毒どく短たん剣けん』の『改かい稿こう』を行っていたキャスター、アレクサンドル・デュマ・ペールは、首を傾かしげながら周囲に視線を巡らせる。
　目に映るのは、いつも通りの部屋だ。
　無数の本棚と、山のように積つみ上あげられた本。
　テーブル上に並べられた、様々な料理や菓子の数々。
　インターネットに接続されたノートパソコン。
　古めかしいデザインの有線電話器。
　しかし、何かが違う。
　空間の『質』そのものが変質したような違和感を覚えたデュマは、ニヤリと歯を覗のぞかせ、楽しそうに己おのれの作業を再開した。
「まあ、いいさ。観客は多い方がいい」
　楽しそうに楽しそうに、想定外の事態アクシデントすら舞ぶ台たい劇げきの醍だい醐ご味みだと断ずるかのように。

「こんな大掛かりな仁に輪わ加か狂きよう言げん、一人ひとりで楽しんだらバチがあたるってもんだぜ！　ハハッ！」

×　　　　　　　　　　　　　　×

沼地の屋や敷しき

「それなら教えてくれ。お前達の視点から見たら、俺おれはどう見えているんだ？」
　不意に湧わき上あがった好奇心から、シグマは影法師達にそう尋ねかけた。
　シグマは、自分が何者であるかという事をあまり考えた事がない。
　世の中の出来事だけでなく、彼は、自分自身にすら興きよう味みが

持てずにいたのである。

自分の年ねん齢れいさえも、正せい確かくには良く解わからなかった。

十代後半ほどの見た目と思われる事が多いが、何年も前からすでに身体からだの成長と老ふけ込こみは停とまっている気がする。

雇い主は『少年兵時代に身体を魔ま術じゆつ使つかいどもに弄いじられすぎたねえ。多た分ぶん、普通の人より寿命は短めなんじゃないかな？　若い時代が長い代わりに、死ぬ時は急に老け込んで老衰死の大だい往おう生じようって感じ？』などと茶化ちやかしていたが、恐らくその通りなのだろう。

だが、どうでも良い事だった。

そもそも自分の職しよく業ぎよう柄がら、大往生で死ねる確かく率りつなど限り無く低いであろう事は解っているのだから。

しかし、そんな自分がどのような存在であるかは気になった。

シグマは神も仏も信じてはいない。

聖せい杯はい戦せん争そうなどというものに参加している時点で、自分が遠く及ばぬ『力』が存在する事は理解している。もちろん理解しているだけで、その『力』を信仰するつもりもないのだが。

大いなる力とやらが自分を見て何と評するのか、シグマは何故なぜか、それだけが妙に気になったのである。

ゴミだろうか。それとも空気同然の存在と言われるのだろうか。

生きている価値すらないと断じられるかもしれないが、それもまたやむなしだと考える。

死ねと言われて死ぬ気はないが、『お前には存在する意味がない』と言われた所で、反はん論ろんする程の理由を並べ立てる事が今のシグマにはできなかった。

そんな事を考えていると、『蛇の杖つえの子供』の姿を取った影かげが困ったように首を振る。

「すまない。番人ウオツチヤーは過去から全すべてを見通しているわけじゃない。喚よび出だされた瞬しゆん間かんからの事を見続けてい

るだけなんだ。だから、君はまだ何者でもない、そう番人ウオツチャーは判断している」
「まだ、じゃない。これからもずっと何者でもないままだ」
「どうかな。何者にでもなれるという事さ。それこそ聖杯を手に入れたら、英えい霊れい達と肩を並べる力を手に入れる事ができるかもしれない」
　万能の願がん望ぼう器き、聖杯。
　仮にそれを手に入れる事ができたならばどうするか、シグマは改めて考えた。
　しかし、やはりそのような大層な代しろ物ものに対する願ねがいが湧わき上あがらない。
「……もしも俺おれが聖杯を手に入れたら……少しは人並みの夢を見る事ができるのか？　もちろん夜の夢という意味じゃなく、大たい望もうという意味でなんだが……」
　しどろもどろになって説明するシグマに、蛇の杖を持つ子供は明るい声で頷うなずいた。
「ああ、いいね！　そうさ。聖杯を手に入れれば、君はきっと夢を見る事ができる。番人ウオツチヤーが、現実を見張り続けているようにね」
「街で起こっている事を見張る能力……。普通のサーヴァントが手に入れていたら、聖せい杯はい戦せん争そうは簡かん単たんに決着が付くだろうな」
「その通りだ小僧！　やっと気付いたか」
『船長』が凶悪な笑えみを浮かべて口を開く。
「ああ、そうだ。お前の能力が他ほかの参加者に知られたら、まずは聖杯戦争はお前の争奪戦になるだろう！」
「……え？」
　そこでシグマは眉まゆを僅わずかに顰ひそめる。
　少し考え、『船長』の言う事はもっともだと理解した。
「なるほど、今の俺おれは、ただの補給物資のようなものか」

「戦場のど真ん中に届けられた、一個だけの貴重な物資だぜ、小僧。さぞかし激はげしい取り合いになる事だろうな」
「それは構わない。ただ、巻き込まれて死ぬのは嫌いやだな」
　夢などはないが、痛いのは嫌だし死にたくもない、飢うえたくもない。
　そんな最低限の欲求を満たすために、自分が何をすべきか考える。
　すると、翼つばさを背負った少年が、優やさしい笑みを浮かべながら言った。
「強くなればいい。巻き込まれるんじゃない、巻き込む側になるんだ」
「無茶むちやを言うな。俺の雇い主ですら、常じよう識しき外はずれの魔ま術じゆつ師しだ」
「障しよう壁へきを乗り越えればいい。ウォッチャーは君に理不尽と言うべき試練を与え続けるだろう。それを乗り越えれば、君は少しずつ何者かになれる。もう、ただの魔術使いＡじゃなくなるよ」
　翼の少年の言葉を聞き、シグマは無表情のまま少し考え──
　初めて、彼らの言葉に異を唱える事にした。
　死から逃のがれる意志を表明するための、ささやかな第一歩として。
「魔術使いＡでも、兵士Ａでもない」

「俺は……シグマだ」

森の中

　──私は一体、何をしているんだろう。
　アヤカ・サジョウがそう考えたのは、この24時間でもう何度目だろうか。
　横にすり寄ってきた、毛並みが綺き麗れいな獣けものの腹をモフモフと撫なでながら、アヤカはぼんやりとそんな事を考える。
　──ええと、私は何をしているんだ？
　──そうだ、聖せい杯はい戦せん争そうだ。
　クウンクウンと鳴きながら頭をすりつけてくる銀ぎん色いろの獣。
　──聖杯戦争……の、筈はずだよね。
　その温かさを感じつつ、アヤカはここ半日ほどの動向を思い出す事にした。

×　×

半日前　スノーフィールド中心街

　まだ日が昇るか昇らないかの頃ころ合あい、警けい察さつ署しよから離はなれるべく早足で歩いていたアヤカは、後ろに立つセイバーがホッと息をつくのを確かく認にんした。
「？　どうしたの？」
「ああ、いや。ちょっと知り合いに警察署の様よう子すを見てきて貰もらっていたんだが、拘こう留りゆうされていた人間達も一時的に外に退たい避ひさせているらしい」

「それで？」
「警官達相手に、夜明けまでは軟禁されるという約束をしていたからな。戻ろうと思っていたんだが、君を一人ひとりにするのが心配でね。誰だれを残していくか迷ってたんだ。警察署自体が機き能のうしていないなら、まあ、その直前まで軟禁されていた事で義理は果たせた事になるかと思ってね」
　明るい調ちよう子しで語るセイバーを見て、今度はアヤカが溜ため息いきを吐つく。
「そんな約束、守るつもりだったの？」
「約やく定じようは大事だ。破られた人間だけじゃない、それに巻き込まれる人間が不幸になる」
「良く解わからないけど……『誰を残していくか』って、貴方あなた、一人じゃない」
「君がいるから一人じゃないぞ？」
　軽口を叩たたいて誤ご魔ま化かそうとするセイバーに、冷たい視し線せんを送るアヤカ。
「ははは、そんな目で見られても、こっちの手の内はここでは明かさないぞ？　いや、でもどうしても気になるというなら、ヒントだけでも……」
「いらない」
　更に冷たい視線を送った後、アヤカはもう一度大きな溜息をついてから口を開いた。
「でも、私を心配してくれたのは本当なんだよね……。余計なお世話だって思ってはいるけど……その、ありがとう」
　言こと葉ば尻じりを小さくしながら礼を言うアヤカに、セイバーは笑顔えがおを返して首を振る。
「礼なんていいさ。本当に俺おれは余計な世話を焼いてるだけだからな。やりたい事をやってるだけで感かん謝しやまでされたら、ますます張り切りたくなるだろ？　そうだな。歩くのが疲れたなら馬でも出そうか？　ちょっと魔ま力りよくを消費すれば、ウィリアムの奴やつ

が出してくれるかも……」
「いや、いいから、本当にいいから！　……っていうか、ウィリアムって誰？　話すつもりないのにちょくちょく知らない人の名前をこれみよがしに出したりするのはなんで？」
　放ほうっておいたら何をしでかすか解らない英えい霊れいを諌いさめつつ、疑念に感じていた事を口にするアヤカ。
　すると、セイバーは一いつ瞬しゆん目を逸そらした後、誤ご魔ま化かすように笑いながら答えた。
「いや、なんだか寂しそうな暗い顔してたからな。それとなく、見えない仲間がたくさんいるって匂におわせておけば、もう寂しくなくなるだろうと思ったんだが……」
「不気味なだけだから止やめて」
「解わかった、やめよう。まあいいさ。『みんな』の事も、おいおいちゃんと説明するよ」
「別にしなくてもいいんだけど……でも、明かりの件とか、他ほかにも私が知らない間に世話になってる事があったら、その人達に私の代わりに御お礼れいを言っておいてくれないかな……」
　すると、セイバーは一瞬目を丸くした後、微笑ほほえみながらアヤカを賞しよう賛さんした。
「君は仏ぶつ頂ちよう面づらだけれど優やさしい子だな。アヤカ」
「仏頂面で悪かったね……」
　そんな会話を続けていると、不意に横から声がかかった。
「よう！　嬢じようちゃん！　嬢ちゃん！」
「え？」
「ああ、やっぱり昨日きのうの嬢ちゃんだ。警けい察さつ署しよの方から来たみたいだけどよ、大丈夫か？」
　つい最近聞いた覚えのある声だと思ってアヤカが振り返ると、そこには一度見たら忘れない派は手でな髪型の青年が立っている。
　モヒカン刈りに首のタトゥー、顔や耳のあちこちにピアスを付けた、派手なパンクファッションの男━アヤカが街に入った時にモーテ

ルの場所を教えてくれた、ドラッグストアの店員だった。
「あの時の……」
「こんなとこで会うなんざ奇遇だな。そっちの彼は？　もしかして彼氏さんかい？」
「いや、そういうわけじゃ……。まあ、ただの知り合いかな」
　一般人にサーヴァントがどうこう言うわけにもいかないので、適当に誤魔化すアヤカ。
　セイバーの方はというと、モヒカン男とその周りにいるパンクファッションの若者達をマジマジと眺め、無邪気な調ちよう子しで尋ねかけた。
「不ぶ躾しつけな事を尋ねてすまないが、その外連けれん味みのある服は、自分で縫ほう製せいしたのか？　それとも専門の職しよく人にんが？　その反骨心に満ちた髪も自分でゆったのか聞かせて貰もらって構わないか？」
　目を耀かがやかせながら言うセイバーに、バンドマン達は顔を見合わせ、モヒカンの男がアヤカに言う。
「あんたの彼氏、いったいどこの国から来たんだ？」
「いや、だから彼氏じゃ……」
　まずそこを否定しようとするアヤカを余所よそに、セイバーが答えた。
「イングランドだ。まあ、ロンドンやウィンチェスターも含めて、土地自体にはあまり長くはいなかったけどな」
「ふーん。向こうも結構な本場だと思うがなあ」
　首を傾かしげるモヒカンが背負うギターケースを見て、セイバーはピンと来たとばかりに双そう眸ぼうを見開き問い掛ける。
「君達は、もしや楽師か？」
「楽師って……持って回った言い方すんなあ、兄にいちゃん」
「ああ、すまない。与えられた知ち識しきが偏かたよっていてな……どうすれば君達の曲が聴きける？　教会か？　酒場か？　歌か劇げき場じようは……ああ！　俺おれが壊こわしたばかりだ……！」

バカにしていると思われても仕方ないセイバーの物言いだが、聞いているアヤカの耳には、不ふ思し議ぎと悪意があるようには感じられなかった。
　寧むしろ、これまでどこか一歩引いて余裕をみせるかのような立ち回りをしていたセイバーが、本当に子供のように無邪気に尋ねているのを見て、アヤカは理解する。
　──この人……。
　──もしかして、音楽好きなのかな……。
　英えい霊れいとして持つカリスマの力が影えい響きようしたのかどうかは解わからないが、モヒカン達もアヤカと同じように受け取ったようで、セイバーの事を『音楽好きの変わり者』と認識したようだ。
「よくわかんねえけど、俺おれらが教会で演奏するように見えるとはな。はッ！　そいつぁいい。ウーピー・ゴールドバーグの映画を思い出すぜ」
「それは有名な歌劇家の名か？」
「まあ、そんな所だ」
　モヒカンは肩を竦すくめながら、アヤカとセイバーに語りかける。
「オールナイトライブやってたんだけどよ、銃声だの爆ばく発はつだのがしたと思ったら、警けい察さつの避ひ難なん指し示じとやらで客を追い出されちまった」
「……災さい難なんだったね」
　先刻見た神父と吸血鬼の戦いを思い出し、アヤカは冷や汗を滲にじませながら頷うなずいた。
「どうだ？　タダでいいから、聴きいてっちゃくれねえか？」
「いや、それは……」
　自分達が身を隠している身であるという事や、タダという事に引け目を感じる事などから遠えん慮りよしようとしたアヤカだったが──
「いいのか!?　ありがとう！　君はいい奴やつだな、この恩は座ざに戻っても決して忘れない！」
　双眸を爛らん々らんと輝かがやかせ、初めて映画スターに出会った

子供のように嬉うれしそうに言うセイバーを見て、アヤカは完全に理解した。
　──あ、間違いない。
　──この英雄……音楽大好きなんだ。

　数分後。
　アヤカとセイバーは、モヒカン刈りの青年とそのバンド仲間という面々に連れられ、地下にあるライブハウスへと降りていく。
「階段、結構急だから気を付けてくれよ？　悪いな、このビル、古いからエレベーターなんて洒落しやれたもんついてなくてよ」
　アヤカの尋ねた『このビルにエレベーターはあるか』という問いを別の意味で受け取ったのだろう。申し訳なさそうに言うモヒカンの男の言葉を聞き、アヤカの心に罪悪感が芽め生ばえた。
　それにしても、とアヤカは思う。
　──この英えい霊れい……。どうみても中ちゆう世せいあたりの英えい雄ゆうだよね……？
　──私もパンクとかメタルとかどう違うのか詳しくないけど、この手の派は手でなロックバンドの音楽って、当時の音楽と全然違うんじゃないかな……。
　──ええと……クラシック？　いや、多た分ぶんモーツァルトとかベートーベンより、もっとずっとずっと昔の音楽だよね、セイバーが聴きいてたのって。
　──ロックを聴きいた途端とたんに怒り出したらどうしよう……。現代人でさえ若者向けの音楽ってだけで怒る人とか居るのに……。
　ネガティブな事を考えつつ、さりとて行く当ても無かったので、アヤカは流されるままにセイバーやバンドマン達の後をついて行った。
　もしもセイバーが『こんなものは音楽ではない！』と騒さわぎ出だしたら、令れい呪じゆとやらの力を試してでも無む理り矢や理りこの場から連れだそうと決意する。

──令呪か……。
　──使い方は聞いたけど、正式な契約も結んでないし、本当に効くのかな……。
　──そもそも、私のこれは偽物の令呪らしいし……。
　マスターの権利を横取りする為ためだけに作られたという『偽の令呪』。
　アヤカの身体からだに植え付けられた五つの紋様は、この土地に来る直前、アヤカの身体に『白い女』が施したものだ。
『白い女』は本物の令呪と同じようにサーヴァントへの命令権を持つと言っていたが、どこまで本当なのか怪しいものだとアヤカは考えている。
　何しろこの時点で、聖せい杯はい戦せん争そうはアヤカが『白い女』から聞かされていた話とだいぶ違う事になっているのだから。
　──『聖杯戦争は秘ひ匿とくされ、人目につかない所でひっそりと行われる殺し合い』……っていう所からもう話が違うし……。
　──この令呪っていうのが本物だったとしても、私にそんな魔ま術じゅつ師しみたいな真似まねができるのかな……。
　不安に押おし潰つぶされそうになりながら、彼女は階段を降り続けた。
　その先に、まだ見ぬ地じ獄ごくが待っているのだと覚悟しながら。

　結果として、アヤカの覚悟は全すべて杞き憂ゆうに終わった。
「凄すごい……！」
　アヤカとセイバー、避ひ難なんせずに残っていた数名のライブハウススタッフだけが観かん客きゃくという寂しいライブ。しかし、一通り演奏を聴きき終おえた途端とたん、セイバー一人ひとりで百人のファンにも匹敵する万雷の喝かっ采さいを送り讃たたえたのである。
「素す晴ばらしい！　感動した！　この感動を詩しい歌かに纏まとめてアヴァロンに捧ささげ伝つたえねば……いや、過度な装飾などいら

ない！　ただただ素晴らしいの一言だ！　アヤカ、凄いなアヤカ！　この時代の吟ぎん遊ゆう詩し人じん達は、みんなこんな激はげしい音楽を奏かなでるのか!?」
「え、いや、うん……」
　答えに詰まるアヤカに、セイバーが目を耀かがやかせ、アヤカにだけ聞こえるような小声で尋ねた。
「彼らが演奏したのはなんという音楽だ？　俺おれの時代の音楽とはまるで違うが、細分化されているのか？　座ざは何故なぜかその手の知ち識しきはくれなかったんでな……。これほど重要な事はないのに！　やはりこの聖せい杯はい戦せん争そうは何かおかしい、通常の物とは違う可能性がある」
「おかしいのはアンタだと思うけど……。この音楽は……ええと、パンク？　いや、メタルかな……」
　すると、コソコソ話している二人ふたりの様よう子すが気になったのか、演奏を終えて近づいて来たモヒカンのギタリストがアヤカの声を聞いて言った。
「ああ、なんだっていいさ。ちょっと前はメタルだのパンクだので殴り合いする連中もいたが、俺らはやりたいようにやってるだけだからよ、まあ、ただのロックンロールでいいぜ」
　特に自分達の音楽の呼ばれかたに拘こだわりはないようで、彼らは自分達の音楽を聴いて無邪気に喜んでいるセイバーを見て照れているようにも見えた。
「ロックンロール！　そうか、これはロックンロールという音楽なのか！」
　そして、セイバーはモヒカンの持つエレキギターに目を向ける。
「これが今の楽器か！　初めて聴く独特な音色だったが、雷鳴の如ごとき轟ごう音おんと旋律が見事な調ちよう和わを見せていた！　まるで臓ぞう腑ふごと魂を鷲わし摑づかみにされたような気分だったぞ！」
　エレキギターを初めて見るかのような物言いをするセイバーに、モ

ヒカンの青年は不ふ思し議ぎそうに尋ねた。
「……いや、さっきの、メタルとかパンクとか細かい話かと思ったけどよ、もしかしてアンタ、ロックを聴くのも初めてなのか？」
「ああ、ロックンロールはロックと略すんだな。いや、恥ずかしながら初めて聴いた。別の時と場所で耳にした事はあるのかもしれないが、少なくとも今の俺おれの記き憶おくにはない。こんな新しん鮮せんな感動が得られるとは思わなかった！」
「まいったな……兄にいちゃん、イギリスのどんな山奥から来たんだ？」
「本当に騎き士しの時代からタイムスリップしてきたんじゃない？」
　ベーシストの女性が冗じよう談だんめかして言ったが、アヤカは苦笑を浮かべる事しかできない。
　子供のように楽しげなセイバーに、モヒカンの青年が己おのれのエレキギターを差し出した。
「なんなら、触ってみるか？」
「……いいのか？」

　それから、セイバーの独演会が始まった。
　初めて触るギターをすぐに使いこなし始めるセイバーを見て、アヤカは『やっぱり、英えい雄ゆうになるぐらいだからなんでもできるんだね』と、そんな少しズレた事をぼんやりと考え続けた。
　セイバーの奏かなでる音色に、心を取り込まれてしまわぬように。
　アヤカが部へ屋やの隅でボヤボヤしているうちに、別のギターを持ってきたモヒカンの青年を含め、他ほかのメンバーも音をセイバーに合わせ始め、最後にはビデオカメラで演奏の撮さつ影えいし始める始末だった。
　どうやら余程バンドメンバー達に気に入られたらしく、朝食は何を食べるかなどという話まで始めている。
　更には、いつの間にか鎧よろいを脱いでおり、衣装部屋に放置されていた適当な服を譲ゆずられたのか、少し大人おとなしめなバンドメ

ンバーといった感じの格好になっていた。
　赤毛混じりの金髪と相まって、そこそこに似合っているのが逆にアヤカを呆あきれさせる。
　──……参加を拒否した私が言うのもなんだけど……。
　──この英えい霊れい、本当に聖せい杯はいの奪い合いを真面目まじめにやる気あるのかな……？

　バンドメンバー達が着替えてくると言って控え室に戻っていくと、セイバーがステージの端に腰かけているアヤカの側そばに来て言った。
「大丈夫か、アヤカ？　眠かったりしないか？」
「ずっとエレキギターの音に晒さらされてたお陰で、目がさえてしょうがない」
「はは、そりゃ悪かった」
　ニコニコと笑いながらヒョイと腰をうかせてアヤカの横に座ると、セイバーは小声で告げる。
「……この地下には魔術的な礼装も外部に繋がる監視装置も無い。寝るなら今だぞ？」
　その言葉を聞いて、アヤカは眼鏡めがねの奥で目を丸くした。
　てっきり音楽に浮かれて聖せい杯はい戦せん争そうの事は疎おろか、自分達が逃亡中である事も忘れ去っているとばかり思っていたセイバーが、そのように気を回しているとは思いもしなかったのだ。
「……さっきまでのは、お芝居だったってわけ？」
「？　何がだ？」
「いや、……音楽に感動したフリしてたとか……」
「そんなわけないだろう！　本当に感動した！　アヤカは感動しなかったのか!?」
　セイバーはそう言うと、周囲のステージと観かん客きやく席せきをグルリと見渡しながら言葉を続ける。
「正直、最初は敵の魔ま術じゆつ師し達の監かん視しのない場所に潜

もぐり込こみながら、現代の音楽が聴きけるのが少し楽しみなぐらいだった。だが、ここまで変化した調しらべに出会えるとは本当に僥ぎよう倖こうだった。俺おれを止めなかったアヤカに感かん謝しやしたい」
「まあ、止められる空気でもなかったしね。モヒカンの人、ああ見えて優やさしいいし」
　そしてアヤカは、溜ため息いきを吐ついた後にセイバーに言った。
「うん、正直、曲も嫌いじゃなかったよ。アンタが騒さわぎすぎるから逆に一歩引いちゃったけど」
「そうか、それはすまなかった……。だが、彼らは本当に凄すごいな！　歌詞の中に己おのれの鬱うつ屈くつや怒りを記しながらも、それが単なる愚ぐ痴ちになっていない。激げき情じようを表す音に乗せて叫ぶ事で世界に己の存在を挑ませているんだ！　俺が良く聴きいてたのは、偉大なる祖王、アーサー・ペンドラゴンや円えん卓たくの騎き士し達の英えい雄ゆう譚たんを謳うたう詩曲ばかりだったからな」
　過去を懐なつかしむと同時に、先刻と同じように目を耀かがやかせるセイバーを見て、アヤカは思う。
　──この英雄は、私とは逆だな……。色んな事を、本当に心の底から楽しそうに語る。
　──後ろ向きな事しか考えられない私とは大違いだ……。
　──私なんかと魔力が繋つながったせいで、この人は聖せい杯はいを得られないかもしれない。
「ねえ」
「ん？　どうした？　眠いなら寝具が無いか聞いてくるぞ？」
「いや……あんたは、聖杯に何を願ねがうつもりなの？」
　するとセイバーは、少し驚おどろいたように言った。
「おや、珍しいな。アヤカから聖せい杯はい戦せん争そうに関かかわる事を聞いてくるとは」
「……別に。凄い重要な理由があるなら……あんたに謝あやまらないといけないからね。私は聖杯を手に入れるのになんの役にも立ちそう

にないし」
　すると、その言葉を聞いてセイバーはキョトンとした顔をする。
「そんな事を気にしてたのか？　こうして現げん界かいする為ための魔力を提供してくれる君が、役立たずな筈はずないだろう」
「悪かったね。こう見えても、小心者だから」
　アヤカはそう言ってセイバーから顔を逸そらした。
　そんなアヤカを見て、セイバーは少し悩んだ後に口を開く。
「聖杯を望む理由か……。それは俺も知りたいな」
「……どういう事？　聖杯を望んだから、召喚で出て来たんじゃないの？」
「普通に考えればその筈はずなんだが、喚よばれた俺おれにも、ハッキリと欲しい理由が解わからないんだ。……魔ま術じゆつ師し達が『座ざ』と呼ぶのは特殊な場でな。空間は疎おろか時間や世せ界かい線せんすらも混こん濁だくする。もしかしたら、これから先か、あるいは別の場所で喚び出された時に何か聖せい杯はいを望む理由ができるのかもしれないが、少なくとも今の俺の中にその記き憶おくは降りてきていない」
「時間とか記憶とか良く解らないけど……何かないの？　なんでも願ねがいが叶かなうんでしょう？」
「生前の行いに後悔がまったく無いと言えば嘘うそになるが、聖杯に願うような事柄でもないな。まあ、手に入れたら受肉でもして、本格的にこの時代の音楽や戯ぎ曲きよくを学んでみるのも手かな。意味はないかもしれないが、俺の魂のいた場所……さっき言った『座』にできるだけ多くの歌と英えい雄ゆう譚たんを持ち帰りたい」
　冗じよう談だんか本気か解らず、アヤカが向き直ると、そこには真剣に考えるセイバーの顔があった。
　その顔を見て、彼の言葉が本心を隠す為ための誤ご魔ま化かしではないとアヤカはなんとなく理解した。
　このセイバーは、本気で知らないのだと。
　何故なぜ、自分が聖杯を望む者として喚ばれたのかという事を。

「聖杯を望む理由は英えい霊れいにとって色々だろう。もしかしたら願いではなく、聖杯に対して別の意図……例えば破は壊かいしたいとかそういう思いがあって出て来た英霊もいるかもしれない。例えば、俺が喚び出された場にいた、あのアサシンっぽい英霊なら、そんな事を考えててもおかしくはないだろう」
　そして、セイバーは自分の過去を振り返りながら更に続けた。
「確たしかに、偉大なるアーサー王おうが求めた聖杯だ。アーサー王を尊敬する俺としては是非とも手に取ってみたい。アーサー王の本当の墓所に寄き贈ぞうしたいという想おもいもあるが……他ほかの英雄の大たい望もうを踏ふみ躙にじり、他人を危険な目に遭わせてまで欲しい程でもないな」
　言い終えた後、やや間を空けて、苦笑しながら虚空の誰かに向かって頷うなずくセイバー。
「ああ、そうだな。円えん卓たくに纏まつわる宝に目が眩くらみ、お前に射貫かれた俺の台詞せりふじゃない。だが、それを教訓に殊勝になったとも言えるだろう？」
「また見えない誰だれかと話してる……」
　先刻の約束はなんだったのかと嘆息をもらしかけたアヤカだったが――
　次の瞬しゅん間かん、その嘆息を喉のどの奥に呑のみ込こむ事となった。
「紹介するよ、ちょっと魔力のパスを強く繋つなぐぞ……」
　言うが早いか、彼はアヤカの右手のタトゥーに軽く触れた。
「ちょ、何を……」

　その瞬間、彼女の頭の中に明めい瞭りような『景色けしき』が浸しん蝕しよくする。
「あ……」
　西せい洋ようの城か砦とりでの見張り塔のような場所と、その中心でこちらを見ている、全身に包帯を巻いて、弩ど弓きゆうを手にした

男の顔が見える。
　獲え物ものを狙ねらう鷲わしのように鋭するどく、それでいて優やさしげな色の眼めが包帯の合間から覗のぞいていた。
　男はこちらを見て、困ったように眼を逸そらした後に小さく頷うなずく。

　それと同時に、アヤカの視界は元のライブハウスの中に戻っていた。
「今のは……？」
　現げん実じつ離ばなれしたものを見せられて困惑するアヤカに、セイバーは笑いながら答える。
「ピエール・バジル。凄すご腕うでの弓兵アーチヤーだよ」
「誰だれ？」
　紹介と言われても、名前を聞いただけでは何がなんだか解わからない。アヤカは更に説明を求めようとしたのだが、次のセイバーの言葉を聞いた途端とたん、金魚のように無言で口をパクつかせる事となった。

「俺を殺した男だ」

「……え？」
「俺おれが使える宝ほう具ぐ……というか、切り札は二つある。その内の一つが、俺が選んで向こうが同意した奴やつの魂を、座ざとかから転写して引っ張ってきて、何人か俺に同行させる力だ」
「……!?」
　呆ぼう然ぜんとするアヤカの前で、セイバーはあっさりと自分が英えい霊れいとして持つ特性について語り始める。
「サーヴァントみたいに最初っから最後まで実体化して顕けん現げんさせるのは無理だ。そいつらまで現げん界かいさせようとすると、魔ま力りよくがべらぼうに必要になる。普通の魔ま術じゆつ師しじゃす

ぐ枯こ渇かつするぐらいにな」
「いや……ええと」
「代わりに、あの歌か劇げき場じようの女の腕を弾はじいた矢や、警けい察さつ署しよで真っ暗になった時に使った光る水球みたいに、俺自身の魔力を介してその『技』や『魔術』で手助けして貰もらえるってわけだ。あと、俺となら普通に会話できるが、アヤカは今みたいに改めて魔力を通さないとダメっぽいな」
「……いや、ちょっと」
　アヤカが頬ほおをひくつかせるが、話の内容が分からなかったわけではない。
　魔術には疎うといが、最低限の事は『白い女』に叩たたき込こまれている為ため、言っている意味は解る。
　そして、だからこそアヤカにとってセイバーの行動に納得がいかなかった。
「ついでに言っておくと、もう一つの宝具は……」
「いや、だからちょっと待て！　待って！」
「どうした？」
　大声に驚おどろいて言葉を止めたセイバーに、アヤカはこめかみを指で押さえながら言う。
「さっきから、突然どうしたの!?　あんたを殺した奴やつの名前なんて、真しん名めいを教えているようなものじゃない！」
「お、知ってるのか？　ピエールの事」
「……いや、ピエールさんには悪いけど知らないし、正直な所、まだあんたの真名も解わからない。でも、他ほかの歴史に詳しい魔ま術じゅつ師しに聞かれたら確かく実じつにバレる事じゃないの!?」
　あたふたするアヤカとは対照的に、セイバーは『俺おれの知名度、結構低いのかな……』と首を傾かしげながら呟つぶやいた後、真剣な表情になって頷うなずいた。
「まあ、聞かれたらバレるだろう。だがそれだけじゃないぞ？　俺はこれから君に真名を言うつもりだ」

「何を考えてるの!?」
「さっき警けい察さつ署しよで『真名は機きを見て教える』と言っただろう？　今なら魔術師達に聞かれる心配もないから、最高のタイミングだと思うんだが。街の宿屋や道端では、監かん視しの眼めを全すべて潰つぶすのは難むずかしくなるからな」
　一方で、このライブハウスには少なくとも盗とう聴ちよう器きや使つかい魔まの類たぐいはいないとセイバー自身が語っている。だとするならば確たしかにバンドマン達が控え室に戻った今が話し時なのかもしれないが、それ以前に問題が山やま積づみだ。
「……理屈は解るけど、止やめた方がいいよ？」
「どうしてだ？」
　不ふ思し議ぎそうに尋ねるセイバーに、アヤカは力の籠こもった言葉を返す。
「私とあんたは、魔力で繫つながってるだけでしょう？　正式なマスターとサーヴァントの関係ですらない！　だったら、もっといいマスターに出会った時まで、真名は取っておいた方がいい。私みたいなのに話した所で、あんたには損しか……」
　今までに無い程の真剣さで止めにかかるアヤカだが──

「我が名はリチャード！　ノルマンディーの君主にしてイングランドの王である！」

　セイバーは突如真剣な顔になったかと思うと、アヤカの言葉をきっぱりと遮さえぎり、それでいて彼女を包み込むかのように、朗々と己おのれの真名を口にした。
「……」
「ま、死んだ今となっちゃどっちも『元』だが」
　口を開けたまま呆ぼう然ぜんとしているアヤカに対し、セイバーは、再び悪戯いたずら小こ僧ぞうのような笑えみを浮かべながら肩を竦すくめた。

「真しん名めいや立場よりも……『獅子心王ライオンハート』の通り名の方が有名かもしれないな」

×　　　　　　　　　　　　　　　　×

現在　森の中

　──まったく、とんでもない王様に巻き込まれた。

　真名を名乗った後も、セイバーは今まで通りの態度でアヤカに接してきた。
　最初は『王様』という単語を聞いて萎い縮しゆくしかけたものの、その後、バンドマン達が買ってきたファーストフードを食べて感動したり、ライブハウス内でひたすら音楽を聴きき続つづけているのを見て、アヤカは特に相手の生前の立場を気にしない事にした。
　──「ジャズ……クラシック……ブルース……ポップス……どれもこれも最高だ！　おお、パストゥレル、エスタンピー、デスコルト……南の詩人達の歌も新しい広がりを見せたか！」
　ライブハウスのオーナーの趣しゆ味みなのか、世界中の様々な音楽ＣＤが取りそろえられており、セイバーはそれらを聴く度たびに心の底からの感動の言葉を吐き出し続けたのである。
　──「アヤカ、君の国のエンカというのも叙情に溢あふれて素す晴ばらしいし、アニソンというのも物語性と多様性に満ちていて良いな！　この国のラップというのも言語を巧たくみに音に乗せていて眼めからウロコが落ちたぞ！」
　そんな事を言い出すセイバーを見て、とても敬意を払うべき王様という感覚は無くなっていた。だが、一人ひとりの人間としては尊敬できると思いつつ、アヤカもそれに付き合う形で様々な音楽を聴き続けた。

──「イングランドの音楽も、懐なつかしく感じる聖歌や民みん謡ようから、プログレというものまで多種多様で実に面おも白しろい！　音楽が自由だという事を再さい認にん識しきさせられる！」
　終しまいにはモヒカンの青年が最初に言っていたウーピー・ゴールドバーグの映画をＤＶＤで観みて、『なるほど、これが映画というものか！　戯ぎ曲きょくとはまた趣おもむきが違っていて良いものだな！　ああ、この聖歌隊は最高だ！』と言いだし、結局アヤカはセイバーがミュージカル映画などを見始めたあたりで眠気に負け、ライブハウスのソファ上で仮眠を取る結果となったのである。
　そして、気付けば昼になっており、モヒカン達に礼を言ってライブハウスを出ると、セイバーが唐突にこんな事を言い出したのだ。
　──「よし、誰だれかと同盟を組もう」

　そして、英えい霊れいの気配けはいを濃こく感じるというこの森に足を踏み入れ、男か女かも解わからないが、アヤカも息を呑のむほどに美しい長髪のサーヴァントと出会ったのである。
　セイバーは会うなり親しげに会話を始めたのだが、相手は特に気分を害してはいないようだ。
「それで？　僕になんの用だい？」
　相あい対たいする英霊にそう尋ねられたセイバーは、アヤカの方をチラリと見てから口を開いた。
「いやあ、君の真しん名めいも知らないし、どんな英霊なのかも解らないんだが……色々と歩き回って、最初に見つけたサーヴァントに頼もうと思ってな」
　そして、セイバーはその提案を口にする。
　事前に聞いていたアヤカからしても、やはり無む茶ちゃ振ぶり過すぎるだろうと思えた一言を。
「俺おれ達と、同盟を組む気はないか？」
　──本当にストレートに言ったね……。

—この人が治めてた国の人達、大変だったろうな……。
アヤカは小さく溜ため息いきを吐つき、銀ぎん色いろの獣けものの背を撫なでながら現げん実じつ逃とう避ひする。
—ああ、それにしても、この犬、大きいけど人なつっこくて可愛かわいいなあ。
彼女が犬だと思い込んでいる獣と戯たわむれていると、セイバーと相対していた英霊が、優やさしく微笑ほほえみながら口を開いた。
「別に構わないけれど……、僕はともかく、僕のマスターに何か利益があるのかな？」
するとセイバーは、再びアヤカの方に眼めを向けて肩を竦すくめる。
「マスターが大事なら、迂う闊かつに敵に近づけない方がいいんじゃないか？」
「君の方こそ。……って言いたいけれど、その心配はお互いになさそうだね」
「ああ、お互い、守しゅ護ごの手は打ってあるんだろうが……肝心のマスター同士があれじゃあな」
—なんの話をしてるんだろう。
巨大な木の根に座っていたアヤカは首を傾かしげるが、膝ひざに乗ってきた銀の獣をモフモフと弄いじるのに夢中になり、とりあえずその疑問を横に置いた。
—大きい犬って、あったかいなあ。
—あの英えい霊れいが飼ってるのかな？
銀色の獣の方もまんざらではないようで、アヤカの太ふと股ももの上で腹ばいになりながら、自分の毛並みを弄る彼女の手にされるがままになっている。

そんな一人ひとりと一匹の様よう子すを見て、セイバーが溜息を吐つく。
「もっと人を警けい戒かいする生き物だと思っていたが」

「マスターは少し人との関かかわりかたが特殊だったからね。人間が好きというわけじゃないよ。君のマスターに懐なついてるのは特別だと思う。味方か仲間だと思ってるみたいだ」
「マスターらしくない所とかかもな。まあ、彼女は実際マスターじゃないんだが」
　そんな冗じよう談だんめいた事を言った後、セイバーが言った。
「で、同盟を持ち出した理由だが……ゆうべ、街で魔物を見かけた」
「魔ま物もの？」
「そっちは知っているかどうか解わからないが、人の生き血を喰くらう、吸きゆう血けつ種しゆと呼ばれる人類の天敵。そして聖せい堂どう教きよう会かいの喧けん嘩か相手だな。……ああ、まず、聖堂教会は知ってるか？」
　根本的な所から確かく認にんするセイバーに対し、長髪の英えい霊れいは小さく首を振った。
「聖せい杯はいに与えられた知ち識しきの一部にあるぐらいだね。僕の時代にはまだ聖堂教会は無かったし、その吸血種っていう魔物は……どうかな、血肉を喰らう魔物はいたけど、同じ存在かどうかは解らない」
「おっと、これはもしや、歴史の大だい先せん輩ぱいかな？」
「そんな大したものじゃないよ。ただ。先に生まれて先に死んだだけの話さ。僕にとっては、後に生まれた人達こそ、神秘に頼らず星を開拓する敬愛すべき先駆者だよ」
「褒ほめても何もでないぞ？」
　そう言って笑うセイバーだが、少し経たってから、笑顔えがおを消して口を開く。
「この聖せい杯はい戦せん争そうは何かおかしい。座ざから与えられた知識だけでは説明のつかない何かが起こってる気がするんだが、何か心当たりはないか？」
「……」
「何か途轍とてつも無ない厄やつ介かい事ごとに聖せい杯はい戦せん

争そうが巻き込まれてるか……あるいは利用されているとするなら、それを全すべて排除してから、改めて仕切り直した方がいいと思っただけだ」
　セイバーはそう言うと、アヤカにチラリと視し線せんを向け、アヤカには聞こえぬように声を小さくしながら言葉を続けた。
「このままじゃ、仮に俺おれが負けた後に教会に避ひ難なんしたところで、アヤカが安全とは限らない。吸きゅう血けつ種しゅなら平気で教会を襲しゅう撃げきするだろうしな」
「随分、マスターの事を大事にしているんだね」
「いや、彼女が最初からやる気のあるマスターだったらここまで気は遣つかわないさ。だが、彼女は聖杯戦争の参加を拒絶したのに、俺おれとリンクが繋つながったせいで巻き込んだ。その責任を取らずに放置するのは、我が一族の系けい譜ふを受け継ぐ国々と、偉大なる祖王の名を汚す事になる」
　小声のまま朗々と語るという不ふ思し議ぎな真似まねをするセイバーに、相手の英えい霊れいはクスリと笑って頷うなずいた。
「面おも白しろいね。君も王様なんだろうけど、僕の知ってる王様とはタイプが全然違う。友達が人一倍多そうな所が特に」
「そうか？　君の方が友人は多そうだけどな」
「僕は世に生きるものは全て友達だと思ってるよ？　一方通行な想おもいになる事も多いけれどね」
　言いながら、長髪の英霊は静かに眼めを閉じ、両腕をそっと開いて手の平を上に向ける。
　すると、地面が泡立つように蠢うごめき、その泡の中から次から次へと無数の武具──剣や槌つち、斧おのや槍やりなどが生み出された。
「だけど、心の内まで曝さらけ出だす親友は一人ひとりだけと決めてるんだ」
　その様よう子すを見て、セイバーがニヤリと笑う。
「おいおい、交渉成立と決裂、どっちだ？」
「もちろん成立……って言いたい所だけど、問題が二つあってね」

長髪の英霊は、柔にゆう和わな笑顔えがおのまま言葉を続けた。
「その僕の唯一の親友は結構気むずかしくてね。僕が友達を作ったり、誰だれかと手を組もうとする度たびに『友と手を組むに相応ふさわしいか、我オレが試してくれよう』なんて言って無む理り難なん題だいをふっかけては追い払うんだ」
遠い過去を思い出し、懐なつかしみながら笑う長髪の英霊。
「君の場合は、まあ、普通に腕試しを要求されると思うよ？　君はウルクの民たみじゃないし……弱ければ普通にそのまま殺されると思う。彼から見れば、君は宝を狙ねらう賊ぞくだしね」
「話の流れが解わかったぞ？　もしかして、その『親友』も今回喚よばれてるってオチか？」
「察しが良くて助かるよ。希望を持たせておいて後でがっかりさせるのは忍びないからね。君がその王様と闘たたかえるかどうか、確たしかめておきたい。無理そうなら、その魔ま物もの退治は僕が一人でやるから、それまでどこかに隠れているといい」
地面から湧わき上あがった武具の数々がその身を傾け、切っ先がセイバーの方に集中した。
その状況でも、セイバーは切っ先が離はなれた場所にいるアヤカと銀ぎん狼ろうには向かっていない事を確かめ、安あん堵どしながら笑いかける。
「お優やさしい事だ。一人でできるなら、聖せい杯はいを確かく実じつに手に入れる為ために、このまま俺を殺しておいた方がいいんじゃないか？」
「残念だけど、僕の願ねがいはもう叶かなった。あとは、友達との約束を果たすだけだから君達の生死に興きよう味みはないよ」
この上なく柔和な笑顔に思えるが、その顔のまま『今後興味が湧けば命は貰もらう』というような意味の言葉を吐き出す英えい霊れいに、セイバーは楽しげに言う。
「解りやすいのは大好きだ。要はお前に、我が武技を示せばいいんだな」

「ちょっと、あんた達、なにを……」

　その様子を見ていたアヤカが声をかけるが、セイバーは振り返らぬまま軽く手をあげた。

「安心しろ、アヤカ。同盟を結ぶ為の腕試しだ。弱いヤツと同盟を結びたがらないのは、まあ普通なら当然の感覚だろう」

「……自分は普通じゃない、と言いたげだね」

　長髪の英霊の言葉に、セイバーは困ったような苦笑を浮かべる。

　そして、目の前の英霊とアヤカの双方に伝えるべく、声を大きく張り上げた。

「確たしかに、俺おれは自分で思う程『普通』じゃなかったらしい。実際、王としては国民や弟に迷惑を掛けっぱなしでな。敵からも悪逆非道の王と呼ばれる始末で、俺の尊敬する好敵手とは何もかもが逆だった」

　自じ虐ぎゃく的てきに言うセイバーだったが、彼はそこで眼めを爛らん々らんと輝かがやかせる。

「政まつりごとの理屈は解わかっていても、己おのれの臓ぞう腑ふから湧わき上あがる猛たけりだけは止められなかったのさ」

　□□？

　アヤカは、その言葉を聞きながら自分自身の身に起きた違和感に気付いた。

　──令れい呪じゅが……熱あつい……？

　魔ま力りょくの繋つながりの起点となっているアヤカの特殊な令呪を通して、大量の熱と見み紛まがう程の『ゆらぎ』が流れ込んでくる。魔力を供給すると引き替えに、セイバーの抑えきれない熱がこちらに入り込んでくるかのように。

「……凄すごいな、想像以上だ。君は凄い英霊なんだろう。地面から生はえたその武具の数々……どれもこれもが人類の最さい高こう峰ほうといった出来映えだ。それを全部こちらに向けるとは……ハハ」

　セイバーはそう言って小さく笑い、笑い、笑い──次の瞬しゅん間か

ん、閉じ込めていた熱を曝さらけ出だす。
「ハハハハハハ！　最高だ！　恐らくは偉大なる英えい雄ゆうよ！　これ程の誉ほまれはない！　心からの感かん謝しゃを送ろう！　君と聖せい杯はいに！　そして……」

「神の世に生きた伝説に挑む機き会かいを与えてくれた、我が祖王の全て遠き理想郷アヴァロンに！」

×　　　　　　　　×

暗い場所

「それにしても不ふ思し議ぎだなーっと」
『何がだい？』
　暗くら闇やみから返ってくるサーヴァントの声を聞きながら、フランチェスカはベッドの上で菓子を食べながら言葉を返した。
「うん、どうして『あの触媒』を使ったのに、アルトちゃんじゃなくて、あの変なセイバーが来たんだろうって」
『なんの触媒を使ったの？』
「うん、伝説の剣の鞘さやがなくなっちゃってたっていうからさ……その鞘が封印されてたっていう、鞘と同じ紋章が入った箱を使ったんだよ？」
『箱？』
　姿を見せぬ英えい霊れいの問いに、フランチェスカはゴロゴロとベッドの上を転がりつつ首を捻ひねる。
「そ、コーンウォールでアインツベルンが見つけたっていう、綺き麗れいに磨いた石でできた『箱』なの。魔ま力りよくの痕こん跡せきが残ってたし、鞘さやと同じ紋様が入ってたから、絶対にアルトちゃんのだと思ったんだけどなあ」

×　　　　　　　　×

大森林

　急にテンションが上がったセイバーに呼応するかのように、長髪の英霊は静かに微笑ほほえみ、数々の『宝ほう具ぐ』が刺さる大地に強い魔力を籠こめ始はじめる。
　それを見たアヤカが、息を呑のむ。
　──ちょっと待って!?
　──あいつの剣……警けい察さつ署しよに没収されたままで……素手なのに!?
　──っていうか、鎧よろいも着てない!?
　現在彼は、魔力で構成される鎧を脱いで、ライブハウスで入手した私服に身を包んでいる。
　アヤカの眼めにも凶悪に映る武具の数々の前で鎧がどれほど役に立つかは解わからないが、少なくとも私服のままではあっという間に串くし刺ざしになってしまうだろう。
　慌てて止めようとするアヤカを余所よそに、長髪の英えい霊れいは一斉に大地から武具を射出した。
　同時に、セイバーが強く大地を蹴けり、刃やいばの群れへと突進する。
　興こう奮ふんした調ちよう子しのまま、嬉うれしそうに嬉しそうに、愉悦に満ちた一言を呟つぶやきながら。

「さあ……戦いくさを始めよう」

×　　　　　　　　×

警けい察さつ署しよ

「どうだキャスター。届けさせた剣を見て、何か解わかったか？」
　警察署長の問いに、電話の向こうにいる英霊の呆あきれたような声が聞こえてくる。
『なにかもへったくれもねえよ。こいつぁ宝ほう具ぐでもなんでもねえ。ただの装飾剣だ。ま、いいデザインだとは思うがな。これ、貰もらっていいのか？』
　署長がデュマに届けたのは、セイバーが警察署に残していった装飾剣だ。
　まさか自分の武器を置いて逃亡を優ゆう先せんするとは思わず、署長室に戻ったところでまだ机の上にあるのを見た時は何かの罠わなではないかと訝いぶかしんだ程である。
「一応は証拠品だ。横流しはできない」
『っかー、相変わらず、煮すぎたゆで卵より堅かた物ぶつだなぁ手前てめえはよ！』
「そんな事より、確たしかに奴やつはその剣から雷の如ごとき斬ざん撃げきを放ち、落下してきたオペラハウスの瓦が礫れきを破は壊かいしたそうだ。目撃した警けい官かん達の記き憶おく操そう作さは完了しているが、中にはビーム砲のようだなどと言う者もいた」
　最初にオペラハウスの天てん井じようを破壊したのもその剣の力であろうと署長は推測していた。
　署長の見立てでも単なる装飾剣に過ぎなかったが、キャスターであるデュマが解析すれば何か解わかるのではないかと考えたのだ。
　上手うまく行けば、その剣の返却と引き替えにセイバーに対して協定を結ぶ事も可能かと思ったのだが、宝具ではないのなら、その方策は現実的ではないだろう。
『赤毛混じりの金髪の騎き士しねえ。そりゃ十中八九、獅し子し心しん王おうだろ』
「……やはり、君もそう判断するか、キャスター」
『ああ、獅子心王と言えば、こりゃまたど偉いアーサー王おうファンでな。ガキの頃ころから寝物語でアーサー王と円えん卓たくの騎き士

し達の伝説を聞いて育って、城で楽師達が奏かなでる音楽も決まってアーサー王を讃たたえる歌だ。若い頃は放ほう蕩とうするフリして、あちこちでアーサー王の遺い産さんを探しまくったなんて説もある』
「その話は、私も聞いた事があるな」
　英えい雄ゆうにつきものである後世に付け加えられた逸いつ話わの一つぐらいに考えていた署長は、さして重要な話ではないと考えたのだが、キャスターの反応はやや真剣なものだった。
『吟ぎん遊ゆう詩し人じんの文化が発達したのは、ドルイドの神秘を口く伝でんとして世界に伝え残す為ための技術ゆえに……って説もあるが、当時の歌や詩をあまり舐なめない方がいいぜ。毎日寝物語で聞かせてたら、それこそ呪のろいか祝福みてえに人の魂を改造してもおかしかねえ』
「……獅し子し心しん王おうは、比較的神秘の薄うすまった時代の英雄ではないのか？」
『大陸じゃそうだろうな。だが、今のフランス出身とはいえ、奴やつが王になったイングランドは海に閉じられて神秘の漏もれ出だし難にくい島国だからよ、生きてる間に何かしらの神秘に触れてもおかしかねえ。今現在魔ま術じゆつの総本山の一つである『時計とけい塔とう』がある時点でお察しって奴だ』
　キャスターはそこで一度言葉を止め、署長に言い聞かせるように重々しい声を吐き出した。
『なあ、兄弟。獅子心王が、俺おれの時代に何て呼ばれてたか知ってるか？　もしかしたら、今でもそう言われてるのかもしれねえけどよ』
「獅子心王は逸話が多すぎる。どれの話か解らんよ」
　またいつもの軽口かもしれないと考えたが、キャスターの言葉がたまに重要な情報をもたらす事も事実だ。署長はそこまでの期待はせずに、相手の言葉を待つ事にした。
『……【彷徨さまよえる王】だ』
「ああ、そういう事か。確たしかに、10年の在位期間で自分の国にい

た次期は１年にも満たなかったと聞いているが……」
『そうじゃねえ、そういう戦場を行ったり来たりしたとか、そういう話じゃあねえんだ』
　もったいぶった言い方をするキャスターに、署長は訝いぶかしげに問い掛ける。
「？　解わからんな。ならば、獅子心王は何処どこを彷徨さまよったというのだ」
『──【神話と歴史の境目を】だよ』
「……」
　その言葉には、力があった。
　ただの言葉であるにも拘かかわらず、思わず署長が黙だまり込こむ程の。
『精せい霊れいだのルーン魔ま術じゆつだのがまだ罷まかり通とおってた時代に片足を突っ込んでた、最後の王様って事だ。せいぜい甘く見ねえことだな』

×　　　　　　　　　　　　×

森の中

　電光石火、という言葉がある。

　雷光や火打ち石の火花が飛ぶ速さとして表現される言葉だが、アヤカがその瞬しゆん間かん眼めにしたのは、まさしく目に焼き付く程に激はげしい『電光石火』の連続だった。
　無数に射出された、大地より生まれし武具の数々。
　その全すべての武具の合間を縫ぬい動うごきながら、セイバーは長髪の英えい霊れいへと肉にく薄はくし、そのまま鋭するどい右フックを撃うち放はなつ。
「！」

長髪の英えい霊れいは即座に身を躱かわすが、セイバーはそれに合わせて一歩踏み込み、左斜め下から振り上げるアッパーカットを繰くり出だした。
相手は更に躱すが、舞まい上あがった髪の一部を拳こぶしが通り抜け、数本の髪がハラハラと地面に落ちる。
拳が斬ざん撃げきと化し、風に揺れる髪すら切り裂く一撃だ。
そのまま更に足を踏み込み、ステップで長髪の英霊の繰り出す土の触手を躱し、時にはその先に生まれる武具すらも踏み台としながら、相手にプロボクサーさながらの連撃を繰り出していく。
長髪の英霊も大したもので、自らの身体からだに迫る凶悪な拳をタイミング良く打ち払い続けた。
速さ自体はセイバーの方が僅わずかに上だが、瞬間的な筋力は相手の方が上のようで、大きく弾はじかれる分だけ速さが殺され、結果として同等の捌さばき合あいとなっている。
そこに再び土の武具の連れん撃げきが飛来し、セイバーは大きく間を取って仕切り直した。
「驚おどろいた、速いね。僕より速いとは思わなかった。今のはもしかして、身体強化の魔ま術じゆつかい？」
面おも白しろそうに首を振る長髪の英霊。
そんな彼を見て、セイバーは眼めを爛らん々らんと輝かがやかせたまま答えた。
「まあ、俺おれの魔術じゃないけどな。そんな事より……やっぱり、拳じゃ届かないか」
「魔術は君の『友達』の仕し業わざとして……拳けん闘とうも習っていたのかな？」
「少しな。俺が習った格闘に、今日きよう映画の中で見た技術を組み合わせてみたんだが、やはり上手うまくはいかないもんだ。同盟相手を殺すわけにもいかないから、殴って気絶させようとしたんだが……」
「少し習ったり見たりしただけで今の動きができるなら、充分に凄す

ごい事だよ」
　長髪の英霊はそう言って笑いながら、僅わずかに気配けはいを変質させた。
「……？」
　気配だけでなく、どことなく相手の英霊の立たち振ふる舞まい、あるいは身体からだ全体のバランスが僅かに変化した事に気付くセイバー。
　そんな彼に、英霊は言った。
「ランサーのクラスとして、少し本気で行くよ」
「セイバーだ、よろしくな」
　互いのクラスで名乗り合うと、彼らはニヤリと笑って動き出す。

　アヤカの眼には、再び舞い散る火花のような連撃の光景が焼き付けられた。
　彼女の心に浮かぶのは、黒衣の女が残像を残す勢いでオペラハウス内を跳ね回った時に、セイバーが感心しながら呟つぶやいた台詞せりふ。
　─『ロクスレイより身軽な奴やつは初めて見た』。
　しかし、とアヤカは思う。
　身軽さでは解わからないが、単純に瞬しゅん間かん的てきな速度だけならば、あの黒衣の女を上回っているのではないかと。

　一方で、セイバーは拳こぶしの連撃を繰くり出だしながら訝いぶかしむ。
　─おいおい、どんな手品だ？
　─この英えい霊れい……さっきよりも速くなってるな……！
　彼は与あずかり知しらぬ事だが─ランサーは先刻気配を変えた瞬間に、【変容】のスキルを用い、自らの耐久力と魔ま力りよくを一段階ずつ引き下げ、敏びん捷しよう力りよくを引き上げたのだ。
　これで速度は互角だが、筋力自体は落としていないために、セイ

バーの拳の連撃はランサーの捌さばきによって徐々に押し返されていく。
　次の瞬しゅん間かん、セイバーは右手から拳の代わりに魔力の籠こめられた水球を出し、閃せん光こうを放って相手の隙すきを生み出した。
「！」
　だが、その隙で相手に一いち撃げきを加えるのではなく、今度はこちらから距きょ離りを取るセイバー。
　彼はそのまま地面に眼めを向けると、身に迫る土の触手と飛来する武具を避けつつ、側そばに落ちていた太めの木の枝を一本拾い上げた。
　そして、ランサーにその枝を向けながらニヤリと笑った。
「やっぱり付け焼き刃の拳けん闘とうじゃ無理か。ここからは、クラスに合わせて剣を使うとしよう」
「その枝が、剣の代わりかい？」
　興きょう味み深ぶかげに尋ねるランサーに、セイバーは肩を竦すくめながら言った。
「一度やってみたかったんだ。『騎き士しは徒手にて死せず』と言って、拾った枝一本で敵を打ち払った、湖の騎士の真似まね事ごとをな」

　銀の獣けものと並び立ち、固唾かたずを呑のんで二人ふたりの英霊の戦いを見守るアヤカだったが──
　自信満々に木の枝を構えるセイバーを見て、少なからず不安を抱く。
　──良く解わからないけど、まさかその『真似事』とやらをやりたかったから、わざわざ素手で挑んだわけじゃないよね？
　──……違うよね？
　冷や汗がアヤカの頰ほおを伝ったのを合図としたかのようなタイミングで、再び大地から土の武具が大量に射出され、木の枝を構えたセ

イバーの許もとに切っ先を集約させた。
　先ほどの速度で動いたとしても避けきれるとは思えない密度だ。
　アヤカの眼には絶望的な状況。
　しかし、次の瞬間──喉のどから漏れかけたアヤカの悲鳴が、更なる驚きよう愕がくでせき止められた。
　ただの木の枝だった筈はずの物が、眩まばゆい光を放ち始めたのである。

×　　　　　　　　　　　　×

警けい察さつ署しよ

『ああ、あとよ。あんたらが用意した資料によると、アーサー王おうのエクスカリバーってのは、光の斬ざん撃げきで何もかも吹っ飛ばす……まあ、今の時代で言うなら、それこそビーム砲だわな』
「ああ、だからこそ、現れた英えい霊れいがアーサー王で、あの剣こそがエクスカリバーだと思ったのだが……」
　デュマの問い掛けに対し、署長は再び考え混む。
　エクスカリバーは神秘の時代の鍛冶かじ職しよく人にんが魔ま術じゆつ師しと共に打った人間用の宝ほう具ぐなどではなく、星の意志そのものが造り上げた神造兵器だとも言われていた。
　それが真実だとするならば、果たしてあの程度の威力で済むだろうか？
　すると、デュマが電話越しに楽しそうな笑い声を響ひびかせる。
『いやいや！　兄弟の考えは意外と当たってるかもしれねぇぜ？』
「どういう事だ？」
『獅し子し心しん王おうはアーサー王おうファンを拗こじらせ過すぎてな……。戦場も日常も隔てなく、自分の持ってる剣の全すべてに「エクスカリバー」って名付けてたらしい。終しまいにゃ剣だけじゃねえ、手に持って闘たたかえる物はなんでも「エクスカリバー」だ』

『食事に使ったナイフや丸めた羊よう皮ひ紙し……果てはそこらに落ちてる棒キレまでな』

×　　　　　　　　　　×

森の中

「──『永久に遠きエクス……勝利の剣カリバー』！」

　アヤカがその光を見たのは、これで三度目だろうか。
　天てん井じようを崩落させ、その後警けい官かんの前で落下した瓦が礫れきを斬きり伏ふせた、光の斬ざん撃げき。
　今回はその時よりも光の筋は小さかったが、光の中に圧あつ縮しゆくされた熱ねつ量りようが、一いつ瞬しゆんでその身に迫る武具の数々を消し飛ばした。
　そのまま先刻と同じ速度で地を駆け、ほんの一瞬でランサーの懐ふところへと入り込む。
　驚おどろいた顔をするランサーを、未いまだに光の残ざん滓しを纏まとわせた木の枝で斬り捨てようとしたのだが──その一撃は、無手であった筈はずのランサーによって受け止められた。
「おいおい……クルミを割るのに便利そうだな」
　呆あきれたように言うセイバーの視し線せんの先にあるのは、撃うち放はなった木の枝を受け止めるランサーの右手。彼のその手は指先が鋭するどい刃やいばに変化しており、濃のう密みつな魔ま力りよくを纏う木の枝に半分食い込ませながら枝による『斬撃』を見事に防いで見せたのである。
「驚いたね……木の枝でこの威力だなんて」
「それで？　試し験けんは合格か？　見た所、まだ実力の半分も出してないだろう？」

枝を押し込む力を緩ゆるめぬまま、セイバーが笑いながら尋ねた。
セイバーはこの数分のやり取りだけで理解する。
この英えい霊れいの正体は分からないが、自分を含めた他ほかの英霊達を含めて『規格外』の存在だと。
「君は強いね。まあ、僕の友達が何て言うか解わからないけど、いざとなれば僕が彼を止めている間に逃げればなんとかなると思うよ」
「……その『お友達』ってのは、君よりもっと強いのか？」
「どうかな？　昔は三日三晩殴り合って決着が付かなかったけど」
会話をしながら徐々に互いの力を緩ゆるめ、最後にはセイバーもゆっくりと枝を下ろした。
すると、まとわりついていた魔力が抜けると同時に、枝はボロボロになって崩れ落ちた。
「ああ、やっぱり木じゃ一度が限界か」
セイバーは溜ため息いきを吐ついた後、アヤカの方に歩み始める。
「ちょっと……大丈夫なの⁉」
『腕試し』が終わった事を理解したのだろう、アヤカも慌ててこちらに駆け寄ってきて、セイバーの身体からだに怪け我がなどがないかを確かく認にんしにきた。
「驚おどろかさないでよ！　なんでいきなり……あれは腕試しなんてもんじゃないよ、完全な殺し合いじゃない！」
「いや……まあ、世の中には命をかけた腕試しもあるんだ。俺おれの知り合いの騎き士しは『影かげの国に行って腕試しをしてくる』と言ってスコットランドに向かい、途中で八千人の山さん賊ぞくに囲まれて殺されたそうだ」
「そんな作り話で誤ご魔ま化かさないで！」
「よく作り話だと解ったな⁉　そうだ……山賊に殺された騎士はいないし、八千人の暴ぼう徒とに苦しめられる民たみ草くさもいなかったんだ。良かった……本当に良かった……！」
無む理り矢や理り話を逸そらそうとするセイバーを見て、ランサーが爽さわやかな笑顔えがおでアヤカに言った。

「許してあげなよ、彼は君の為ために色々と無茶むちやしたんだけど、素直にそう言えないだけだよ」
「え……？」
　ランサーの言葉を聞き、固まるアヤカ。
「君……いや、あんた、空気読めないって言われないか？」
「神様には良く言われたよ。牛を退治した時とか、それは酷ひどい言われようだったね」
「牛退治？　いやあ、その話をもっと詳しく聞きたいな！」
　力ちから尽ずくで話を逸らそうとするセイバーだが、編あみ上あげた後ろ髪をアヤカにひっぱられた。
　それも、思い切り体重をかけられて。
「あいたたた！　ちょ、やめてくれアヤカ！　痛い痛い！　解わかった、俺が悪かったから！」
　涙目になって振り返ると、そこには怒りながらも眼めに涙を浮かべているアヤカがいた。
「なんで……そんな事をするの？」
「なんでって」
「解るよ。具体的には知らないけど、あんたが本当に、私なんかの為に何かしようとしてくれてるのは解る……。でも、私はそんなこと頼んでない！」
「言ったろ？　君が断ろうと、俺おれは勝手に世話を焼くと」
　肩を竦すくめながら言うセイバーに、アヤカは更に叫んだ。
「魔ま力りよくが必要なら、魔ま術じゆつでもなんでも使って私を黙だまらせて、魔力を供給する人形にでもしてくれればいいだけの話なのに！　それなのに、私の事を気き遣づかったり……助けてくれたり……。私なんかを信用して真しん名めいを名乗ったりして……ああ、違う。あんたに感かん謝しやはしてる、してるの」
　感謝される事でもない、と言いかけたセイバーだが、敢あえてその口を閉じ、アヤカに言いたい事を言わせる事にした。
「だけど……私に、そんな価値はない！　私は誰だれかに守って貰も

らったり、信じて貰う資格なんてないんだ！」

　叫ぶアヤカの脳裏に浮かぶのは━赤い頭ず巾きんを被かぶった少女。
　血を流す少女の姿を思い出す度たびに、自分の中に声が響ひびく。
　自分がどれほど賤いやしく卑ひ怯きような人間かを叫び攻める声が。
「これだけ優やさしくされたのに、私はきっと、あんたを裏切る！　自分の身可愛かわいさに、あんたを置いて逃げるかもしれない、敵にあんたを売るかもしれない！」
　━ああ、そうだ、私は裏切ったんだ。
　━私は見捨てたんだ。
　━あの、蝉せみ菜なマンションで……あいつを……。
　過去を思い出し、頭痛と共に心しん臓ぞうが高鳴るアヤカだが━
　セイバーは小さく息を吐いて、困ったように口を開く。
「俺を売るかもしれないって……アヤカは本当に小さな事ばかり気にするなあ」
「小さな事って……」
「小さい小さい、よくある事さ。血を分けた弟にも、一度敵国ローマに売られかけたしな。見捨てられるどころか、あいつ、敵に金を払ってまで俺を解放させないようにしたんだぞ？」
　慰なぐさめや同情ではなく、本当にあっけらかんとした調ちよう子しで、セイバーは自分の身内についても語り出した。
「弟に……？」
　重い内容の事実を聞いてショックを受けるアヤカだが、
「いやー、大変だったけどなんとか国に帰ったら、弟の奴やつ、俺を死んだ事にしてまで王位を簒さん奪だつしようとしたのに、貴族からも国民からもそっぽ向かれて失敗しててさ。なんか逆に凄すごくかわいそうだった。元々俺の金遣いの荒さのせいで苦労させてたわけだし……」

「で、でも、それは、私とは関係ないし……」
　誤ご魔ま化かされるものかと口を開いたアヤカだが、その言葉もあっさりと斬きり捨すてられる。
「関係あるさ！　君だけじゃない。俺おれは誰だれに裏切られても、売られても、逃げられてもおかしくない生き方をしてきた。まさかとは思うけど、俺の事を善人だなんて勘違いしてないよな？」
「知らないよ、そんなの。あんたが何をやったかなんて……」
「……戦争さ」
　少しだけ誇らしげに、それでいてどことなく悲しげにセイバーは言った。
「俺にできる事は、それだけだったからな」
　それ以上は珍しく言いい淀よどむセイバーに、アヤカは何も言葉をかける事ができず、更なる自己嫌悪に陥りかけたのだが──
「クゥン」
　と、銀ぎん色いろの獣けものが足元に来てアヤカの脛すねに頬ほおを寄せる。
　まるで、焦燥に身を包むアヤカを宥なだめるかのように。
「……」
　すると、それまで黙だまっていたランサーが、銀の獣の背に手を置きながら言った。
「ほらほら、僕と同盟を組むっていう人達が景気の悪い顔をしていたらいけないよ。木の実とか果物くだものでよければ用意できるけど、何か食べるかい？」
「ああ、貰もらうよ。ありがとう」
　セイバーが差し出した手に野生のフルーツを乗せた後──ランサーは、少し離はなれた森の中に向かって問い掛けた。
「良かったら、君もどうかな？　さっきからずっとこっちを見てるけど、お腹なかが空すいているんじゃないかい？」
「……え？」
「何？」

アヤカとセイバーが眼めを丸くしながら顔を向けた瞬しゅん間かん、森から一つの影かげが現れる。
「……」
それは正しく、アヤカとセイバーが出会った場所にいた、あの黒くろ装しよう束ぞくの英えい霊れいだった。
「あッ!?」
「驚おどろいた、流石さすがに俺も気付かなかったな」
言いながら、セイバーはいつでも闘たたかえるよう全身の神経に気を巡らせていく。
黒衣の英霊は、顔を覆おおう布地の隙すき間まから、難むずかしい表情でこちらを睨にらみ続つづけていたのだが──
そんなアサシンらしき英えい霊れいが、唐突に声をあげた。
「獅し子し心しん王おう……リチャードか」
「その通りだ」
「ちょっと……」
慌てて止めるアヤカだが、セイバーは首を振る。
「ここまで色々聞かれたからには、隠す方が面めん倒どうだ」
あっけらかんというセイバーに、アヤカは一際大きな溜ため息いきを吐き出した。
すると、そんな二人ふたりの方を向いたまま、アサシンが言った。
「話は……聞こえていた」
そして、様々な葛かつ藤とうを乗り越えたと言わんばかりに、アサシンの少女は血が滲にじむ程に拳こぶしを握りしめながら口を開く。
「お前達は……魔ま物ものを斃たおすのか？」
するとセイバーは、真剣な調ちよう子しで答えた。
「人に害を為なすならな。生前……あいつら吸きゆう血けつ種しゆの同類に、敬愛する好敵手との戦いを邪魔された上に、部下を何人も殺されたからな……」
遠い過去を懐なつかしみ、同時に悔いるように口を閉ざした後、覚悟を決めたようにその言葉を口にした。

「その時は、戦場で相まみえる予定だった俺おれと好敵手と……君達の長おさ……『山やまの翁おきな』の三人がかりで、なんとか滅ぼす事ができたけどな」
「私も……そう伝え聞いている。同時に……お前がどれほど恐ろしい男だったかも」
　今にも跳びかかってきそうなアサシンの娘。
　セイバーも警けい戒かいを解かず、一触即発の空気かと思われたが──ランサーがそんな空気を読まずに口を開いた。
「さて、ところで同盟を組むにあたっての『もう一つの問題』なんだけどね」
「……忘れてた」
「実は、僕もこの街から排除したい『魔ま物もの』がいくつかいるんだ。友との約やく定じようを果たす為ためにね」
「……あんたが言う『魔物』ってのは、吸きゆう血けつ種しゆよりも厄やつ介かいそうな気がするな？」
「そんな事はないよ。今の所は……ただの黒い『呪のろい』と……ただの、赤黒い『泥』の塊なんだけどね……」
　珍しく顔から笑顔えがおを消し、憂うれいを帯びた表情で、自分がこの一日に感じた『気配けはい』について語るランサー。
「もしもその二つが『融ゆう合ごう』して聖せい杯はいに染みこんだら……」

「聖杯だけじゃない、この星そのものが少し危ない事になるかもしれない」

アメリカの失しつ踪そう届とどけは、年に数十万件を超える。
　年にそれほどの数の人間が消えているのかと問われれば、半分は真実で、半分は違うとも言えるだろう。
　数十万という数がセンセーショナルなニュースとして日に本ほんで報道される事もあるが、実際はその大半がその日のうち、または数日中に見つかっており、１年以上失踪が続く──つまりは本当に姿を消してしまった者の数は、実際はその一割未満。年に数万人前後だと言われている。
　数万人という時点で見過ごしてはならない数字だが、それを抜きに考えたとしても、聖せい杯はい戦せん争そうが起こる数年前から、その数値に異常があった。
　それは、ある意味では緩ゆるやかな変化であり──誰だれもその本質に気付く事はなかった。

　異常を引き起こした、張本人達を除いては。

×　　　×

『泥』と呼ばれる、歪いびつな魔ま力りよくの塊がある。

　フランチェスカが冬ふゆ木きから『大だい聖せい杯はいを構成する物の一部』を盗み出す際に、共に大聖杯から抽出されたものだ。
　第三次の記き憶おくを受け継いでいるファルデウスには、見覚えがある性質の『泥』。
　それまでの澄すみ切きった聖杯に、そんな意志を持った魔力の塊の

ようなものは混入していなかった。
　ファルデウスは、遠とお縁えんの記憶を辿たどり、その泥の正体を即座に理解する。
　同時に、すぐにその『泥』の隔かく離りを提案した。
　しかし、隔離や始末、あるいは浄化せよという命令が降りる事はなかった。
　上層部や協力者達は、その『泥』に興きよう味みを持ったのだ。
　聖杯をその力ごと汚染し、70年以上経たった現在でも、新たな聖杯を汚染する力を保ち続ける『人の悪性』。すなわち、第だい三さん次じ聖せい杯はい戦せん争そうにおいて、とある『復讐者』を構成していた、どこまでも純粋で、どこまでも澱よどんだ願ねがいそのものに。

　フランチェスカが適応性のある人間の臓腑の隙間で数年保管し続けたというその『泥』に最も興味を示したのは、スクラディオ・ファミリーのボス、ガルヴァロッソ・スクラディオだ。
　彼は言った。
　──「バズディロットなら、その毒沼を扱いきれる」と。
　ファルデウスは当然反対したが、よりにもよって所有者であるフランチェスカがその提案を『是』とした為ために、話がややこしい方向に転がり始めた。
　身に宿した者は皆狂気に囚とらわれ、泥に肉体すらも呑のみ込こまれて消滅していく。
　しかし、バズディロットは泥を身に宿しても、以前と何も変わらなかった。それどころか、自らの魔力を餌えさとして徐々にその泥の量を増やしつつあるという。
　スクラディオ・ファミリーは『己おのれの精神に支配魔法をかけ、正気を保ったまま泥を制御するバズディロットの魔ま術じゆつ師しとしての実力』と賞しよう賛さんしていたが、ファルデウスは知っている。

確たしかにバズディロットは、自らの魔術で泥を制御し、培養しているのだろうと。
泥に心を支配されぬように、並々ならぬ努力を続けているのだろうと。
そして、彼は理解していた。
一つだけ、スクラディオ・ファミリーの賞賛に間違いがある事を。
彼は正気を保ったまま泥を制御などしていないのだと。
バズディロットという名の男は、泥をその身に宿すよりもずっと前、あるいは最初から、人としてはとっくに狂っていたのだと。

×　×

スノーフィールド工業区域　地下

「……戻ったか」
食肉工場の地下を入口とする、広大な魔ま術じゅつ工こう房ぼうの一画。
気配けはいを感じたバズディロットが振り返ると、そこには自らのサーヴァントであるアルケイデスが立っていた。
アーチャーとアヴェンジャー、後天的に二重存在になったとでもいうべき英えい霊れいを前に、バズディロットは問い掛ける。
「どうだった、噂うわさの英えい雄ゆう王おうは」
「……強いな。こちらの挑発にも心を乱した様よう子すはなかった。時折激げつ昂こうはしていたが、表面的なものに過ぎぬだろう」
「フランチェスカの話では、慢心に満ちた激げき情じよう家かの王という話だったが……やはり奴やつの情報を鵜う呑のみにする事は危険だな」
彼らは知らない。
エルキドゥという英霊の存在により、英雄王がかつて無い程に上じよう機き嫌げんであり、通常召喚される時よりもだいぶ寛大な状態に

なっているという事を。
　もっとも、英雄王の性格がどうであれ、彼らにはそこまで重要な事ではなかったのだが。

　少しの間をおいて、今度はアルケイデスの方からマスターに問い掛ける。
「マスターよ、貴様の魔力の源はなんだ？　その『生いけ贄にえの泥』を維持するだけでも、通常の魔ま術じゆつ師しではままなるまい」
「俺おれの魔力の枯こ渇かつを心配しているのか？」
「私の宝ほう具ぐの数と性質は知っている筈はずだ」
「……」
　宝具を如何いかほど潤じゆん沢たくに使えるか、それはサーヴァント同士の戦いにおいて重要な勝敗の分かれ目となる事が多い。
　だが、魔力のパスを繫つないでいる現在でも、アルケイデスにはマスターの『底』を感じる事ができなかった。
　正せい確かくには、魔ま術じゆつ回かい路ろ全体の保有量は大まかに感じ取る事はできるが、あきらかにそれを上回る量の魔ま力りよくがパスから流れ込んでくるのである。
「簡かん単たんな話だ。『電池』を使っているに過ぎん」
　そう言いながら、バズディロットは懐ふところに手を伸ばした。
　すると、彼の懐から野球ボール大のものが現れる。
　一見すると何か良く解わからなかったが、アルケイデスはその正体に気付き小さく唸うなった。
　バズディロットの右手に握りこまれていたのは、透き通っていながらも複雑に光を反射する、不ふ思し議ぎな雰囲気を纏まとう結晶体。宝ほう石せき魔ま術じゆつ師し達が使う魔術鉱石にも似ているが、そうした鉱石と比べて数段階純度が高く感じられる。
　アルケイデスは、その特徴的な結晶に見覚えがあった。
　かつてのギリシアの魔女達が、大気に満ちるマナを物質として精錬

したもの──『魔ま力りよく結けつ晶しよう』と呼ばれる代しろ物ものと同じ物のように感じる。
　だとするならば、バズディロットの大量の魔力は、その魔力結晶から取り出しているという事になる。
　この結晶は魔力を蓄えた電池のようなものだが、魔術師やサーヴァントの体内魔力オドを底上げしたり急回復させるものではない。魔術を行使する際に、その魔力を外部から加えるという形で利用する事が殆ほとんどだ。
　しかしながら、バズディロットはその魔力を一度『泥』で汚染する事で体内へと取り込み、そのままパスを繫つなげたサーヴァントへと流し込むという裏技を使用している。
　通常なら脳のう髄ずいまでその歪ゆがんだ魔力に汚染され、発狂していてもおかしくない方法だが、バズディロットは『支配』の魔術を自分に重ねがけする事で正気を保ちながら、苦痛そのものと言える黒い魔力を操あやつり続つづけた。
　魔術師としての才はないが、アルゴー船せんの旅路などを通してそれなりの知ち識しきを有しているアルケイデス。
　彼にとって、バズディロットの手順はすぐに理解する事ができたのだが、二つだけ説明できない事があった。
　魔力結晶を生み出すのは、現在の魔術師達の技術では不可能なのではないかという点。
　そして、今手にしている程度の大きさの魔力結晶では、比較的すぐに魔力が枯こ渇かつしてしまうだろうという点だ。
　そんなサーヴァントの疑問に答えるかのように、バズディロットは無表情のまま席を立った。
「……魔力に関しては、気にする必要はない」

　そのまま地下工房の通路を進んでいくと、一際広大な空間に辿たどり着ついた。

アルケイデスが喚よび出だされた場所よりも遙はるかに広く、地上の工場がそのまま地下に降りてきたかのような空間である。
　そして、アルケイデスは見た。
　奇妙な機き械かいやそれに連なる円柱形の水すい槽そうが無数に建ち並び、その区画の中央に、召喚陣をそのまま現代の機械技術で組み上げたような雰囲気の設備がある事に。
　更にはその部へ屋やの一角に、城の宝ほう物もつ庫こかと見み紛まがう程の輝かがやきを見せる小山があるという事も。
　透明な結晶の塊が、まるで宝石の山のように部屋の中に積つみ上あがっている。
「あれは、ほんの一部に過ぎん」
　すると、バズディロットの手下達が何かの作業を始め──水槽の中に浮かんでいた人ひと型がたの塊が泡となって消えて行き、代わりに中央の装置の上に、野球ボール大の魔ま力りよく結けつ晶しようが出現した。
「……贄にえか」
　全すべてを理解したアルケイデスの言葉に、バズディロットは淡々と語る。
「アトラム・ガリアスタという男が開発したシステムを、スクラディオ・ファミリーが奪い、改良したものだ。アトラムという男はこういうものの開発に関しては天才だったが、魔ま術じゆつ師しとしての技量は低かったからな。効率を良くする前に、冬ふゆ木きの闘とう争そうであっさりと死んだらしい」
「なるほど、貴様が私に流し込んだのは、人の命を贄とした魔力か」
「スクラディオ・ファミリーは敵対する相手に事かかないんでな。贄が許せぬというなら、俺おれをこの場で縊くびり殺ころすか？」
　死神というよりも、死そのものを想起させる目で尋ねるバズディロットに対し、アルケイデスはあっさりと首を振った。
「オリンポスの暴ぼう君くんどもへの復ふく讐しゆうの前には、些さ末まつな事に過ぎん。たとえ贄に捧ささげられるのが、我が命であっ

たとしてもだ」
　そして、全身から赤黒い魔力を滲にじませながら、神々への怨えん嗟さの言葉を口にする。

「奴やつらは魂を贄にすらせず……ただ嫉しつ妬とのみで、我が子らの命を炉ろにくべたのだからな」

×　　　　　　　　　　　×

警けい察さつ署しよ

『なあ、兄弟。俺としちゃ、セイバーよりもあのホテルを襲しゆう撃げきしたアーチャーの方が気になるんだがなあ』
「……流石さすがに耳が早いな」
『アヴェンジャーだっけか？　随分と厄やつ介かいそうなもんの欠片かけらを持ち込んだみてえだなぁ、フランチェスカの嬢じようちゃん』
「とはいえ、冬ふゆ木きの第三次でそのサーヴァント自体は早々に敗退したと聞く。人間の憎しみや憤ふん怒ぬをいくら積つみ上あげようと、所しよ詮せんは高位の英えい霊れい達には勝てぬものなのか？」
　自分達は妄執や怨おん讐しゆうのみで戦うわけではない。
　だが、怒りや怨讐といった負の感情に強い力がある事も否定しない。
　それがまったく通じないとなれば、今後の動き方を一考する必要があるだろう。
　署長がそう考えていると、デュマは笑いながら答えた。
『はッ！　そいつは復讐ってもんを舐なめすぎだぜ署長。極まった怨讐ってのはな、もうそれだけで一種の呪のろいなのさ。現代に残った魔ま術じゆつを用いぬ神秘の一つと言ってもいい。実際は神秘でもなんでもない、ただの人の感情だがな』

「呪いか」
『ああ、この呪いの厄やつ介かいな所は、復讐が正当であればあるほど、それを果たせば果たすほどに気持ち良くなっちまうって事だ。怨讐が呪いなら、カタルシスって奴やつは麻薬だぜ？　一度味わったら、中なか々なか抜け出せねえのさ。復讐者本人も、それを本だの戯ぎ曲きよくだのを通して遠くから眺める奴も、他人の復讐を本にして一ひと儲もうけする作家もな！　ハハッ！』
　デュマの言葉を聞き、署長は暫しばし考えた後、眉まゆを顰ひそめて問い掛ける。
「……まさかとは思うが、いるのか？　かの巌がん窟くつ王おうにモデルが」
『さてな。モデルの一人ひとりは俺の親父おやじかもしれねえが、エドモン・ダンテスが実在したのか、本当に見る奴の心が躍おどるような復讐を成し遂げたのか、最後には復讐を断ち切れたのか、そもそも宝は実在したのか？　全すべては神のみぞ知る、藪やぶの中までお立ち会いって奴だ。まあ、少なくとも俺があの小説で大儲けしたのは事実だがな！　ハハハハハ！』
「……仮にモデルになった男がいたとして、もしも今の君が会ったら、撃うち殺ころされても文句は言えんぞ？」
　署長の皮肉に対し、デュマは『かもな』と言いながら、それでも笑う。
『サーヴァントやってりゃいつか遭う事もあるかもしれねえがな。その時はその時だ。アンタのお陰で、アンタを陥おとしいれた悪党どもより遙はるかに儲けさせて貰もらったぜって言うさ！　ハハッ！』
「私が彼の立場なら、君を殴りつける機き会かいを待ち続けるだろうな。なんだったか、あの台詞せりふは……確たしか……」
　署長が考え始めた所で、デュマが慌てて叫び出した。
『おいやめろ⁉　作家の前で本人が書いた台詞を読み上げようとするんじゃねえ！　思わずもっといい台詞が思いついて改かい稿こうしたくなっちまうだろうが！　もうできねえのに！』

そして、一ひと頻しきり落ち着いた後、デュマは改めて復讐の呪いについて口にする。
『とにかく気を付けろよ、兄弟。逆さか恨うらみじゃねえ正当な復讐ってのは、他人から見ても快楽だ。その呪いは伝染するぜ？　その復讐が困こん難なんであればあるほど、その力を強くしてな』

『もしかしたら、あんたらが狙ねらってる金ピカの王様も、ぽっと出の平民の復ふく讐しゅうに喰くわれちまうかもしれないぜ？』

×　　　　　　　　　　　　　×

ホテル　クリスタル・ヒル　最上階

「ふむ、随分と張り切っているようだな。森の形が昼とまったく違うものとなっている」
　あちこちのガラスが割れた状態のスイートルーム。
　高所故の強風はティーネが魔ま術じゅつ結けつ界かいで防いでおり、更には複数の結界を張って外部からは偽の風景が見えるように調ちよう整せいを施していた。
　襲しゅう撃げきされたばかりではあるが、ギルガメッシュが『一度や二度矢を射かけられたぐらいで高みから降りる王などいるわけがあるまい』と言いだし、ティーネの配下の者達が工事業者などに暗示をかけつつなんとかこの場に戻って来た形となる。
　そして周囲の苦労を余所よそに、英雄は街の側そばの大森林を見るなり上じよう機き嫌げんとなった。
「どうやら我が友も良い肩かた慣ならしの相手を見つけたようだな！　これは楽しみだ！」
　腕を組みながら、楽しげに街を見下ろす英えい雄ゆう王おうだったが、これから始まる闘とう争そうに心を躍おどらせているのか、珍しくティーネに次のような事を告げた。

「ティーネよ。魔力を充分に練っておけ。有う象ぞう無む象ぞうの雑種相手にエアは抜かぬが、これからやる事にどれほどの魔力を消費するかは我オレ自身にも想像がつかん」
　若々しい英気に満ちた目をしながら言う英えい雄ゆう王おうに、ティーネは一いつ瞬しゆん驚おどろいたが、すぐに覚悟を決めて力強く頷うなずいた。
「存分に力をお奮ふるい下ください。たとえこの身と魂が朽くちようと──」
　言いかけた所で、ギルガメッシュがやや厳きびしい声でティーネの言葉を遮さえぎる。
「戯たわけた事を言うでないわ。王たる我オレに身命を捧ささげるのは自由だが、貴様のような未み熟じゆくな魂を捧げられた所で慰なぐさみにもならん」
「……」
「それに、貴様の身が早々に朽ちれば、我が友と存分に興きようじる事ができぬではないか。それとも、貴様に匹敵する魔力を持つ家臣を新たに探す労を、この我オレに強しいる気か？」
「そ、そのような事は……！」
　慌てて否定するティーネに、英雄王は苦笑を浮かべた。
「我が身に身命を捧げたくば、この戦いくさの終しゆう焉えん……我が友との約やく定じようの時までにそれに見合った魂になっている事だな。さすれば、我オレは座ざに一つの記き憶おくを持ち帰るであろう。此こ度たびの戦いくさには、忠臣に値する者がいたという記憶をな。ウルクの民たみになるも同義の褒ほう賞しようだと思うがいい」
「が、頑張ります！　あっ……」
　無む意い識しきの内に思わず声を張り上げてしまい、慌てて取とり繕つくろうティーネ。
「申し訳ありません、今はまだ、あの女騎兵に敵とすら認められぬ身なのに……」
　やや自じ虐ぎやく的てきに言うティーネを見て、ギルガメッシュは

首を傾かしげた。
「あの騎兵の女に侮あなどられた事を気にかけているのだとすれば、それは傲ごう慢まんというものだ」
　困惑するティーネの心中を察したのか、英えい雄ゆう王おうが不敵な笑えみを浮かべながら口を開く。
「貴様の覚悟がどうであれ、強者の前では幼子は幼子に過ぎぬという事よ。無む論ろん、我オレから見ても貴様は覚悟の有無がどうであれ単なる幼童に過ぎぬ」
「ですが、私は……」
「相手が誇り高き戦士であるならば、奴やつらは齢よわい格かつ好こうに拘かかわらず礼をもって相あい対たいもしよう。だがティーネよ、お前は覚悟はしているのかもしれんが、まだ誇り高き者とは言えぬな。明めい確かくな死を前にすれば、覚悟など誰だれにでもできる。だが、自尊心は老ろう齢れいに達しても持てぬ者は持てぬ」
「……」
　自分にもそのような誇りが持てるのだろうかと不安になるティーネの心などいざ知らず、英雄王はスイートルームのワインセラーから高級品を一本取りだし、上じよう機き嫌げんで栓を抜きながらいけしゃあしゃあと言葉を続けた。
「そういう意味で貴様は幸運よな。仮かり初そめとはいえこの我オレの臣下であるのだ。数日も過ごせば最高にして唯一の王に仕え、我オレの栄光をその目に焼き付ける事ができたと誇る事ができるであろうよ。もっとも、我オレは王であるが故誇り高き『戦士』の気持ちなど解わからんがな」
　ひたすらに我わが儘ままな事を言い放つ王に対し、呆あきれを通り越して『良く解らないけど、本当に世界を自分のものだと思っているようだ』と感動するティーネ。
　自分の感覚が徐々に麻ま痺ひしつつあるという事に気付かぬまま、彼女はふと気になっていた事を思い出し、英雄王に思い切って尋ねてみた。

「恐れながら王よ、その栄光の一端として、如何いかにして冬ふゆ木きの第だい四よ次じ聖せい杯はい戦せん争そうを勝ち上がったのか、お聞かせ願ねがえないでしょうか」
　すると英雄王は、ニヤリと笑いながらワイングラスをくゆらせる。
「おいおい、ティーネよ。それは我オレが相手でなければ成立せぬ問い掛けだぞ？　冬木とやらのシステムに則のつとるなら、以前に別の場で喚よばれた時の記き憶おくは残らぬのだからな」
「過去の事でも……なのですか」
　座ざには過去や未来の概念は無い。
　全すべての記憶を持ち込んでしまうと、例えば『今参加している聖杯戦争の結果を知っている』という矛む盾じゅんが生まれる為ために、通常は『座』が召喚される場と時間に合わせて記憶をアジャストするらしい。
「世界の矛盾を少しでも抑えようとする『座』の苦肉の策であろうが、遍あまねく未来を見通す目を持つ我オレの前では無む駄だな足掻あがきよ。異なる位相の未来から過去を類推するなど容易たやすき事だ」
　そう言うと英えい雄ゆう王おうは、自信満々に虚こ空くうを見つめ、位相のずれた己おのれの身を覗のぞこうとしたのだが――
「む？　……。……ざぶーん……これは違うな……。釣り……いや……」
　少し悩んだあと、不ふ思し議ぎそうに首を傾かしげる。
「妙だな、その冬ふゆ木きとやらに喚よばれた前後の位相に目を向けた途端とたん、昼に見た『泥』が目をかすめおる」
　だが、特に気にする事でもないのか、ワインを一口飲んだ後に肩を竦すくめた。
「まあ良い、聖せい杯はいとやらが本物ならば、そこに注そそがれた魔ま力りよくを持ってその『泥』を洗い流すとしよう。なれば、代わりに我オレが如何いかにしてウルクの城じよう壁へきを築いたか、その話をとくと聞かせてやろうではないか！」

その後ティーネは、ウルクという都市についての『聞かなければ良かった真実』を山ほど知る事になるのだが──それはまた、別の話である。

×　　　　　　　　　　×

夕刻　スノーフィールド中ちゆう央おう病びよう院いん

　スノーフィールド市の中ちゆう央おう区くに存在する、巨大な白塗りの建造物。
　一見すると美び術じゆつ館かんのような外がい観かんをしているが、そこは街の中でも最高の設備を整ととのえた大病院であり、外科から心しん療りよう内ない科かに至るまで、多くの患者達が治療を求めてその門を叩たたく希望の城……の筈はずだったのだが、現在は家族に付き添われて次々と訪れる患者の波で、受付がちょっとした混乱状態となっていた。

「だから、うちの旦だん那ながおかしいのよ！　仕事でラスベガスに向かったと思ったら急に戻って来て『もうずっとこの街から出ないぞ』なんて変な事言いだして！」
「なあ、おかしいんだ！　インディアンスプリングスに配達に行った同僚が仕事もしないで戻って来たから別の奴やつを向かわせたんだが、そいつもすぐに戻って来やがったんだ！」
　症例は共通していて、『街から出た者達が戻ってくる』というものであり、何か精神の病だと思った家族が連れて来ているのだが、同様の患者が大量に押し寄せている事から、病院側も何か特殊な事件でも起こっているのではないかと訝いぶかしみ、現在は緊きん急きゆう対たい策さく会かい議ぎを開いている所だった。

「あ、先生、どうされましたか？」
　そのような混乱から少し離はなれた、病院の奥にある区画。
　既に勤務時間を終えた老ろう齢れいの医者が歩いているのを見て、若い女性看かん護ご師しが声をかけた。
「いや、患者の病室に忘れ物をしてね」
「そうでしたか、正面出口の方はかなり混乱しているらしいですから、気を付けて下さいね」
「ああ、ありがとう」
　そして、看護師が去ったのを確かく認にんした後──次の瞬しゆん間かん、その老医師の姿は今しがたの看護師のものへと完全に変化していた。

（どうですか、ジャックさん）

　そんな女性看護師──に変身したバーサーカーの脳裏に、マスターであるフラットからの念ねん話わが届く。
（ええ、問題ないわ。この奥に入るパスカードを手にいれたから、安心して）
　看護師の首から掛けられているバーコード式のカードごと変化したバーサーカーはその後もすれ違う者に変化して様々な情報を入手しながら歩を進めていく。
　そして、最初の老医師に戻った状態で、バーサーカーは念話で尋ねた。
（こちらの方角で良いのかね。感覚共有で、本当に私の視界が見えているのか？）
（はい、なんとか。……ええと、その階段の上の方から、『霧きり』がもっと濃こくなっています）
（解わかった、慎重に向かうとしよう）
　念話をしながら力強く頷うなずくジャックに、フラットが思い出したように口を開く。

（変身を繰くりかえす時は気を付けて下さいね？　さっきみたいな風邪かぜ引きそうな格好してたら目立ってしょうがないと思いますから）
（う、うむ……。私はただ、普通の少女に変身しようとしただけなのだが、何故なぜあのようにヘソと太ふと股ももが丸出しな服装だったのか、てんで見当がつかないのだ……）

　病院に潜せん入にゅうするにあたり、最初はできるだけ怪しまれない格好で潜入しようと、ジャックはモーテルの中で様々な形態に変身し始めたのだが、10才前後の少女に変身した所、何故か露ろ出しゅつ度どが高い黒い水着のような服装になってしまったのである。
　結果として、フラットが慌てて「わー！　わー！　こんな所誰だれかに見られたら即通報で俺おれ逮捕で人生終了ですよ!?」と言って毛布を掛けてジャックをくるむという一幕があったのだが、結局その原因は不明という事で落ち着いた。

（まあ、珍しく君が焦る姿を見られたので良しとしよう）
（本当に勘弁してくださいよ、もう……）
　念ねん話わ越ごしに溜ため息いきを聞いた後、バーサーカーは気を引ひき締しめながら階段の上に目を向けた。
　──やはり、私には何も見えん。
　──だが、我がマスターがそう言うのであれば、そうなのだろうな。

　バーサーカーが現在病院に潜せん入にゅうしているのは、街を覆おおう『霧きり』の大本を探る為ためだ。
　モーテル内でフラットが唐突に『街を魔ま力りよくの霧のようなものが覆おおっている』と言い出したのだが、バーサーカーが魔ま術じゅつ師しに変じて見るも、特に異常は感じられない。
　しかし、フラットにはその『異質な魔力の流れ』が見えているようで、いつになく真剣に『これ、普通のマナとかじゃないですよ。なん

て言えばいいんだろう……霧きり雨さめの粒一つ一つが独立した生き物みたいな……凄すごく小さな蝗いなごの群が街全体を覆ってるっていうか……』と悩んでいた。
　―「今はまだ魔力を計測する道具にも反応が無いレベルですけど、もう二段階ぐらい『霧』が濃こくなったら、感覚の鋭するどい魔術師の人達なら気付くと思います」
　―「この時点でも、凄く勘の鋭い英えい霊れいとか、それこそ人間とは感覚の受け取りかたが違う……それこそ吸きゅう血けつ種しゅの人とかなら気付くでしょうけど」
　その後、使つかい魔まを飛ばし、フラットが視覚共有などをして観かん察さつした結果、スノーフィールド中ちゅう央おう病びよう院いんあたりがほんの僅わずかに濃い霧に包まれていると解わかった。
　ジャックが霊れい体たい化かして中に忍び込むという案もあったのだが、霊体化中は敵の魔ま力りよく攻こう撃げきに対して完全に無防備になる為、何かしら罠わななどが仕掛けてあった場合は致命的なダメージを負う事になりかねない。
　そこでジャックは、自らの特性を利用し、病院の関係者に変身する事で実体化したまま潜入するという作戦を取る事にしたのである。

（イザとなればすぐ逃げて下さいね。……イザという時は……本当にイザという時は令れい呪じゅで強制的にこっちに呼び戻しますから！）
　何か強い決意を込めたような言葉を聞き、バーサーカーが問い掛ける。
（……マスターよ。今、『こんなにかっこいい令呪が消えるの嫌いやだから、なるべくなら自力で逃げて欲しいなあ』と思っていただろう）
（はい、思いました。ゴメンなさい！）
（素直なのはいい事だが寧むしろ今のは誤ご魔ま化かしても良い所だぞ、まったく……）

呆あきれながら歩を進める彼の目に、『特とく別べつ隔かく離り病びよう棟とう』の文字が映る。
どうやら特殊な伝染病患者を隔離する為の施設のようで、この先に出入りする為には除菌室を通る必要があるようだ。
──……どういう事だ？
──やはり、医者の誰だれかがマスターで、サーヴァントをここに隔かく離りしているという事か？
そんな事を考えていると、除菌室の中から誰かが出てくる気配けはいを感じ、ジャックはこの病棟に出入りしている先刻の女性看かん護ご師しの姿へと変化した。
すると次の瞬しゆん間かん、一人ひとりの女医が中から出てくる。
「あら、もう上がったんじゃなかったの？」
「すいません、ちょっと忘れ物しちゃって……」
「そう……。心しん療りよう内ない科かの方、まだ混んでるのかしら。砂漠のパイプラインの爆ばく発はつとか警けい察さつ署しよのテロとか、昼間の竜巻とか……色々な事が立て続けに起こってショックを受けた人が多いんだと思うけど……」
なんとか論ろん理り的てきに考えようとしているらしき女医は、自じ嘲ちよう気ぎ味みに首を振って言葉を続けた。
「私も妹があの警察署で働いてるから、今朝けさ連絡があるまで気が気じゃ無かったわ……。でも、悪い事ばかりじゃなかったわ。今日きようは椿つばきちゃんの体たい調ちようがとても安定してるの。このまま安定すれば、そのうち意い識しきが戻るかもしれない」
「椿ちゃんが……本当ですか？　それは良かったです！」
記き憶おくまでは一瞬でコピーできない為ため、適当に話を合わせるバーサーカー。
「ええ、手に変な刺青を見つけた時は誰かの悪質なイタズラかと思ったけど……。もしかしたら、伝説にある土と地ち守もりの一族が、何かおまじないをしてくれたのかもね」
「そうですか……」

「ああ、ごめんなさい。私ったら医者なのに変なこと言っちゃって……」
　誤ご魔ま化かすように笑いながら去って行く女医。
　彼女が階段を降りていくのを見送った後、バーサーカーは除菌室の中に足を踏み入れた。
　そして――

（……聞こえていたかしら、マスター）
　外見通り、女性の声で語りかけるバーサーカーの声に、フラットの念ねん話わが返ってくる。
（はい……それで、俺おれも今、見えてます）
（確かく定ていね……この奥に多た分ぶん、『ツバキ』っていうマスターとサーヴァントがいるんだと思う）
（ええ、でも……これ、一いつ旦たん戻った方がいいと思いますよ？　これ、ゲームだったら絶対『セーブしますか？』って尋ねられるポイントですよ）
（……同感ね。悪いけど、なんの準備もなしにこの先に進む気はしないわ）
　フラットだけではなく、一般人に変身して英えい霊れいとしての基き礎そ能力がだいぶ低くなっているバーサーカーにも、ハッキリとそれは感じられた。
　おどろおどろしく濃のう密みつな『気配』が、除菌室から病室に入る為の入口に渦巻いている。
（除菌室を通り抜けて廊下にまで広がってたのがただの黒い魔ま力りよくの『霧きり』だとすれば……今、俺おれの目に見えてる部へ屋やの入口の部分は、巨大な滝の一部って感じですよ）
　そこまでハッキリとは見えないバーサーカーだが、正体不明ながら『殺人鬼』として顕けん現げんしている己おのれの感覚が、一斉に警けい報ほうを告げている。
　病室の中には、倫ロン敦ドンの霧きりの奥で自分が纏まとっていた

であろう空気が満ちていると。
　この先にいるのは、途轍とてつも無なく濃のう密みつな『死』そのものであると。
（宝ほう具ぐを使えばなんとかなるかもしれないけれど……。確かく実じつとは言えないわね。いっそ、爆ばく弾だんで病院ごと破は壊かいした方が……）
（だ、駄だ目めですよ、そんな事しちゃ！　そもそも、そのマスターさんが敵か味方かも解わからないんですから！）
　──聖せい杯はい戦せん争そうで『敵か味方か解らない』と言い出すあたり、本当に彼は魔ま術じゆつ師しとして大事な物が欠落しているのかもしれんな。
　──……いや、『魔術師として必要な欠落がない』とでも言うべきか。
　──まあ、そんな気質だからこそ、あの素す晴ばらしき『師』と巡り会えたのかもしれないが。
　そして、バーサーカーは溜ため息いきを吐つきながら踵きびすを返した。
（解ってるわよ）
　部屋の入口横のネームプレートに書かれていた、『ＴＵＢＡＫＩ ＫＵＲＵＯＫＡ』という文字だけをハッキリと記き憶おくして。

（それをやってしまったら……私はもう『殺人鬼』じゃなく、別の『何か』だろうからね）

×　×

繰くる丘おか椿つばきの病室内

「今……外に誰だれか……いや、『何か』来てたみたいだね」
　幼い少年の姿に変じたジェスター・カルトゥーレは、目の前に横た

わる少女に語りかけるかのように呟つぶやいた。
「それにしても、人を蝕むしばむ病びよう魔まの呪のろいの大本を辿たどってみたら、まさかこんな死にかけの女の子がマスターだなんてね」
　一体どうやってこの病室内まで忍び込んだのか、吸きゆう血けつ種しゆとしての顔と力を隠した少年は、繰丘椿の手に宿った令れい呪じゆを見つめながら独りごちる。
「うん……まだだね。もう少しかな……この子に憑ついたサーヴァントの呪のろいが熟じゆくすまで……」
　何やら不ふ穏おんな事を呟きながら、ジェスターは恍こう惚こつとした笑顔えがおで呟いた。
「ああ、僕の大好きなアサシンのお姉ねえちゃんがこの子の事を知ったらどうするかな？　この子が生きてるだけで、なにもしてない街の人達が死ぬかもしれないって解わかったら……ハハッ」

「上手うまくこの子を使えば……アサシンのお姉ねえちゃんが泣く顔とか見られるかもね！」

×　　×

スノーフィールド中ちゆう央おう教きよう会かい

　──やれやれ、なんという失態だ。あの外げ道どうを取り逃がすとは。
　中央教会の居住区画の一室。
　神父やシスター達の生活空間の一つを間借りしている『聖せい杯はい戦せん争そうの監かん督とく役やく』ことハンザ・セルバンテスは、ワイングラスに盛られたハバネロとジョロキア──二種類の激げき辛から唐とう辛がら子しに手を伸ばし、主しゆへの感かん謝しやを捧ささげた後にそれをつまみ始めた。

配下である『カルテット』達は、現在もあの吸きゆう血けつ種しゆの行方ゆくえを追っている。
ハンザは発見次第即座に出しゆつ撃げきする準備を整ととのえながら、監督役として説明を求めるマスターの来らい訪ほうを待っていたのだが──初日の夜を迎えた現在、発見の報告もなければマスターが訪れる兆きざしもない。
もっとも、後者に関しては元々『聖せい堂どう教きよう会かいを排除した聖杯戦争』を謳うたっていた為ために、素直に現れる者は最後までいるかどうかと言った所だろう。
──敗退者が保ほ護ごを求めてくるケースはあると踏んでいるが、まだ誰だれも敗退していないか、それともマスターごと殺されたか……。
──警けい察さつの連中が大勢で保護を求めてきたら、あの署長をなんと言ってからかうべきか。
そんな冗じよう談だんを考えながら肩を竦すくめていると、テレビのドキュメンタリー番組が『増え続ける国内の失しつ踪そう者しや』というテーマの映像資料を流していた。

『……ここ数年、１年以上にわたる継続失踪者の数は少しずつ増え続ける傾向にあり、今年ことしもグラフは緩ゆるやかな上り坂に……』

テレビで淡々と語られていく失踪者数の現状を前に、ハンザは僅わずかに眉まゆ根ねを寄せる。
──また、増えたか。
──その内何人が、吸血種をはじめとする異い形ぎようの手に掛かっているのやら……。
ハンザは無表情のまま更に一つの唐辛子に手を伸ばし、様々な聖せい別べつ済ずみの道具が仕込まれた奥歯で力強く噛かみ砕くだいた。

彼は知らない。

ここ数年で増えた分の失しつ踪そう者しやに関しては、吸きゆう血けつ種しゆなどは特に絡んでいないという事を。
　そして、家出や他国への亡命といった類たぐいのものでもなく――

　純然たる悪意に満ちた、とある魔ま術じゆつ師しの手によるものであるという事も。

×　　　　　　×

工業地区　地下工房

　部へ屋やの隅に積つみ上あがっている魔ま力りよく結けつ晶しようの山。
　その一つ一つに籠こめられた高密度の魔力を感じ取ったアルケイデスは、無表情のまま告げた。
「……あの量ならば、半日は全力を出し続けて戦っても問題は無いだろう」
「あれで半日か？」
「不服か？　確たしかにあの金こん色じきの王相手では、半日では決着がつかぬやもしれぬが……」
「いや？　充分だ」
　そう言うと、バズディロットは机上に一枚の地図を広げて見せる。
　数段階の手順を踏んで隠いん蔽ぺいを解くと、ただの街の工場地区周辺の地図だったその図面上に、赤く光る点がいくつか浮かび上がった。
「あの程度で半日も保もつのなら……」
　赤く光る点が示していたのは、工業用の重油タンクや貯ちよ水すい槽そう、巨大な円柱の上に半球が載のった形状の巨大ガスタンクなどである。
「今回用意した分を全すべて合わせれば、数ヶ月は全力で戦い続けら

れるだろう」
　その言葉を聞き、アルケイデスは理解する。
　地図に記されている工業用の貯蔵タンクの数々は、表向きは全て偽装であり──内部には、ここにあるものと同じ魔力結晶の『保管庫』があるのだろうと。
「……それ程の量を生み出すとは……貴様、これまでに何人をこの絡繰仕掛けの贄にえとした？」
　数えきれぬ程の人間であろう事は理解しており、皮肉のつもりの一言だった。
　しかし、バズディロットは眉まゆ一ひとつ動かさぬまま口を開く。

「なに、たったの二万四千九百七十六人だ」

「……」
「驚おどろく程の数字か？　南なん米べいの麻薬カルテルの連中がここ数年で殺した数の半分程度だぞ？」
「そうではない。貴様がその人数を脳のう髄ずいにいちいち刻んでいた事が意外だっただけだ」
「俺おれがそんなに、人の命に対して無責任だと思うか？」
　本気とも悪あく趣しゅ味みなブラックジョークとも受け取れる言葉だが、アルケイデスをもってしても、殺さつ戮りく機き械かいのようなマスターの目からその本心を窺うかがう事はできなかった。
「それだけの人間を贄にえとしながら、よくも秘ひ匿とくしきれたものよ」
「当然だ。俺一人ひとりで一日に国内外から数十人を攫さらえるわけもない。全すべては我が主あるじ、ガルヴァロッソ・スクラディオの人脈あってこそだ」
　バズディロットは小さく息を吐き、淡々と淡々と言葉を紡ぎ続ける。
「スクラディオ家けが巨大になればなるほど敵は増える。どうせ敵を

消すなら、その存在は有効活用するべきだろう」
　そこまで言った後、バズディロットは薄うすく目を細め、自戒とも受け取れる言葉を吐き出した。

「もっとも……今日きようの三十六人は、先に殺したせいで残ざん滓しか絞り取れなかったがな」

×　　　　　　　　　　×

コールズマン特殊矯きよう正せいセンター　ファルデウスの工房内

　人形に囲まれた部へ屋やの中で、ファルデウスは考える。
　──バズディロットは、危険だ。
　──いや、違う。正せい確かくには、スクラディオ・ファミリーだ。
　──今回の件でバズディロットが勝てば、もはやスクラディオの勢いは止められない。
　──『泥』と『結晶』の組み合わせが、スクラディオ家の他ほかの魔ま術じゆつ師しにも伝でん播ぱすれば、奴やつらは今まで以上に力を付ける。そうなれば時計とけい塔とうや聖せい堂どう教きよう会かいへの牽けん制せいにはなるだろうが……もはや政府我々にも、コントロールする事は不可能となるだろう。
　様々な懸け念ねんを抱いた上で、ファルデウスは決意する。
　──バズディロットには、今回の聖せい杯はい戦せん争そうで消えて貰もらうとしよう。
　──だが、それだけでは駄だ目めだ。
「ここには誰だれもいません。直接話をしたいのですが、宜よろしいですか。アサシン」
　彼がそう呟つぶやいた瞬しゆん間かん、部屋の中の明かりが全て消え、暗くら闇やみが周囲を支配した。
　普段ふだんの暗闇とは質の違う、周囲の影かげそのものが生きて蠢

うごめいているかのような圧力を感じ、ファルデウスはゾクリとその背を震ふるわせる。
　暗視の魔ま術じゆつを行使するよりも先に、背中から声が掛かった。
「……口にするがいい、汝なんじを苛さいなむ厄やく災さいを」
　もって回った言い方をするアサシンに対し、ファルデウスは冷や汗の滲にじむ手を握りしめながら口を開いた。
「この街から少し離はなれていただく事になりますが……一人ひとり、事故か自然死に見せかけて始末して頂きたい人がいます。常に何人もの魔ま術じゆつ師しに守られ、我々の持つ通常の手段では暗殺できない男を。彼の名前は……」
　相手の名を口にしかけた所で、『暗くら闇やみ』の圧力が一段階増した。
「踏み出せば、もう戻れぬぞ」
「……」
「人の命脈を止めるに値する程の信念が、汝なんじにはあるのか？」
　最後の確かく認にんをするかのように、サーヴァントはマスターに問い掛ける。
「……信念が偽りと成り下がった時は、呪のろいは悉ことごとく汝の身に返り、その全すべてを喰くらい尽つくすと知れ。その覚悟があるならば、厄やく災さいの名を……口にせよ」
　魔ま術じゆつ回かい路ろ、刻印、令れい呪じゆ。そうした魔術的な要素のみならず、己おのれの心しん臓ぞうや血管すら同時に凍り付くかのような錯さつ覚かくを覚えながら、それでもファルデウスは、その名を告げた。
「ガルヴァロッソ・スクラディオ」
「……」
「貴方あなたが最初に殺すのは、英えい霊れいでも魔術師でもありません。魔術の加か護ごさえなければ簡かん単たんに殺せる……ただの人間ですよ」

×　　　　　　　　　　×

同時刻　時計とけい塔とう

　時計塔にある執務室の一つで、ロード・エルメロイII世は一人悩んでいた。
　本来ならば、すぐにでもスノーフィールドに足を運び、最低でも弟子を一人連れ戻さねばと考えていたのだが──思わぬ横やりが入り、その足を止められる事となる。
　法ほう政せい科かの化あだし野のから直接手渡された『要よう請せい書しよ』には、『過去にケイネス・エルメロイ・アーチボルトという時計塔の要人を失った経けい緯いを鑑かんがみ、特級の危険区域に指定されたスノーフィールドにロードが出向く事は許されない』という内容の、要請とは名ばかりの明確な命令が記されていた。
　様々な礼装の準備を進めていた所で突然足止めを喰らった形となるが、半分は予想していた事なので大きな怒りはわき上がらない。
「だが、法政科の対応が早すぎる」
　要請を無視して動く事を懸け念ねんしたのか、法政科はあらゆるコネを以もつてエルメロイII世が現地に向かえなくなるように仕向けていた。
　現在も外に数名の見張りが居る事は確かく認にん済ずみだが、力ちから尽ずくで圧おし通とおる技量は無い。
　──最悪に近いケースとして、スノーフィールドの黒幕が時計とけい塔とうの法ほう政せい科かと繫つながっているという可能性も考えるべきか……。
　──いや、それならば、法政科は寧むしろ私を予あらかじめ現地に押し込めるだろう。
　──奴やつらの目的である、聖せい杯はい戦せん争そうの解析の為ためにな。

そんな自問自答を繰くり返かえしていると、扉をノックする音が響ひびき渡わたった。

扉を開くと、人形師のランガルが、昨日きのう会った弟子と共に入ってくる。

「失礼する。体たい調ちようはもう大丈夫ですかな、ロードよ」

「ああ、あの時は見苦しい所を見せてすまない。しかし、随分急いで来たようだが　また何か新しい情報が？」

「ええ、実は……ここにいる私の弟子が発見したらしいのですが……もう時計塔の若い者達の間では噂うわさになり始めていますし、明日あしたには更に広まっている事でしょうが、貴方あなたには一番に伝えておかねばと思いましてな」

「？」

首を傾かしげるエルメロイII世に、弟子の少年がおずおずとノートパソコンを差し出した。

画面を開くと、そこには数年前に大手検索サイトの運営会社に買収された、世界一有名と言っても過言では無い動画共有サイトのページが映し出されている。

「ええと、昨日きのうの事で何か情報が無いか、仲間内で現地の情報サイトとか、色々検索して調しらべてたんです。そしたら、スノーフィールドで活動している『snow smoke』ってロックバンドがあるんですけど、その人達が動画を投とう稿こうしてたんです」

□□？

──もしや、あの警けい察さつに逮捕された映像を別視点からビデオに撮とった者が……？

エルメロイII世は眉まゆを顰ひそめながらその画面を見て、次の瞬しゆん間かん、喉のどの奥で小さく呻うめく。

「なッ……!?」

そこに映っていたのは、ギターを巧たくみに鳴らしてバンドメンバーと即そつ興きようのセッションを行っている、例の逮捕された筈はずの英えい霊れいの姿だった。

「え、英霊が……動画配信とは……」
「まあ、投稿したのはバンドの人達なんで、この英霊が配信したわけじゃないですけど……」
「それ以前に、この英霊は一体何をしているんだ？　どういう意図でこのような真似まねを……」
『妙にギターが上手うまいな、この英霊』と思いながらも、自分なりに彼の行動を分析しようとするエルメロイII世。
　だが、その分析はランガルの弟子が画面を指差す事によって中断させられた。
「あ！　ほら！　ここですよここ！　画面の隅！」
「む……？」
　エルメロイII世が目を向けると、そこには、染めたような金髪に眼鏡めがねが特徴的な、一人ひとりの少女の姿が映し出されている。
　そして、エルメロイII世は一際強く眉まゆを顰ひそめながら言葉を漏らした。

「……沙さ条じよう？」

×　×

森の中

　森を移動しながら、アヤカはセイバーに声を掛ける。
「ねえ」
「ん？　どうした？」
「……さっきは、ごめん」
「？　何か謝あやまられるような事があったか？」
　本気で首を傾かしげるセイバーに、アヤカは目を伏せながら言った。
「……怒ど鳴なったり、髪の毛を引っ張ったり……私の我わが儘まま

を押しつけたりした事」
「本当にアヤカは小さな事を気にするなあ。だが、君の気がすむなら、その謝しや罪ざいは受け入れよう。そして俺おれも謝罪しよう。君の気持ちを考えず、勝手に君をダシにして同盟などを持ちかけた事を」
　素直に謝ってくる『王』を前に、アヤカは目を逸そらしながら答える。

「それこそ、謝る事じゃないよ」

×　　　　　　　　　　×

時計とけい塔とう

「おお、やはりそうでしたか」
「？」
　ランガルの言葉に首を向けると、案山子かかしのような状態になっている人形師がぎこちなく頷うなずく。
「ほら、昨日きのうも言いましたが、現地入りした協きよう会かいの人が、ロードのお弟子さんを見たと……」
「……？」
　再び、話に齟そ齬ごを感じる。
　もしやと思い、エルメロイII世がランガルに尋ねた。
「見かけた弟子というのは……もしやフラットではなく？」
「ああ、フラット・エスカルドスの話は我々も後から知りましたが、天才とはいえ、ロードはあのピーキーな彼を先せん遣けん隊たいとして派遣したりはしないでしょう？　我々が言っていたのは、そこに映っている沙さ条じようの事ですが……」
「いや……待ってくれ」
『沙条綾あや香か』。

確たしかに、その名の魔ま術じゆつ師しをエルメロイII世は知っている。

何年か前──冬ふゆ木きで第だい五ご次じ聖せい杯はい戦せん争そうが起こる少し前に、まだ幼さの残る学生だった彼女が、一ヶ月ほど教室に参加していた事がある。

普通の講こう師しならばそのまま互いの顔も忘れるであろう程度の関係だが、エルメロイII世の几き帳ちよう面めんな性格と、黒魔術ウイツチクラフトについていくつかアドバイスをした事や、フラットがヴォイニッチ手しゆ稿こうを解読して大掛かりなトラブルを起こした際に巻き込まれていた事、彼女の姉の事などがあり、ちょくちょくと連絡を取ったりはしていたのだが──

「すまない、少し考えたい事があるから、また出直してくれないか。情報、本当に感かん謝しやする」

不ふ思し議ぎそうに顔を見合わせる二人ふたりに謝礼を述べ、彼らが退出した後に携帯電話を取りだした。

そして、手て慣なれた調ちよう子しで『これを見たらすぐに電話が欲しい。至急、聞きたい事がある』とメールを打ち込み、即座に送信する。

送信先の宛あて名なは──『綾香アヤカ・沙条サジヨー』。

×　　　　×

スノーフィールド某所

「ん、なんだ？　この不可思議な音は」

セイバーとアヤカが『次の目的地』に向かう道中。

突然響ひびいたメールの通知音に、セイバーが思わず周囲を見回した。

「私の携帯だよ。メールが来たみたい」

携帯を開くアヤカは、通知の内容を見て目を細める。
「ほう、それが現代の文ふみか。恋文なら、俺おれは目を逸そらしているから存分に見るといい」
「そんなんじゃないよ」
　彼女の携帯ディスプレイに映し出されていた通知には、日に本ほん語ごで『フィリア』とだけ書かれていた。
　フィリア。
　自分をこの聖せい杯はい戦せん争そうに巻き込んだ『白い女』の本名だ。
　また何か無む理り難なん題だいを言ってくるのではないかと思っていたのだが、本文に書かれていた内容を見て、アヤカは首を傾かしげる事しかできなかった。
「……？」
　その本文に書かれていたのは、『城』で会ってから変わらぬ調ちよう子しだった彼女の言葉とはまるで違う、別人のような雰囲気で書かれた一文だったのだから。

『ああ、貴女あなたも大変だったわね！　もう自由だから、好きにしていいわよ？』

「今さら……どういう事？」
「どうした？」
「なんでもない。ああ、あと、言い忘れてた事があったよ」
　とりあえず後で考えようと、携帯をしまいながらアヤカが口を開いた。
「その……。もう、あんたのやる事を余計なお世話とか言わないよ。あんた、何を言ったって勝手にやっちゃうんだろうから」
　諦あきらめたように言った後、アヤカは自分自身にも言い聞かせるように続けて言葉を絞り出す。
「だけど……せめて、危ない事をするなら予あらかじめ言ってくれる

と助かるよ。止めても無む駄だだろうけど、やっぱり一応止めたいし……」

「……勝手に死なれて、御お礼れいを言えなくなるのは困るからさ」

×　　　　　　　　　　×

時計とけい塔とう

「どうもありがとう。また何か解わかったら連絡する」
　そう言って電話を切ったエルメロイII世は、眉み間けんに一際深く皺しわを寄せて呟つぶやいた。
「……どうなっている？」
　改めて、メールの返事として掛かってきた電話の履り歴れきを見る。
　ルーマニアから国際電話でかけられた──沙条綾香の電話番号。
　彼女が所用でルーマニアに渡ったという話は、エルメロイII世もフラットから聞いていた。
「今、電話で私が会話をしたのは、間違い無くルーマニアにいる沙条綾香本人だった」
　エルメロイII世は、こめかみに指を当てながら、先刻の映像に映っていた、金髪である事を除いて綾あや香かとうり二つである女を思い出しながら、呻うめくように声をあげる。

「ならば、スノーフィールドにいたあの女は……いったい、どこの誰なんだ？」

闇やみの中

　時は、セイバーが逮捕され、テレビカメラの前で演説した直後にまで遡さかのぼる。
「ああ、面おも白しろかったぁ！」
　英えい霊れいが逮捕された瞬しゅん間かんを思い返して噴ふき出だすという事を何度か繰くり返かえした後、フランチェスカは笑い過ぎて溢あふれてきた涙を拭ぬぐいながらベッドの真ん中まで転がった。
　そして、一度その場で正座してから足を崩し片手を上げる。
「それじゃあ私も、そろそろ黒幕の一人ひとりとしてがんばらないとね！」
　彼女が指をパチリと鳴らすと、周囲の蠟ろう燭そくに火が灯ともり、ほんのりとした明かりが部へ屋やの中を照らし出した。
　豪華なベッドの前に現れたのは、他ほかのマスター達が英霊召喚に使用したものと同じ魔ま法ほう陣じん。
　ただ一つ、正式なものと違うのは──
　本来祭さい壇だんがあるべき場所に、その天てん蓋がい付きベッドが置かれていたという事だ。
　そして、いつの間にか手にしていたクッキーでお手玉をしながらリズミカルに歌い出す。

「♪　銀とー鉄をー　ひっとかけらー♪
　　　　　　　　　　♪　ぐっつぐっつ煮るよー大番頭ー♪
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　♪　アーテー様のー素敵すてきなレーシピー♪」

それは、英えい霊れい召喚の詠えい唱しようとは程遠いものだった。
　聖せい杯はい戦せん争そうそのものを小こ馬ば鹿かにしたような、聞く者が聞けば激げき怒どするか、『喚よべる筈はずがない』と鼻で笑うような代しろ物ものである。

「♪　閉じよーみーたせー　閉じよーみーたせー　閉じみた　閉じみた　閉じよーみーたせーー♪
♪　閉じてみちて　閉じてみちて　開いてこぼれて　開く堕ちるー♪
♪　閉じた傷口　合ーわせーて　いーつつー♪」

　彼女の口からリズミカルに漏れ出すいいかげんな詠唱は、皮肉にも、過去の『本物の』聖杯戦争において、とある殺人鬼が彼女の『親友』を喚び出す為ために使ったものと良く似ていた。
　まだサーヴァントの枠にも空きはあり、聖杯が無む理り矢や理り英霊の顕けん現げんを求めるような状況でもない。普通に考えれば、確たしかにこのような呪じゆ文もんで喚べる筈などないのだが──
　呪文の途中だと言うのに、早くも魔ま法ほう陣じんが光り始める。

「♪　私のかーらだーは　あなたの下にー　私の　こーころーは……
ははッ！　アハハッ！　♪　時間が来たから以下省略……ッと♪」

　銀ぎん狼ろうのように強い意志が籠こめられているわけでも、フラット・エスカルドスのように天才的な魔ま術じゆつ介かい入にゆう能力で魔力を繋つなげたわけでもない。

それでも、召喚は成り立った。
理由は、一つ。
英えい雄ゆうを喚び出す為の『触媒』の親和性が、異常なまでに高かったのだ。
触媒とは即すなわち──
祭壇であるベッドに鎮ちん座ざする、『フランチェスカの存在そのもの』である。

魔法陣からの輝かがやきが収まると──そこには、一人ひとりの少年が立っていた。
年の頃ころはフランチェスカと同じぐらいであろうか。艶つややかな髪を綺き麗れいに切りそろえており、美少年と言って良い程の顔立ちだが、目はどこか病んだ空気を携えている。
すると、次の瞬しゅん間かん──
魔ま法ほう陣じんのあった薄うす暗ぐらい空間が、一瞬にして見渡す限りの花畑へと変化した。
その花畑の中心で、英えい霊れいの少年はフランチェスカの顔を見ぬまま、恭うやうやしく、そして異常に大おお仰ぎように一礼する。
そして、両腕を大きく開いて高らかに叫んだ。
「ハハッ！　僕を喚よぶなんて、此こ度たびのマスターは随分と変わり者みたいだね！　いいよ！　僕に何を期待しているのか知らないけれど、後悔はさせないよ！　君にたっぷりと──」
「たっぷりと悦楽の夢を見せて昇天させた後、熱あつく蕩とろける悪夢で君が地じ獄ごくに堕おちるまで煮詰めてあげよう！　……でしょ？」
ベッドの中央に座ったままそう声を張りあげ、ニヤリと笑うフランチェスカ。
それに対し、自分の言う筈はずだった台詞せりふをそっくりそのまま言われた英霊は、小首を傾かしげながら疑問の声を漏らす。
「ん？　おやおや？　あれれ？」

「それを言い終わったら、この花畑の花を全部、人間の子供の腕に変えるんだよね！」
「んん？　んんん？　もしかして君、前にも僕のこと喚んだ事があるとか？　僕を喚んで生きてるのにもビックリだけど、二回も喚ぶなんて脳のう味み噌そに虫が湧わいてるレベルの物好……」
　言いかけた所で、少年は気付く。
　目の前にいる魔ま術じゆつ師しの少女が、一体何者であるかという事に。
「え？　うそ？　本当に？」
「本当だよ？　君の『生前の記き憶おく』って、どこで終わってる？」
「そりゃ、『最初に処刑された時』までだけど……。そんな事より君さ、一体何やってるの？」
「聖せい杯はい戦せん争そうだよ？　偽物なのか本物なのか良く解わからないぐらいに、はらわたをグズグズに弄いじくってあげた後だけどね！」
　フランチェスカの言葉を聞きながら、少年の姿をした英霊は、徐々にその顔を歓喜の色に歪ゆがませ──やがて、堰せきを切きったように激はげしく笑い始めた。
「アッハハハハハハハハ！　アハハハハハハハハハ！」
　それに合わせて、花畑の花が全すべて地面から生はえる子供の腕へと変化し──バチバチバチバチと二人を祝福するように隣となり同どう士しの腕と手の平を叩たたき合あわせる。
　バチと──歪いびつな拍手に囲まれながら、少年の英霊は腹を抱えて笑い叫んだ。
「ばッ……ばッ……馬ば鹿かじゃない!?　ばっかじゃないの!?　ひひッ……ひははははは！　なぁ、なぁッ……なんで！　なぁんだってそんな事してるのさ！　馬鹿じゃないの馬鹿じゃないのヒハハハハ！」
　狂ったように笑い転げながら、少年は跳ちよう躍やくする。

クルクルと回りながらフランチェスカのベッドの上に飛びこむと、彼女の横に座って側そばに散らばっていた菓子の袋を開け広げた。
　そして、慣なれ慣なれしくフランチェスカの肩に己おのれの肩をすり寄せながら、開いた菓子をかじり始める。
「アハハハ！　僕が僕を喚ぶなんて、酷ひどいジョークもあったもんだよ！　モグ……っていうか、なにこれ美味おいしい。これが現代の御お菓か子し？　凄すごいね、この時代！」
「でしょー？　ま、私自身が触媒なんだもん。出てくるのは九割『私』で、もしかしてもしかしたらジルが来てくれるかなって期待してたんだけどねー」
「おいおい、ジルが聖せい杯はい戦せん争そうに来るわけないじゃないか！」
　雰囲気の良く似た二人ふたりは奇妙な事を言い合うと、ジルと呼ぶ人物について語り出した。
「それがね、来たんだよ？　ジル！　私はあのキエフの蟲使いの末裔のせいで遠くから眺める事しかできなかったけど、本当に来たの！座ざにいたんだよ？　あのジルが！」
「そりゃ凄い!?　クラスは？　セイバー？　ライダー？」
「ううん。キャスター」
「なんでさ!?　ジルがキャスターって！　ああ、僕のせいか！　ハハハ！」
　二人ふたりにしか解わからない謎なぞの会話で盛り上がった後──フランチェスカが不意に真顔になって、横に座る英えい霊れいに対して言葉を紡ぐ。
「だから私、結構本気になっちゃってさ……。予定をだいぶ早めて、この街で私が自由に遊べる聖せい杯はい戦せん争そうを開催する事にしたの！　色んな人や国を巻き込んで！」
「だったら、なんでジルを喚よばなかったの？　まあ、そりゃジルじゃ聖杯戦争勝ち残るの難むずかしいだろうけどさ」
　当然と言えば当然の疑問に対し、フランチェスカは小さく首を振っ

た。
「まあ、それは後でゆっくりと話すよ！　それより今は、最初の契約をしないとね！」
「ああ、そうだったそうだった！　これはうっかり忘れていたよ！　ところで、君は聖杯を手に入れたら何に使う？　大体想像つくけれど」
「うん、君の想像通りだと思うよ？」
「なるほどね、あの大迷宮を攻略するには、確たしかに聖杯レベルの代しろ物ものが必要だ」
　少年はベッドからピョンと飛び起き、魔ま法ほう陣じんの中心へと移動してからフランチェスカの方を振り返り、恭うやうやしく一礼する。
「問おう。貴女あなたが聖杯を求め、あるいは無限の快楽と悪夢を求め、僕を奴ど隷れいにしようという傲ごう慢まんにして愚かな姫君なるや？」
「うん！　間違いないよ！」
　すると、辺り一面に生はえていた子供の腕が、地面の下から響ひびく阿あ鼻び叫きよう喚かんと共に燃もえさかり、あっという間に白骨化して崩れ落ちた。
　そして、灰が舞まい散ちる仄ほの暗ぐらい暗くら闇やみの中で、英霊は高らかに契約の成立を宣言する。
「さあ！　契ちぎりは成された！」
　少年は両手を広げ、自分の名前を灰の中に唱うたい上あげた。

「僕の名前はフランソワ・プレラーティ！」

　そして、無邪気な笑えみを浮かべながら、約やく定じようを結ぶ言葉を続ける。
「我がマスター、フランソ……おっと、今は女の子の身体からだだから……フランチェスカ・プレラーティの忠実な僕しもべとして、命が

けで聖杯に導みちびくと約束しよう！」
「私も誓う。君が正しい栄光の中で聖杯を手に入れられるように、この魂をかけて正々堂々と聖杯戦争を勝ち抜く事を！」
　そして、少年と少女がその笑みを狡こう猾かつなものに変えた瞬しゅん間かん──
　フランソワとフランチェスカは、まったく同時にその言葉の続きを口にした。

「『嘘うそだけどね！』」

×　　　　　　　　　　×

同時刻　スノーフィールド　火力発電所地下

　街の何処どこかでフランチェスカが自らを召喚していた頃ころ──
　真なるバーサーカーを召喚しようとしていた黒魔術ウイツチクラフト専門の魔ま術じゆつ師しであるハルリは、街に複数存在する火力発電所の地下で死にかけていた。
　──うう。
　──なんで、こんな事になったんだっけ？
　霞かすむ目の端々に映る血の色を見て、彼女は己おのれがもうすぐ死ぬだろうと判断した。
　治ち癒ゆ魔ま術じゆつは得意な方だが、何しろ魔ま力りよくが枯こ渇かつしかけている。
　バーサーカーを喚よぶ為ために、万全の準備をしてきた筈はずだ。
　そして、実際には喚び出す事にも成功した筈である。
　問題は──その喚び出したバーサーカーが契約をする前に暴あばれ出だし、その一いち撃げきをモロに喰くらってしまったという事だろう。
　──ああ、でも、満足……かな。

──予想してたより……凄すごい感じのが出て来たし……。
彼女が喚よび出だした英えい霊れいが、霞かすむ視界の中に映る。
それは、異様な姿の英霊だった。
一歩進む度たびにガシャリ、ギシリ、と機き械かい音おんが響ひびき渡わたり、尚なおかつ四つ足のような体勢で部へ屋やの中を歩き回っている。
目には爛らん々らんと白はく熱ねつの明かりを煌きらめかせ、時折漏れ聞こえる呻うめき声ごえは、針先が錆さびたレコードのように掠かすれている。
──たっぷりと私の魔ま力りよくは注いであげたし……この発電所から、魔力代わりの動力源は得られる筈はず……。だから、あなたはこの先、いくらでも暴あばれられるよ……。
こちらに近づいて来る、鉄てつ錆さびに塗まみれた『それ』を見ながら、ハルリは思わず苦笑する。
──ライバルのニコラ・テスラが造ったエネルギーなんて、嫌いやだろうけどね。
──……ああ、もしかして……だからあんなに暴れたのかな？
そんな事を考えている間に、とうとう『それ』は彼女の目の前までやってきた。

四本足の蜘蛛くもか異い形ぎようと化した獅し子しをモチーフとした機械人形ロボットにしか見えない、不気味な姿をした英霊が。

──でも……おかしいな。バーサーカーだからって……流石さすがにもっと……ちゃんとした人の姿で出てくると思ったけど……。……もしかして、マズダの影響……？
──やっぱり、フランチェスカに譲ゆずらないで、キャスターで喚よべば良かったかなあ……。
そんな後悔を覚えるが、もはや全すべては後の祭りだ。
だが、ハルリは死を怖れない。

彼女は黒魔術ウイッチクラフトが専門だが、媒介の贄にえに使うのは、いつも自分自身の血だった。

今回の召喚も、魔ま法ほう陣じんは全て自分の血を流して描いている。

出血多量になりかねない程の血を流しながらも、時間をかけて、時には予あらかじめ用意した血液パックを自分で輸ゆ血けつしたり、造血を促す治ち癒ゆ魔ま術じゆつを駆使しながら。

その結果喚び出したものに殺されるのなら、自分はここまでだったという事なのだろう。

ハルリは自じ嘲ちよう気ぎ味みに微笑ほほえむと、その手をゆっくりと英えい霊れいに向かって差し出した。

「いいよ……。私自身を……あなたの贄にしてあげる……」

彼女が聖せい杯はいに願ねがう事はただひとつ。

自分の父親を異端と断じて殺し、自分の一族から全てを奪い去った『魔術社会』そのものへの復ふく讐しゆうに過ぎない。

それが時計とけい塔とうであろうとアトラス院いんであろうと、あるいは巷ちまたに点在している野良魔術師達の連合だろうと関係なかった。

ただ、魔術とは縁えん遠どおい『機き械かい』や『工業』、あるいは魔ま力りよく以外の圧倒的な『エネルギー』の力によって滅ぼせるなら、それ程の皮肉もあるまいと考えただけなのである。

──そんな下らない事に聖杯を使おうとしたから……因果応報、かな。

「さあ、私を殺せばいい。代わりに……あなたの存在が続く限り、思うままに生き続けて。あなたの姿を世界全てに見せつけてあげて。魔術の秘ひ匿とくを全て無意味にする為ために……」

最後の気力を振り絞ってそう告げたハルリは、あとはいつ殺されても構わないと英霊の一いち撃げきを待つ事にしたのだが──

代わりに彼女に降り注いだのは、聞き覚えの無い女の声だった。

「へえ。あなた、中なか々なか変わった足掻あがきかたをするのね」

　思わず閉じかけていた目を見開くと、そこには、息を呑のむ程に美しい、肌が異様に白い女の姿があった。
　──あ……アインツベルンのホムンクルス⁉
　街に来ているという話は聞いていたし、恐らくマスターの座を狙ねらっているのだろうとは思っていた。しかし、完全に隠いん匿とくしていた筈はずの召喚の場に現れるというのは、流石さすがに想定外だった。
　──ああ、そうか、やっぱりバチがあたったのかな。
　──せっかく今まで私自身を贄にえにし続けたのに……ここに来て街の人達がどうなってもいいと思ったから、魔ま術じゆつが不純になったんだ。
　どのみち殺されるなら、アインツベルンのホムンクルスでも英えい霊れいでも一いつ緒しよだろうか。
　そんな事を考えていた彼女は、そこでようやく異変に気付く。
「……え？」
　いつの間にか自分の傷が塞ふさがっており。霞かすんでいた視界も完全にクリアになっている事に。
「あ、あれ？　私……」
　治ち癒ゆ魔ま術じゆつをかけた覚えはない。そもそも魔ま力りよくが完全に枯こ渇かつしていたのだから、やりたくともできない状況だった。
　困惑するハルリだったが──更に困惑したのは、その直後に聞いた、『白い女』の言葉だ。
　彼女は横にいたバーサーカーの英霊に向かって、まるで自分の飼い犬にでも話しかけるかのような調ちよう子しで口を開いた。
「ほら、この子があなたのマスターよ？　はやく契約してあげなさい」
　□□……？

──一体、何を……。
　痛みが消えて行く代わりに、ハルリの頭の中を混乱が支配する。
　契約はまだだが、マスターの権利はまだ自分にある。
　令れい呪じゆすら持たない魔ま術じゆつ師しの言う事を聞くようなバーサーカーなどいないだろうと思ったのも束つかの間ま、彼女の常じよう識しきが続けざまにガラガラと崩れ落ちる。
「ガッ……ＭＭＭＭＭＭＭＭＭ、ママママ、マッ……マモ……ルルッルＲルルルＲＲＲＲ」
　そのバーサーカーは、『白い女』に言われるがままとなり、倒れていたハルリに対して傅かしずくように頭を下げる。
「いい子ね。そう、魔力の経けい絡らくをこの子に繋つなげてあげるの」
　次の瞬しゆん間かんには魔力のパスが繋がっており、令呪を通して相手の感覚が伝わってくる。
　そこで、ハルリは気付いた。
　自分が喚よび出だしたばかりのバーサーカーが、この『白い女』に対して怯おびえているという事に。
「あ、貴女あなた……一体……」
　ハルリの問いかけを無視し、『白い女』が声をあげた。
「それにしても運が良かったわね。たまたまここに、こんなに入りやすい『器うつわ』があるなんて」
　自分の手足をマジマジと見つめながら。感心したように頷うなずいている。
　何がなんだか解わからないといった顔のハルリを見て、白い女はゆっくりとこちらの頬ほおに手を触れる。
　刹せつ那な──ハルリは気付いた。
　彼女の手を通して伝わってくる『力』は──本来、この世にあってはならない類たぐいのものだと。
──あ、あ、ありえない……！
──こ、こんなの……英えい霊れいでもないのにこんな……！

──いや、英霊だってこんな濃のう密みつな『力』は……！
　そんなハルリの怯えをどう受け取ったのか、白い女──
　正せい確かくには、白い女の中にいる何かが、自信に満ちた笑顔えがおで言った。
「安心しなさい。こう見えて人間は好きなのよ？」
　その言葉には暖かみがあるものの、熱ねつがまるで心に届かない程の『高み』から投げ下ろされているかのようだった。
「私が来たからには、あなた達人類をちゃんと支配してあげるから！」
　そして、そんな彼女に賛さん同どうするかのように、ハルリのサーヴァントである筈はずの機き械かい人にん形ぎようが、白い女を讃たたえるかのような咆ほう吼こうを上げる。
「■■
ＲＲＲＲｒｒｒＲＲＲ□□□□□□□□」

　──何？
　ハルリは、死の恐怖から解放された代わりに、まったく別種の恐怖に囚とらわれる事となった。
　彼女はまだ知らない。
　自分が用意したとある英霊の『触媒』の影えい響きようで──アインツベルンのホムンクルスの中に、どれほど恐ろしいものが宿ってしまったのかという事を。

　かくして、役者は出そろった。
　誰だれもが観かん客きやくであり、誰もが批評家であり、そして誰も彼もが演者でもあるスノーフィールドの舞ぶ台たい劇げき。

　ただ一人ひとり──
　幕まく間あいから舞台上に辿たどり着つけない、未いまだ聖せい杯はいより『役』を与えられぬ少年を除いて。

かつて自分が少年兵となった瞬しゆん間かんを、シグマ自身は覚えてはいない。

物心がついた頃には既に幼年兵としての生き方を叩たたき込こまれており、五歳になるかならぬかの時に銃を撃うつことを強しいられた。更には奇妙な魔ま術じゆつ実じつ験けんにより、意図も分からぬ肉体と精神の苦痛に耐え続けるのが日につ課かという状態だった。

魔ま術じゆつ使つかいによる部隊を造り上げ、敵国に対する魔術的な軍事作戦を行う。

それが目的として造られた部隊の一員だったそうだ。

同じように魔術の素養がある者──偶然発はつ露ろしたものであろうと、あるいは遠とお縁えんに魔術師がいるものであろうと、身体からだに『魔ま術じゆつ回かい路ろ』を持つ兵士達を意図的に集め、同じように魔術回路が僅わずかなりとも存在している女性兵達とまじわらせたのだという。

そうして生まれた子供達の中から、実用的なレベルの魔術回路を持つ者達が二十四名選抜され、ギリシア文字のコードネームが与えられた。

国民には存在すら知らされぬ、名も無き特殊小隊。

秘ひ匿とくなどはもはや関係なく、異質の力をもってして敵国にダメージを与える──そんな思惑で造られた部隊は、事前に動きを察した時計とけい塔とうをはじめとする魔ま術じゆつ師し達の手によって、基き盤ばんの弱かった当時の独裁政権ごと叩たたき潰つぶされた。

彼が自分の正せい確かくなルーツを知ったのは、叩き潰される事によって元政府から解放された後なのだが、シグマはそれが真実であろうと偽りであろうと、どうでも良い事だと思っている。

母体が知恵を付けて魔術を学ばぬようにと、自然な流れで出産を促した。
　そして、母体は名を付ける間もなく子を奪われ、子は母の姿が記き憶おくに残らぬ内に政府の道具としての道を歩む事となる。
　現在はその幼少期の経けい験けんを元に魔ま術じゆつ使つかいの傭よう兵へいとなっているのだが、それこそ雇い主にやれと言われた事をやっているだけなので、語る程の事はなかった。
「本当に、他に特に語る事がないな……」
「淡々と話してはいるけれど、端はたから見るとずいぶんと過酷な人生だよ？」
　影かげ法ぼう師しを名乗る者達と円滑にコミュニケーションを取る為ために、とりあえず自分がどういう人間かについて語ったシグマだが、改めて自分を見つめ直してみて、他人に押しつけられた事だけをやってきた人生なのだなと頷うなずいた。
　それが虚むなしいという感覚もあまりない時点で、やはり自分は少しおかしいのかもしれないと考えるが、今さらどうにもならない事だろう。
　すると、次いで現れた蛇へび杖づえの少年が言った。
「母親は、どうなったんだい？」
「本当かどうかは解わからないが、極きよく東とうの聖せい杯はい戦せん争そうに魔術師の助手として参加して死んだそうだ。……衛え宮みや切きり嗣つぐという魔術師だ」
「魔術師の名前をハッキリと覚えているっていう事は、何か思うところでもあるのかな？」
「いや？　どうだろうな。助手だったという事以外、二人ふたりの関係すら知らないし、そもそも俺おれは母の顔も名前も知らないんだぞ。衛宮切嗣の名前を知っているのは、魔術使いの傭兵の間で、伝説の男として扱われている有名人だからさ」
　魔ま術じゆつ師し殺ごろしという渾名あだなで畏おそれられたフリーランスの魔術師であり、アインツベルンに雇われるまでは世界各

地で危険な任務を次々とこなしていた凄すご腕うでの男。
　冬ふゆ木きの第だい四よ次じ聖せい杯はい戦せん争そうでは終しゅう盤ばんまで勝ち上がったと雇い主から聞いているが、自分の母はどうやらその過程で死んだらしいとの事だった。
「ただ……自分の意志でその男について行ったんだとしたら、母が少し羨うらやましくはある」
「羨ましい？」
「少なくとも母は、感情はどうあれ、衛宮切嗣という男の中に生きる意味を見み出いだしていたんだろう。だが、俺には何もないし、尊敬する人間も、仇かたきだと狙ねらう相手もいない」
　自じ虐ぎゃくというよりも、淡々と事実だけを並べる調ちよう子しで語るシグマに対し、船長が言った。
「なに、お前にも生きる理由はできるさ。何度か死に物狂いになれば、自然と縋すがるものを見つけるというものだ。死地を潜くぐり抜ぬけろ小僧。神に抗あらがい続つづけろ。決して受け入れるな。お前の生きる証あかしはその先にこそ生まれるものだ」
　生きる理由を得る為ために死地を潜り抜けるのでは本末転倒だ。
　他人ひとごとだからと好き勝手言っているのだろうと思い、無視しようとしたシグマだが──船長の方は実に楽しそうに、シグマの背後、部へ屋やの入口の方に目を向けて言った。
「ほれ、早速最初の試練がやってきたぞ？」
「？」
　シグマが振り返ると、そこには一つの『影かげ』が立っていた。
　正せい確かくには、影のような黒くろ装しよう束ぞくに身を包んだ少女が。
「君は……？」
　あるいはこの少女も『影かげ法ぼう師し』の一種だろうかと思った瞬しゅん間かん、シグマは違和感に気付いた。
　今まで、影法師は基本的に一体ずつしか現れなかった。だが、現在は船長と少女が同時に視界に入った気がする。

それに気付いた時は既に遅く――一瞬でシグマの眼前にまで迫ったアサシンの少女が、感情を消し去った声で問い掛けた。

「貴様は……聖せい杯はいを求める魔ま術じゆつ師しか？」

　そして、シグマはこの瞬間より、理不尽な『試練』に足を踏み入れる事になる。
　誰だれに求められるわけでもなく――
　ただ、自分が何者かを知る為だけの試練へと。

　試練を越えた先に得られる『自分』というものが、栄光か絶望かも解わからぬままに。

スノーフィールド　市街地

　━━俺おれは、何を見ている？
　右手の義手を押さえながら、警けい察さつ署しよ長ちよう配下の特殊部隊『二十八人の怪物クラン・カラテイン』の一人ひとりである青年が、目の前の光景を前に息を呑のんだ。
　彼の視界に映るものは、頭から奇妙な布を被かぶった、赤黒い肌の弓兵だ。
　警察署内で戦ったアサシンとは違う。その後に自分の右手を奪った怪物とも違う。
　ただ、ただ━━その英えい霊れいは、強かった。
　果たして自分達の持つ宝ほう具ぐが全すべて完全な力を得たとしても、通じる気がまるでしない。
　━━ああ、そうか。これが本当の英えい雄ゆうという奴やつか。
　思わず納得しかけて、警官は歯を食いしばる。
　━━……こんな奴が？
　━━街を破は壊かいし、小さな子供を殺そうとしてるこんな奴やつがか？
　彼の周りには、既に倒れた特殊部隊の仲間達が何人か転がっている。
　強さこそが正義だというのならば、確たしかに目の前のこの弓兵は『正義』なのかもしれない。
　だが、それを認めてはならないという、最後のプライドが警けい官かんの心に勇気を灯ともした。
　そして、彼は改めて息を呑のむ。

──俺おれは、何を見ている？
彼の視界に映るのは、自分達と同じ警官の姿。
だが──その警官は自分達の仲間ではないし、明らかに異常だった。
──その化け物と戦い続けている『あいつら』は一体何者だ？
弓兵の周りに現れては消え、消えては現れ、幾度となくその身をねじ切られようと、矢で射貫かれようと、同じ警官がその英えい霊れいに挑み続けているではないか。
こちらからの攻こう撃げきはまったくのノーダメージ。それにも拘かかわらず、もう何分も絶え間無く戦い続けている。
そんな奇妙な光景が暫しばらく続いたところで、弓兵が重々しく口を開いた。

「弱き者よ……名を聞こう」

するとその警官は一歩距きょ離りを取り、ニヤリと笑いながら言葉を返す。
「私に名など存在しない」
そして、気付けば警官の姿は二人ふたりに増えており、増えた警官が同じ声で言葉を紡ぐ。
「偉大なる英えい雄ゆうよ。時代と共に姿を変え、偉業を練り上げながら神かみ代よの伝説の中に生き続ける存在よ。吹けば飛ぶようなただの犯罪者である私が、君に言える事は一つだ」
更に警官の数が増え、四人となった警官が四方から弓兵に向かって断言する。
「君にはそれだけの覚悟を抱く理由があるのだろう。……だが、その覚悟をもって君が神の威光を否定すると言うのならば！　神の悪行も善行も全すべて否定し、捨て去らんとするのならば！」
警官以外にも様々な姿を取った八人の『何か』。その叫びが、市街地の路上に木こ魂だまする。
「……如何いかなる強大な力を持とうとも、今の君は、確かに君が望

んだ通りの『人間』だ」
　十六の雄叫おたけびが、弓兵の魂に向かって語りかける。
「破落戸ならずものに成り下がり、人に成り上がった英雄よ！　君が如何なる大英雄であろうとも！　世界を破壊する力を持とうとも！」
　三十二の不敵な笑えみが弓兵を取り囲んだかと思うと──その人ひと影かげが全て、最初の一人ひとりへと吸い込まれるように消えて行く。
「本質が人である限り……君はただの力持たぬ『殺人鬼』に狩られる事となるだろう」

　そして、警けい官かんと赤黒い弓兵の目の前で──
　殺人鬼ジャック・ザ・リッパー名も無きバーサーカーは、その言葉を貫き叫ぶ。
　己おのれの本質を曝さらけ出だし、大だい英えい雄ゆうの命脈を止めるべく撃うち放はなつ宝具の名切り札を。

「──『悪霧は倫敦の暁と共に滅び逝きてフロム・ヘル』！」

　壊かい乱らんせし聖せい杯はい戦せん争そうの最中さなか、戦いは静かに連れん鎖さを始める。
　数すう奇きな運命の繋つながりは、まるで英えい雄ゆうと魔ま術じゅつ師し達に語りかけるかのようだった。

　弱者達よ、強者に挑め──と。

next episode　[Fake04]

成なり田た良りょう悟ご
二巻までの著者近影と同じデザイナーさん（５１６０さん）からシステム手帳を購入したのですが、この重厚にして幻想的なデザインこそ正しく「Ｆａｔｅ」の魔術師っぽい代物だと悦び勇みつつ、年を考えずに一人で魔術師ごっこをする35歳埼玉在住作家。

イラスト/森もり井いしづき
フラフープに挑戦中です。